

一般国道49号

阿賀野バイパス関係発掘調査報告書XI

山口野中遺跡III

2016

新潟県教育委員会

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道49号

阿賀野バイパス関係発掘調査報告書XI

やま ぐち の なが
山口野中遺跡III

2016

新潟県教育委員会

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道 49 号は、太平洋側の福島県いわき市と日本海側の新潟市を結ぶ主要幹線道路です。また、同路線は沿線市町村と新潟市を結び、日常生活や地域経済を支える重要な基盤道路としての役割を果たしています。

しかし、現道は阿賀野市街地での幅員減少等の問題を抱え、近年の著しい交通量の増加に十分対応できておりません。その結果、交通混雑、交通騒音、交通事故の増加等、生活環境に悪影響を与える様々な問題が生じています。

そこで、阿賀野市六野瀬から同市下黒瀬を結ぶ延長 13.7km の阿賀野バイパスの建設が計画されました。同バイパスは、安全で円滑な交通の確保と都市機能活性化のために重要な役割を果たすものと大いに期待されています。

本書は、阿賀野バイパスの建設に先立ち、2015 年度に実施した山口野中遺跡の発掘調査報告書です。調査面積は小さいものの、大型の掘立柱建物や道路を検出し、中世の町の一端を捉えることができました。また、調査区を横断する市道七島月崎線の前身の道路を検出し、その設置が江戸時代にさかのぼることが明らかとなった点も、近世の北蒲原地域の交通を考える上では貴重な成果といえるでしょう。

今回の調査結果が、地域の歴史を解明するための基礎資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御支援と御協力をいただいた阿賀野市教育委員会、並びに地元住民の方々、そして、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別の御高配をいただいた国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所に対して厚くお礼申し上げます。

2016 年 3 月

新潟県教育委員会

教育長 高井盛雄

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県阿賀野市大字月崎地内に所在する山口野中遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は一般国道49号阿賀野バイパスの建設に伴い国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所（以下、国交省）から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したものである。
- 3 発掘調査は県教委の依頼を受けた公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が実施した。発掘作業、整理作業及び関連諸工事等の一部業務は株式会社古田組に委託した。発掘調査面積は1,479m²である。
- 4 出土品及び調査に係る各種資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管している。データの有無や閲覧希望は、県教委に問い合わせ願いたい。
- 5 遺物の注記は、調査年度と遺跡の略記号を合わせ「15ヤマノ」とし、出土地点・遺構名・層位等を続けて記した。
- 6 本文の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 7 遺構番号は種別に関わりなく通し番号とし、本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。
- 8 引用文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、VI章を除き巻末に一括して掲載した。
- 9 作成した図版のうち、既成の地図を使用した場合は、それぞれにその出典を記した。
- 10 調査成果の一部は、現地説明会（2015年6月27日開催）、広報紙『埋文にいがた』No.91で公表しているが、本書をもって正式な報告とする。
- 11 自然科学分析は、株式会社パリノ・サーヴェイに委託し、その結果を第VI章に掲載した。
- 12 本書の編集は小野本教（埋文事業団）が行った。第VI章を除く執筆は、第IV章2B・Dを城前喜英（株式会社古田組）、第IV章2Cを渡邊大士（同）。それ以外を小野本が担当した。
- 13 遺構図のトレース及び各種図版作成・編集は有限会社不二出版に委託した。
- 14 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多くの御教示・御協力をいただいた。ここに記して厚く感謝申し上げる。（敬称略、五十音順）

相羽重徳　安藤正美　飯村　均　　大橋康二　近藤真佐夫　前嶋　敏　　水澤幸一　村上章久

吉田　博　　渡邊ますみ

会津若松市教育委員会　阿賀野川土地改良区　阿賀野市建設課　阿賀野市生涯学習課

新発田市立図書館　胎内市教育委員会　月崎集落　新潟県立文書館　新潟市北区郷土資料館

新潟市歴史文化課　見附市教育委員会

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査経過	2
3 本発掘調査・整理体制	3
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	4
1 遺跡をめぐる地理的環境	4
2 白河荘と中世の遺跡	4
3 遺跡周辺の近世	7
A 月崎村と水原代官所	7
B 道路の変遷	8
第Ⅲ章 調査の概要	10
1 グリッドと調査区の設定	10
2 基本層序	10
第Ⅳ章 遺構	12
1 記載方針と分類	12
2 遺構各説	13
A 掘立柱建物	13
1) 概要	13
2) 各説	15
B 井戸	16
1) 概要	16
2) 各説	16
C 土坑	16
1) 概要	17
2) 各説	17
D 火葬関連遺構	18
1) 概要	18
2) 各説	19
E 道路と側溝	20
1) 概要	20
2) 各説	20
F その他の溝・性格不明遺構	22
1) 概要	22
2) 各説	22
第Ⅴ章 遺物	24
1 概要	24
2 近世の遺物	24
3 中世の遺物	25
A 土器・陶磁器	25

B 土器転用研磨具	26
C 金属製品・鍛冶関連遺物	26
D 石 製 品	27
4 古代の遺物	27
5 縄文時代の遺物	27
第VI章 自然科学分析	28
1 はじめに	28
2 放射性炭素年代測定	28
A 試 料	28
B 分析方法	28
C 結 果	29
D 考 察	31
3 花粉分析・植物珪酸体分析	32
A 試 料	32
B 分析方法	32
1) 花粉分析	32
2) 植物珪酸体分析	33
C 結 果	33
1) 花粉分析	33
2) 植物珪酸体分析	33
D 考 察	34
1) 遺構の性格および栽培植物	34
2) 古 植 生	35
第VII章 調査のまとめ	38
1 「往来道」からみた近世北蒲原の交通事情	38
A はじめに	38
B 近世道路の規模と構造	39
C 「往来道」の地域史的意義	39
2 中世の集落について	41
A はじめに	41
B 遺構の変遷	41
C 境塚遺跡との関係	43
3 中世の道路構造について	44
《要 約》	47
《引用・参考文献》	48
《観 察 表》	50

挿図目次

第 1 図 阿賀野バイパスの路線と遺跡の位置	1	第 19 図 SB1051 模式図	15
第 2 図 試掘トレントと調査区の位置	2	第 20 図 土坑の分類	17
第 3 図 周辺の地形と遺跡分布	5	第 21 図 火葬土坑模式図	19
第 4 図 白河莊の範囲と地地区分	6	第 22 図 SD801A 出土ガラス製目薬瓶	20
第 5 図 大正期の調査区周辺	8	第 23 図 道 1 の変遷模式図	21
第 6 図 明治 23 年の月崎集落と調査区	8	第 24 図 類似する線刻	25
第 7 図 17 世紀中葉の交通路	9	第 25 図 暦年較正結果 (1)	30
第 8 図 18 世紀前半の交通路	9	第 26 図 暦年較正結果 (2)	31
第 9 図 19 世紀前半の交通路	9	第 27 図 試料採取位置	32
第 10 図 グリッド設定図	10	第 28 図 植物珪酸体含有量	34
第 11 図 基本層序	11	第 29 図 花粉化石	36
第 12 図 遺構の平面・断面形態の分類	12	第 30 図 植物珪酸体	37
第 13 図 遺構覆土の堆積状況の分類	12	第 31 図 水上・本開発遺跡の北陸街道概念図	39
第 14 図 掘立柱建物の計測位置	13	第 32 図 近世北蒲原の交通路	40
第 15 図 掘立柱建物の分布と主軸方向	14	第 33 図 周辺調査区との関係	41
第 16 図 SB774 模式図	15	第 34 図 道 3・道 4 の変遷	43
第 17 図 SB775 模式図	15	第 35 図 百津潟周辺の路面に砾を用いる道路	46
第 18 図 SB945・776 模式図	15		

表 目 次

第 1 表 中世の遺跡	4	第 5 表 花粉分析結果	33
第 2 表 溝長 50cm に含まれる砾の数量と サイズ	20	第 6 表 植物珪酸体含有量	34
第 3 表 道 1 出土遺物	20	第 7 表 近世道路遺構の調査例	38
第 4 表 放射性炭素年代測定および暦年較正 結果	29	第 8 表 暦年較正値	42
		第 9 表 遺跡の年代と並行関係	43
		第 10 表 側溝から多量の砾を出土した道路	44

図版目次

【図面図版】

- 図版 1 調査範囲図 (1) 山口野中遺跡全体図
 図版 2 調査範囲図 (2) 5・6 区近世遺構
 図版 3 調査範囲図 (3) 5・6 区中世遺構
 図版 4 近世道路遺構分割図 (1)
 図版 5 近世道路遺構分割図 (2)
 図版 6 中世遺構分割図 (1)
 図版 7 中世遺構分割図 (2)
 図版 8 中世遺構分割図 (3)
 図版 9 中世遺構分割図 (4)
 図版 10 遺構個別図 (1) SB774
 図版 11 遺構個別図 (2) SB775
 図版 12 遺構個別図 (3) SB776・777
 図版 13 遺構個別図 (4) SB945・1052
 図版 14 遺構個別図 (5) SB1051

- 図版 15 遺構個別図 (6) SE843・1030・SK804・
 719・SC841
 図版 16 遺構個別図 (7) SK609・611・613・
 615・617～619・623・624
 図版 17 遺構個別図 (8) SK607・608・620・
 630・654・665・674・675・680・687・
 703・710・741・761・944
 図版 18 遺構個別図 (9) SK648・718・725・
 732・824・842・884・P705・827・832
 図版 19 遺構個別図 (10) 道 1・道 2
 図版 20 遺構個別図 (11) 道 3
 図版 21 遺構個別図 (12) 道 4・SD805・821
 図版 22 遺構個別図 (13) SD601・606・612・
 637・660・661・663・711・825
 図版 23 遺構個別図 (14) SD808・810・819

- 図版 24 近世・中世の土器
- 図版 25 中世の土器・土器転用研磨具・金属製品・鍛冶関連遺物、古代・縄文時代の土器
- 図版 26 石器・石製品
- 【写真図版】
- 図版 27 調査区全景
- 図版 28 遺構 1 道 1・道 4
- 図版 29 遺構 2 SB774・775
- 図版 30 遺構 3 SB776・777・1051
- 図版 31 遺構 4 SE843・1030・SK719・804・SC841
- 図版 32 遺構 5 SK623・624・609・611・615・618
- 図版 33 遺構 6 SK613・619・617・620・687
- 図版 34 遺構 7 SK607・648・703・710・944・718・725・732
- 図版 35 遺構 8 SK824・842・884・SD601・612・606・637・711
- 図版 36 遺構 9 SD810・6 区南西側溝群・SD821・805・806・1046
- 図版 37 遺構 10 SD806・815・819・807・道 1・SD801・802
- 図版 38 近世・中世の土器
- 図版 39 中世の土器・土器転用研磨具・金属製品・鍛冶関連遺物、古代・縄文時代の土器
- 図版 40 石器・石製品

第Ⅰ章 序 説

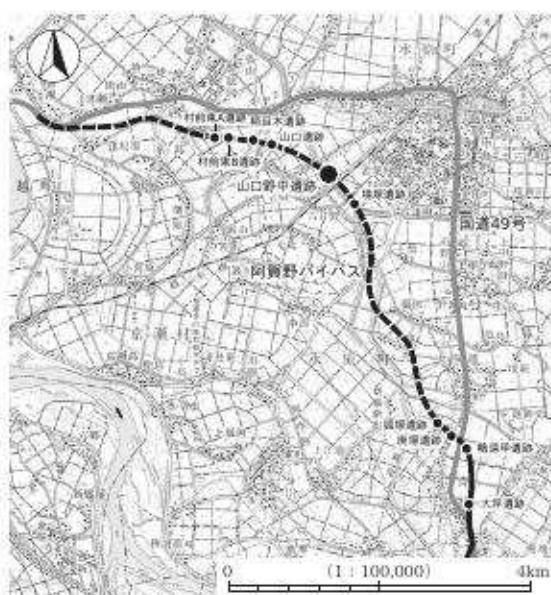
1 調査に至る経緯

一般国道49号(福島県いわき市～新潟市)は、太平洋側と日本海側を結ぶ重要な幹線道路である。県内では、沿線の阿賀町・阿賀野市と新潟市を結ぶ地域幹線道路として重要な役割を果たしている。道路は阿賀野市の市街地(旧安田町・旧水原町・旧京ヶ瀬村)を通過しており、幅員が狭小なため、その交通量に対応できず、交通混雑、交通騒音、交通事故等都市機能や生活環境に与える影響が問題となっている。これらの問題を解消し、安全かつ円滑に交通を処理することを目的に、「一般国道49号安田バイパス」(阿賀野市六野瀬～同市寺社間5.6km)と「一般国道49号水原バイパス」(阿賀野市寺社～同市下黒瀬間8.1km)が計画された。これら二つのバイパスは、2004年の市町村合併に伴う阿賀野市の誕生を機に、「阿賀野バイパス」と呼称されることもある(第1図)。

阿賀野バイパスのうち、安田バイパスは1977年に事業化され、1979年に用地買収に着手、工事着手は1981年である。1985年に六野瀬～寺社間の4.3kmで暫定供用され一時事業が中断した。1998年に同事業が復活し、寺社地内未供用区間1.3kmの用地買収が開始された。これを受け国交省と県教委との間で、建設用地内における埋蔵文化財の取扱い、試掘調査に関する協議が本格化し、2003年に国交省から試掘調査の依頼を受けた県教委は、埋文事業團に実施を委託した。試掘確認調査の結果、周知の遺跡である大坪遺跡の調査範囲を確定した。また、鴨深甲遺跡を新遺跡として登録した。両遺跡の本発掘調査は大坪遺跡を2004年度、鴨深甲遺跡を2005年度に実施した。

水原バイパスは、1999年3月に都市計画道路として決定され、翌2000年4月に事業化、2003年度から用地取得が開始された。これを受けて国交省と県教委との間で、建設用地内における埋蔵文化財の取扱い、試掘調査に関する協議が本格化した。2005年4月、国交省から試掘調査の依頼を受けた県教委は、埋文事業團に実施を委託した。これ以降、試掘調査が本格化し、庚塚遺跡(2005年度)・狐塚遺跡(2006年度)・村前東A・村前東B遺跡・柄目木遺跡・山口遺跡(2007年度)・境塚遺跡・新町遺跡・石船戸東遺跡(2008年度)・蕪木遺跡・向野遺跡(2010年度)を新遺跡として登録した(境塚遺跡は周知の遺跡の範囲変更)。本発掘調査は2007年度から本格化し、2015年度までにすべての遺跡の調査に着手している。

山口野中遺跡は2008年1月に県営湛水防除事業に伴う阿賀野市教育委員会による試掘調査で発見された遺跡である。遺跡は安野川の両岸に約



第1図 阿賀野バイパスの路線と遺跡の位置

(国土地理院発行「新潟」「新津」1:50,000原図)

2 調査経過

50,000m²にわたって広がり、阿賀野バイパス建設予定地内における本発掘調査面積は23,271m²である。2012年3月、国交省から委託を受けた県教委は、埋文事業団に本発掘調査の実施を依頼し、埋文事業団は2012年度に上層（中世）・中層（古代・中世）・下層（縄文）の延べ9,128m²の調査を行った。なお、中層・下層については、上層の井戸下半部の調査に伴い、部分的に調査した。2013年度は、調査区内を走る農道・用排水路、工事用道路部分のほか、バイパス建設に伴う盛土の影響範囲を含めた上層・中層・下層の延べ14,857m²の調査を実施した。

続いて2015年度には、阿賀野バイパスが市道七島月崎線（第2図では町道新崎月崎線）及びJR羽越本線と立体交差する橋脚部分の調査を行った。依頼された発掘調査面積は延べ2,292m²（中世1505m²、縄文時代787m²）であるが、市道の盛土の法面と調査区が重なる部分は安全面を考慮して調査を行わなかつた。この部分については、国交省・県教委との協議により、バイパス工程施工前に改めて調査を行うこととした。

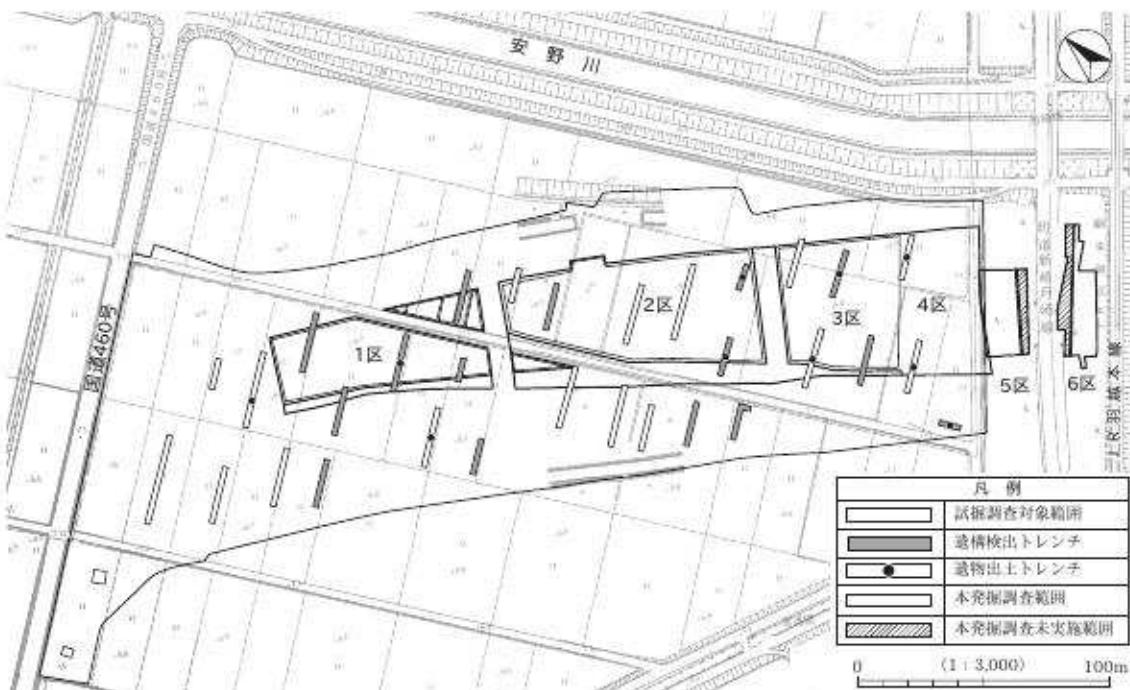
2 調査経過

今回の調査区は市道七島月崎線をはさんで2か所に分かれるため、前回調査までの呼称を継承して北西側を5区、南東側を6区とする。当該地は、5区が調査開始前まで防風林として利用されていたことなどから試掘調査を行っていない（第2図）。

本発掘調査は、2015年4月15日から8月7日まで行った。表土掘削は5区、6区の順に5月1日まで行い、遺構検出以降の作業は両区を同時並行で進めた。

5区は遺物包含層が残存しておらず、現地表面の直下で中・近世の遺構を検出した。防風林の杉の根株が遺構検出面まで及んでおり、その除去に時間を要した。

6区は現地表面の直下で砂利敷の道路を検出した。この道路は、市道七島月崎線が現位置に移転するま



第2図 試掘トレンチと調査区の位置

で使用されていたものであることが阿賀野市建設課への問い合わせで判明したため、現代の搅乱と位置付けて重機で掘削を進めた。しかし、砂利敷の両脇で側溝を検出し、そこから陶磁器類が出土したことから、道路の敷設が近世以前に遡る可能性もあるとみて調査対象に加えた。この道路遺構の調査が完了した後、中世面の調査に移行した。

両地区の中世の調査がおおむね完了した6月19日に航空写真を撮影した。続いて6月27日に、隣接する境塚遺跡と合同で現地説明会を開催し、200名を超す参加者を得た。

現地説明会終了後、5区で縄文時代の遺構の確認のために重機で間層掘削を開始したところ、20cmほど下げた時点で多数のピットを検出した。これらは上面で検出したピットと組み合って掘立柱建物を構成するものがあることから、時期が異なるものではなく杉の根の影響により上面で確認できなかった遺構と判断した。これらの調査後、2012年度の調査で縄文時代の遺物包含層とされた面まで重機で掘り下げるが、遺構・遺物は確認できなかった。7月2日に県教委が終了確認を行い、7月6日から6区に先行して埋め戻しを開始した。

6区では、調査の過程で、境塚遺跡から続く中世の道路が南西の調査区外を通る可能性が高まったため、国交省の許可を得て調査区を若干拡張した。この結果、境塚遺跡から続く道路と6区で検出していた道路が同時期に機能していたことが判明し、中世の街並みを復元する手がかりが得られた。7月15日に、拡張部分を含めて再度航空写真を撮影した。なお、中世の調査の過程で、完掘した遺構の断面から縄文土器の破片が若干出土していたため、調査区の拡張と並行してそれらが出土したレベルまで人力で掘り下げたが、遺構は検出されなかった。これにより、6区にも縄文時代の土地利用痕跡は存在しないものと判断した。8月7日に埋め戻しも含めてすべての作業を終了した。

整理作業は、遺物の洗浄・注記等の基礎的な作業を現地で発掘調査と並行して進めた後、株式会社古田組事務所で遺構図面の整理や遺物の実測等の作業を行った。報告書の編集作業は、有限会社不二出版に各種原稿・原図・レイアウト図案を支給し、印刷用データで納品を受け、2015年度に印刷・刊行した。

3 本発掘調査・整理体制

調査期間 2015年4月15日～8月7日

整理期間 2015年9月14日～2016年3月31日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 高井 盛雄）

調 査 公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

総 括 土肥 茂（公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）

管 理 松田 祐（ 同 総務課長）

庶 務 仲川 国博（ 同 総務課班長）

調査総括 鈴木 俊成（ 同 調査課長）

指 導 沢田 敦（ 同 調査課本発掘調査担当課長代理）

調査担当 小野本 敦（ 同 調査課班長）

現場代理人 陶山詔行（株式会社 古田組）

調 査 員 城前喜英 渡邊大士（同）

補 助 員 岡村彩子 笹井 彩（同）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

遺跡の地理的・歴史的環境については、既刊の報告書で詳しく解説されているので、地理的環境と中世の遺跡についてはこれらを引用・参照しつつ簡潔に述べる。また、今回新たに検出した道路遺構に関して近世の月崎村の動向について触れる。

1 遺跡をめぐる地理的環境

山口野中遺跡が所在する阿賀野市の地勢は、東に五頭連峰と笛神丘陵、西に阿賀野川とその支流が作り上げた沖積平野から構成される。五頭連峰の西側には、標高100m前後の笛神丘陵が約18kmにわたって広がり、五頭連峰と笛神丘陵の間には、標高約30～40m前後の村杉低地帯と呼ばれる狭長な平地が南北方向にのびている。また、笛神丘陵の南西には標高約20～30m前後の上野林段丘がある。五頭連峰に源流を発する折居川・大荒川・安野川・都辺田川などの河川は村杉低地帯と笛神丘陵を横断して北西・西方向へ流れ、これらが運搬する土砂が五頭山西麓・笛神丘陵裾部に扇状地を形成している。

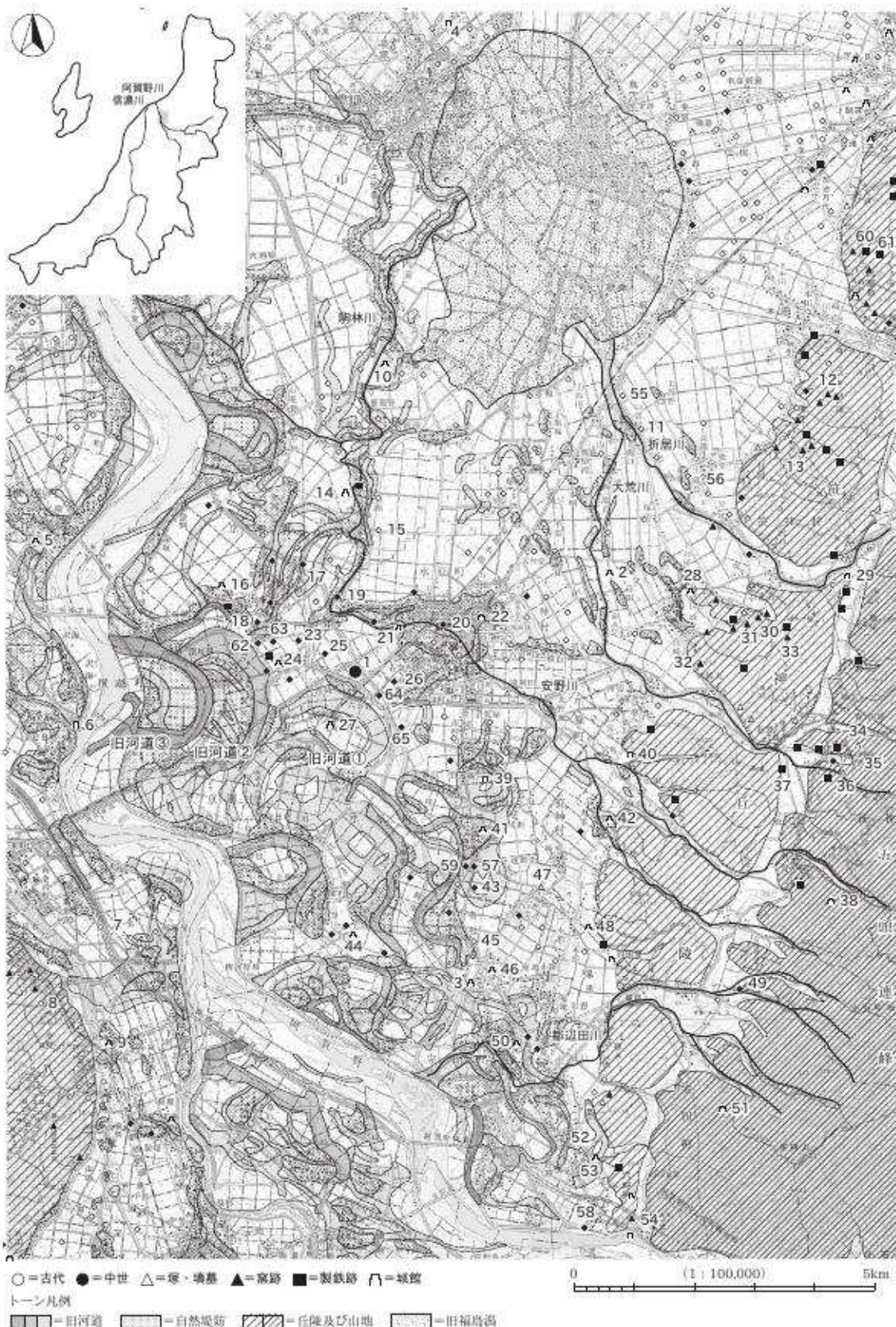
阿賀野川は、長い年月をかけて氾濫を重ねながら徐々に東から西へと流路を変え、沖積平野に旧河道の痕跡とこれに沿う自然堤防を残してきた。山口野中遺跡周辺においても、中世以降3回の変遷を経て現在の流路に落ち着いた様子が地形からうかがわれる。第3図に示した旧河道①は「百津潟」として近世の絵図や現在の地名にその名をとどめている。

2 白河荘と中世の遺跡

白河荘は、こうした自然条件のもとに成立した中世荘園である。中野豈任は、白河荘の四至と史料に見える上条（水原・船江条、山浦四箇条）、下条（安田条）を第4図のように比定している。山口野中遺跡や境

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	道路名	時代	No.	遺跡名	時代
1	山口野中	縄文・古代・中世	18	街道上	中世	35	日洗沢中世墓域	鍾倉～室町	52	北輝	平安～南北朝
2	淹沢尾敷跡	室町	19	羽音塙	中世	36	蓬古野中世墓域	鍾倉～室町	53	六野瀬御路	南北朝～室町
3	字見尾敷跡	不明	20	七面堂	中世	37	今板	室町	54	春坂山中世墓跡	中世
4	城山館跡	室町	21	下条館跡	室町	38	村杉城跡	室町	55	般若西	吉原・古代・中世
5	横越館跡	室町	22	水原館跡	室町	39	野地城跡	室町	56	安本杉	平安・鍾倉
6	長崎（城館）	室町	23	柄日本	古代・中世	40	山浦城跡	室町	57	庚塙	古代・中世
7	相池寺道上	平安・中世	24	下ノ橋館跡	室町	41	坂越館跡	室町	58	六野瀬	縄文・弥生・中世
8	受古澤	縄文・平安・中世	25	山口	弥生・古代・中世	42	大室城跡	室町	59	乳塚	弥生・中世
9	大畠館跡	中世	26	三辻館跡	弥生・古代・中世	43	鷹渕甲	平安・中世	60	真木山B	古代・中世
10	良坂館跡	室町	27	七高館跡	不明	44	分田勘跡	室町	61	真木山C	古代・中世
11	綾堤	古墳～中世	28	猿國城跡	南北朝	45	大坪	縄文・弥生・平安・中世	62	村前東A	古代・中世
12	北沢	中世（鍾倉）	29	女堂館跡	室町	46	物見山砦跡	不明	63	村前東B	中世
13	義兵工沢窯跡	室町	30	鬼沢窯跡	室町	47	横峰経塚群	不明	64	境塚	縄文・弥生・古代・中世
14	網林要害跡	室町	31	猿沢中世窯跡	室町	48	手代山砦跡	不明	65	新町	平安・鍾倉・室町
15	土居内西	平安・中世	32	柳兵衛沢窯跡	室町	49	滝山	室町			
16	城館跡	不明	33	背中糞窯跡	鍾倉	50	安田城跡	室町～江戸			
17	大瀬	中世	34	鰐沢中世墓域	鍾倉～室町	51	赤松山城跡	不明			

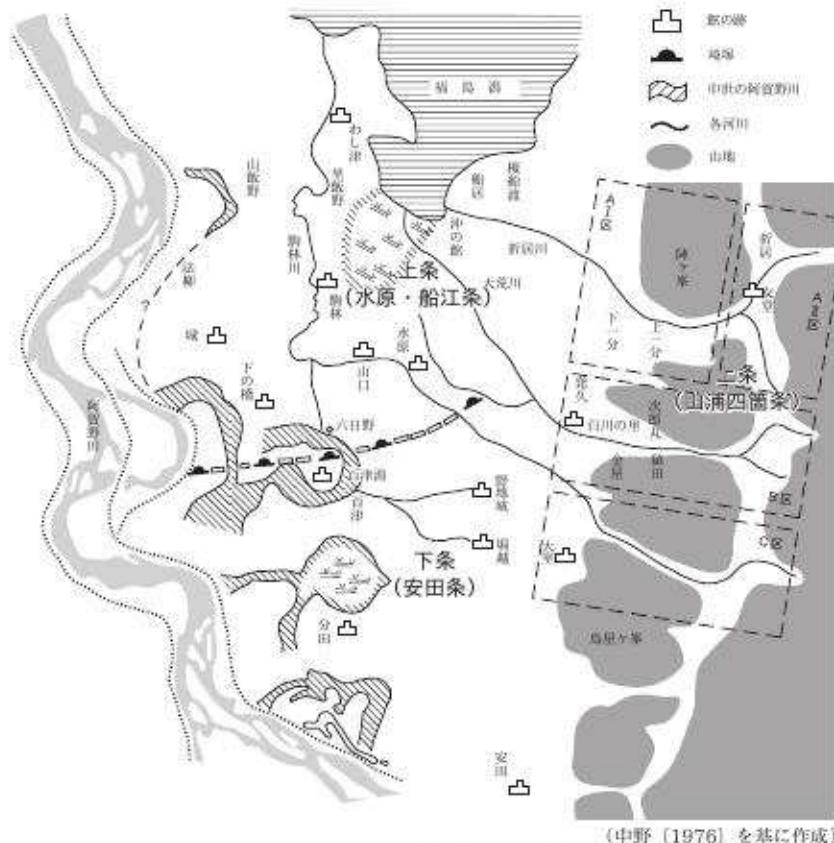
第1表 中世の遺跡



第3図 周辺の地形と遺跡分布

(国土地理院地形図「新発田」「新津」「津川」1:50,000を改変)

(建設省北陸地方建設局「阿賀野川水害地形分類図」・新潟県教育委員会「福島潟」近傍の干拓地を合成、改変)



第4図 白河荘の範囲と地域区分

塚遺跡は上条と下条の境界付近に位置し、「境塚」の小字名はまさに境界を明示する塚に由来するという〔中野 1976〕。中野の示した「境塚」には中世以降に降るものも含まれるが〔荒川ほか 2012〕、白河荘の領域と地域区分の大枠については現時点においても変更の必要を認めない。

文献史料からみた白河荘の成立と展開については先行研究や自治体史に詳しい〔荻野 1986、樋口 2004、田村 2004〕。これらによれば、白河荘の在地支配の流れは、城氏が活躍した12世紀以前（1期）、大見氏が地頭として入部以降の13世紀～14世紀（2期）、越後守護上杉氏の一族が山浦四箇条に進出する14世紀後半以降（3期）に区分できる。以下、この時間軸を念頭に遺跡の動向を追ってみたい。

集落遺跡では、四面庇付きの総柱建物や木棺墓など多数の遺構を検出した大坪遺跡（45）が1期の事例に挙げられる〔荒川ほか 2006〕。遺跡の東方約900mの位置にある横峰経塚群（47）からは、城長茂を示すと考えられる「長茂」と記した墨書き碑が出土しており、あわせて城氏に関連する遺跡群と考えられる〔荒川 2007〕。

境塚遺跡（64）では、阿賀野川の旧河道①と水原市街地方面をつなぐ幅員6mの道路跡とそれに方向を揃えた建物群、やや離れた位置で堀に囲まれた居館などを検出し、川湊と結ばれた町並みが明らかとなってきた〔荒川ほか 2012、古澤ほか 2011〕。居館付近の大型井戸SE1007は井戸枠の年輪年代学的分析によって1301年に構築されたことが判明し、町場の形成と大見氏の関係が想定される〔荒川ほか 2012〕。

これら以外にも、阿賀野バイパス関連事業等に伴い、集落遺跡の調査事例は特に上条（水原・船江条）を中心に近年急速に増加している。主な遺跡としては山口遺跡〔荒谷ほか 2010〕（25）・村前東A遺跡〔加藤ほか 2010〕（62）・柄目木遺跡〔佐藤ほか 2010・加藤ほか 2013〕（23）などが挙げられるが、概して存続期間は2期におさまるものが多い。一方、下条（安田条）では上述の大坪遺跡のほか、3期の新町遺跡〔秋

山ほか2016】(65) や鶴深甲遺跡【高橋ほか2006】(43)など、事例は少ないながら1期や3期を中心とする集落も存在する。

また、白河荘域には中世の館跡が数多く存在する。発掘調査によって実態が把握されたものは少ないが、多くは3期の所産と考えられている。堀越館跡(41)では、火災に伴う廃棄土坑から14世紀後半～15世紀前半の良好な一括資料が得られ、応永の大乱における堀越要害の落城(1427年)との関連が想定できる【小田ほか2001】。

平野部に展開した館や集落に対して、笛神丘陵では諸種の生産活動が活発に行われた。窯業は、13世紀前半に須恵器系陶器を生産した背中炙窯跡(33)があり、統いて13世紀中葉から14世紀初頭にかけて権兵衛沢窯跡(32)、赤坂山中世窯跡(54)、狼沢中世窯跡(31)などで瓷器系陶器が生産された。阿賀野川河岸に位置する六野瀬遺跡(58)は赤坂山中世窯跡の製品の積み出し場と考えられ【鶴巻1992】、他窯の製品も同様に水運を利用して白河荘域に流通したと推定される。また、時期は定かでないが製鉄遺跡も多く分布しており、鍛冶に関わると考えられる木炭窯も存在する。なお、山口野中遺跡も含めて白河荘域の集落遺跡からは鉄滓など鍛冶関連遺物の出土が目立つが、丘陵部での鉄生産との関係は今後の検討課題である。

中世以来靈峰として崇められた五頭連峰の山麓には華報寺石造物群をはじめ経沢中世墓域(34)、目洗沢中世墓域(35)、蓮台野中世墓域(36)など墓地・宗教関連遺跡が展開する。文明九年(1477)に再興された華報寺の起源は明らかでないが、経沢中世墓域からは輸入陶磁器等を用いた蔵骨器が、目洗沢中世墓域からは14世紀初頭前後の紀年銘をもつ経筒や蔵骨器が出土した。葬送に関する遺構としては集落遺跡における火葬土坑の発掘例(柄目木遺跡・山口遺跡など)も注目され、今回の調査でも2基を検出している。

3 遺跡周辺の近世

A 月崎村と水原代官所

山口野中遺跡に隣接する月崎集落は、江戸時代以前に存在した阿賀野川旧河道の自然堤防上に営まれている。寛文7年(1667)と推定される「御領内見分書付」によると、月崎村は新発田藩領五ヶ村組に属し、家数は8、人数は46である。幕末の村高は92石4斗余であった【日本歴史地名体系15『新潟県の地名』平凡社】。

正保4年(1645)の「正保越後絵図」にはすでに五ヶ村の記載があることから、月崎村の成立は近世初頭以前に遡る可能性が高い。しかし、山口野中遺跡のみならず阿賀野バイパス関連で調査を行った近隣の遺跡においても16世紀以降の土地利用は明瞭でなく、中世から近世への集落変遷のプロセスには不明な点が多い。なお、『村史』【京ヶ瀬村1969】は月崎の村名の起りを「附き洲の崎を為したもの」とする。論拠は示されていないが、上述した中世の川湊を連想させる説ではある。隣接する六日野村が六日市に由来する可能性が指摘されるように【中野1976】、案外と「月崎」も中世の景観の残影かもしれない。

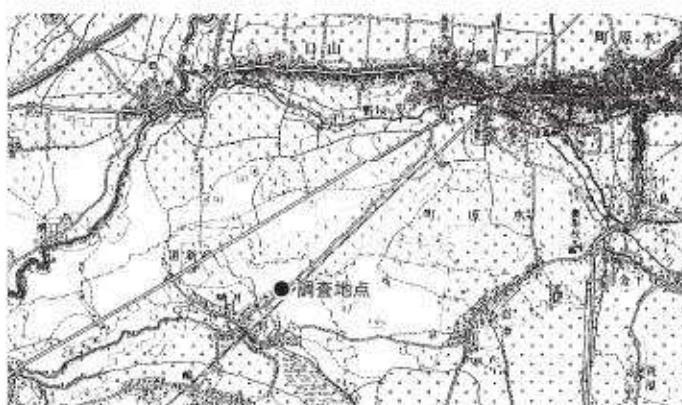
近隣の近世遺跡の代表例としては、水原代官所跡が挙げられる。水原代官所は水原館の跡地に延享3年(1746)に設置された。発掘調査では代官所建物の一部と考えられる土坑群などが確認されている【古澤2011】。代官所設置の背景には、いわゆる享保の改革に伴う幕領の支配拡充・強化があったとされ【村上1998】、月崎村も18世紀後半には一時幕領に転じている。

B 道路の変遷

6区の地表面直下で検出した道路遺構（道1）は、安野川を隔てた阿賀野市による調査区でも検出されており、下条・水原方面へ一直線に進むものとみられる。この道路は、大正時代の地図には現在のJR羽越本線に並行して描かれているが（第5図）、明治23年（1890）の「新潟縣北蒲原郡小島村大字月崎全圖」に描かれたものとも一致することから、羽越本線の開業（大正元年：1912年）以前から存在したことがわかる（第6図）。また、道路に面する「往来道上」「往来道下」の字名から、この道路が「往来道」と呼称されたこともわかる。

道1の敷設時期を、江戸時代の絵図類を基に考えてみると。地図の表現方法の違いや、氾濫による河川の流路変更のために対比は難しいが、月崎と安野川を隔てる下条・水原の関係に注目すると、「正保越後國絵図」が作成された17世紀中葉には、「五ヶ村」から下条へ向かう道は見えない（第7図）。月崎を指すと思われる「徒き崎」¹⁾の集落名が登場する享保14年（1729）の「阿賀野川悪水抜き堀割場所絵図」（第8図）においても同様である。しかし、文化13年（1816）の「越後輿地全図」の段階になると、月崎から下条を経て水原に至るルートが初めて現れる（第9図）。ほかにも未見の史料が存在する可能性はあるが、以上により道1の敷設時期はひとまず1729年から1816年の間に置くことができよう。

近代以降の道1の利用状況を示す史料は見出せていないが、昭和40年代の安野川改修工事に伴い、5区と6区を分ける現在の位置に移設されるまで使われていたことが近隣住民の記憶に残っている。

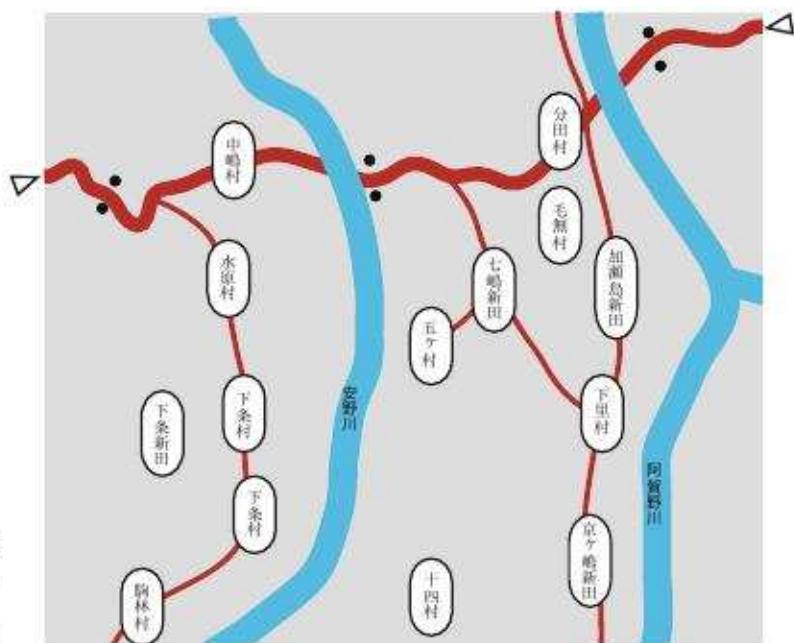


第5図 大正期の調査区周辺
(大日本帝國陸地測量部発行 大正8年「水原」「新津」1:50,000原図)



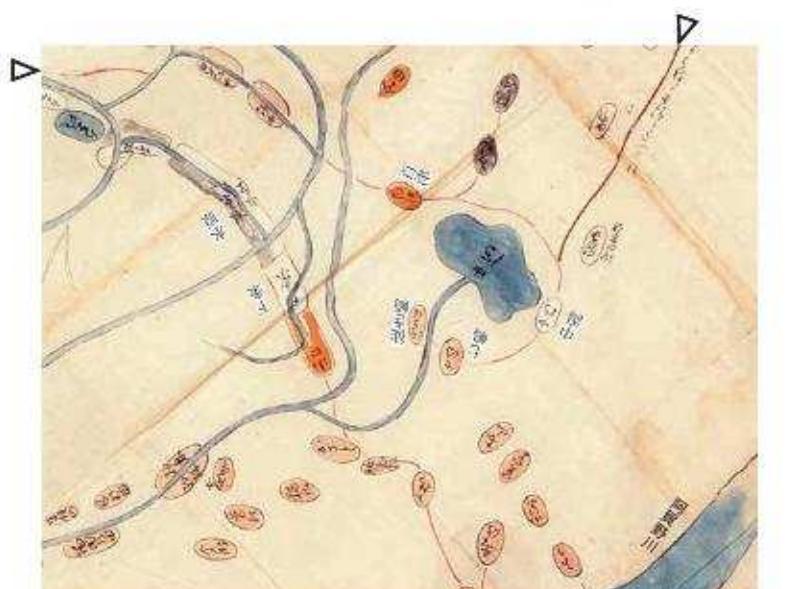
第6図 明治23年の月崎集落と調査区
(新潟縣北蒲原郡小島村大字月崎全圖(阿賀野市所蔵)に加筆、縮尺1/4,000)

1) 地名の読み方は前嶋敏氏（新潟県立歴史博物館）の御教示による。



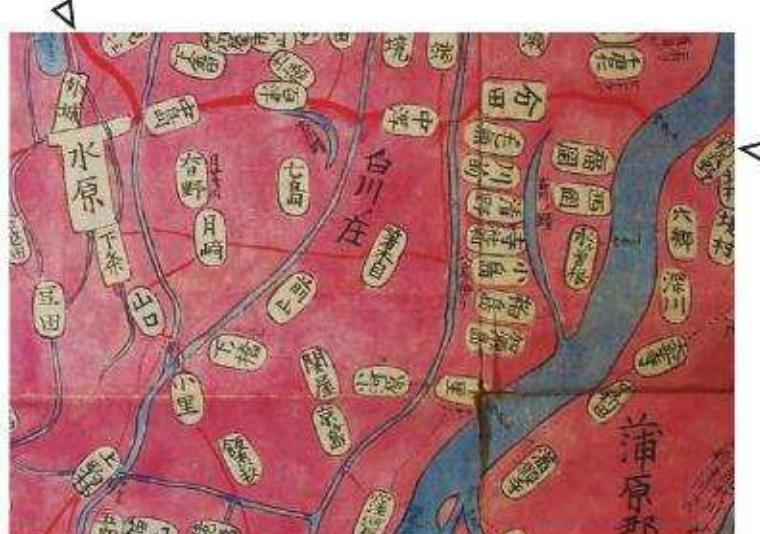
第7図 17世紀中葉の交通路

『正保越後国絵図』『新発田領絵図』
を基に作成。矢印の間は三国街道
中通り（第7図、第8図も同様）



第8図 18世紀前半の交通路

『阿賀野川悪水抜き堀割絵図』の一部
に加筆（佐藤綾子氏所蔵、新潟市提供）



第9図 19世紀前半の交通路

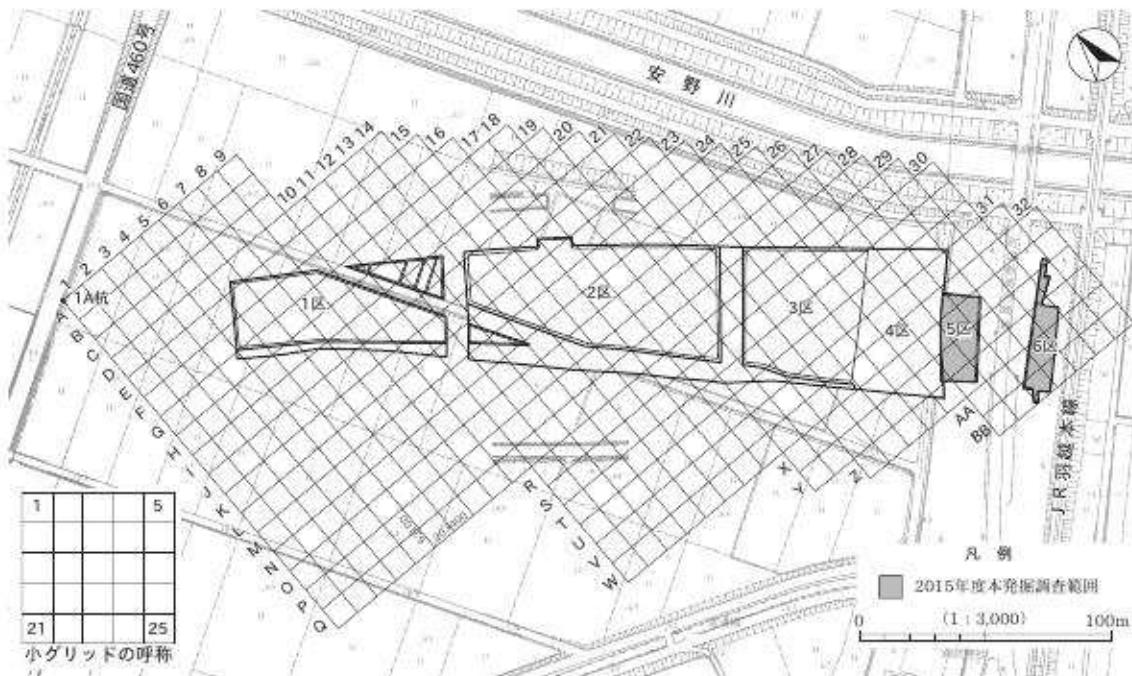
『越後奥地全図』の一部
(胎内市教育委員会所蔵)

第III章 調査の概要

1 グリッドと調査区の設定

第I章2で述べたとおり、調査区の呼称は従来の区分を継承し、市道七島月崎線の北西側を5区、南東側を6区とした。6区より先は、JR羽越本線をはさんで境塚遺跡の2015年度調査区となる。

調査で使用したグリッドは、2012年度の調査で設定したもので、方向は真北を基準とする。大グリッドには、西から東へ向けて算用数字(1, 2, 3...)を、北から南へ向けてアルファベット大文字(A, B, C...Z, AA, BB...)を付した。大グリッドは2m四方に分割して小グリッドとし、北西隅から南東隅へ1～25の番号を付した。グリッド名はこれらの記号を組み合わせ、大グリッドは「28AA」、小グリッドは「28AA15」のように表記する。なお、1A杭は国家座標のX=202570.000(北緯37度49分56.75682秒)、Y=62050.000(東経139度12分17.72584秒)である。



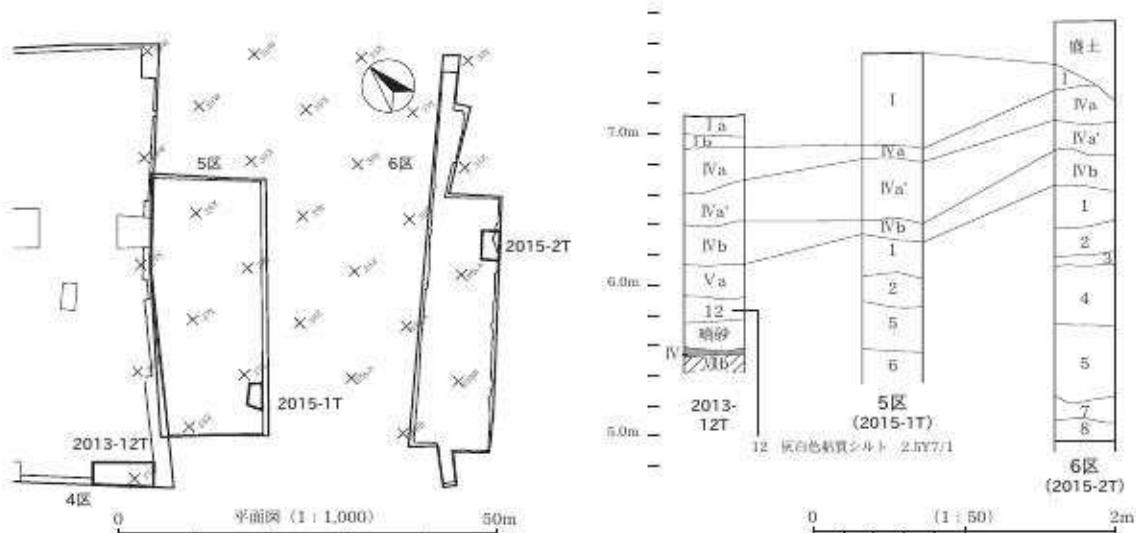
第10図 グリッド設定図

2 基本層序

基本層序も2012年度の調査を基準としたが、II・III層は全体的にほぼ残存していなかった。また、IVb層より下位は層序が複雑で隣接地区と完全に一致させることが困難であったため、新たに1～9の層名を付し、既調査区と対比可能なものはその都度記した。

- I 層：灰黄褐色砂質シルト 表土。
- IVa 層：にぶい黄褐色粘質シルト 上面は中世の遺構検出面である。
- IVa' 層：にぶい黄褐色粘質シルト IVa 層より砂質である。
- IVb 層：黄褐色砂質シルト
- 1 : 黄褐色砂質シルト (10YR5/8)
 - 2 : 灰白色粘質シルト (7.5Y7/1) 直径 0.5 ~ 1cm の鉄分をわずかに含む。
 - 3 : 灰白色粘質シルト (10Y7/1) 2 層に比べ粘性強い。
 - 4 : 灰黄褐色砂質シルト (10YR6/2)
 - 5 : 黄灰色粘質シルト (2.5Y6/1) 直径 1 ~ 3cm の鉄分を多く含む。基本層序 V a 層に相当する可能性が高い。
 - 6 : にぶい橙色砂質シルト (7.5YR7/4) 基本層序 VII 層に相当する可能性が高い。5 区では、断続的ではあるが 5 層と 6 層の間に部分的に炭化物を多く含む箇所があり、これが 4 区の VI 層（縄文時代晚期の遺物包含層）に相当する可能性が高い。このことは、6 層から採取した炭化物の放射性炭素年代が当該期の値を示す点からも裏付けられる（第 VI 章）。
 - 7 : 青灰色粘質シルト (5B6/1)
 - 8 : 青灰色粘質シルト (5B5/1) 6 層に比べやや砂質である。

IVa 層の標高を見ると、1 区から 6 区へ向けて緩やかに高まっている。このことは、4 区東側から 6 区にかけて中世の居住痕跡が集中するという土地利用の在り方と整合的である。



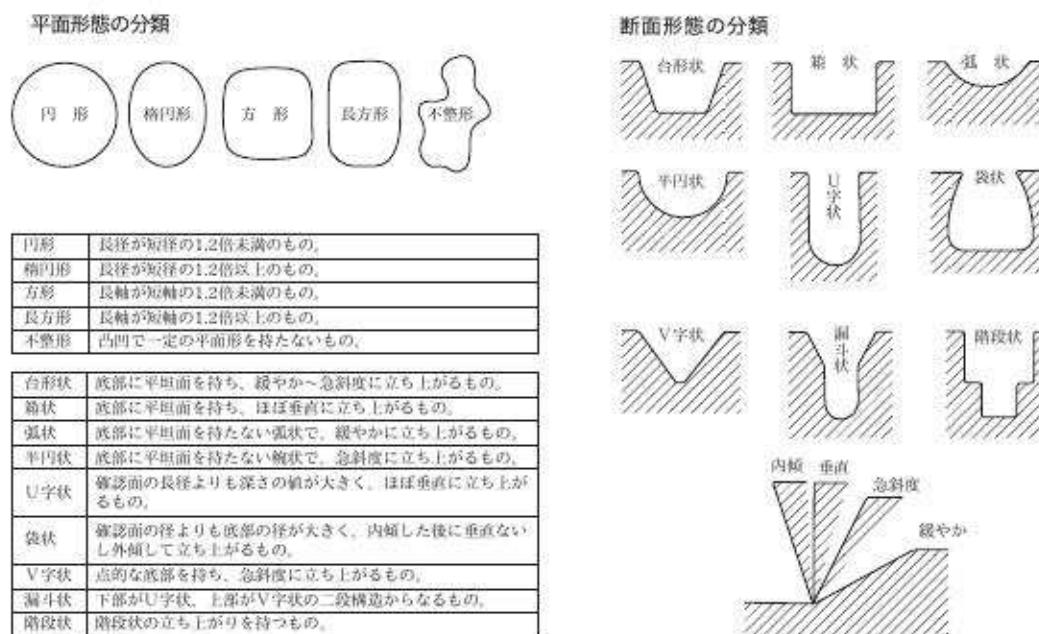
第 11 図 基本層序

第IV章 遺構

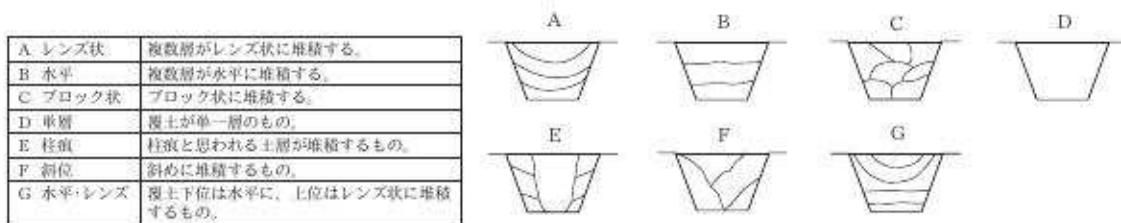
1 記載方針と分類

遺構名は種別の略号（掘立柱建物 = SB、井戸 = SE、土坑 = SK、ピット = P、溝 = SD、性格不明遺構 = SX、炭化物集中地点 = SC）と番号を組み合わせて表記した。番号は遺構の種別に関わりなく通し番号とし、既往の調査と重複しないよう5区を600番台、6区を800番台から付していったが、5区の遺構数が200を超えたため、調査途中から5区に900番台、6区に1000番台を与えた。欠番が生じた場合も番号の付け直しは行っていない。また、現場段階で同一遺構の掘り直しと判断したものは、同一番号を与えたうえでSD806A～SD806Cのようにアルファベットで区別した。現場で認識したものから付番したため、必ずしもアルファベット順と遺構の新旧は対応しない。なお、2013年度の調査で4区の下層の遺構に800番台の番号を与えていたことに調査途中で気付いたが、番号の付け直しは行わなかった。そのため、4区と6区で一部に遺構番号が重複するものがあるが、遺構の種別が異なるため識別は可能である。

観察表における遺構の平面形態・断面形態・覆土の堆積状況の分類は第12図・第13図によって行った。



第12図 遺構の平面・断面形態の分類 [荒川・加藤1999]



第13図 遺構覆土の堆積状況の分類 [荒川ほか2004]

土層の観察は『新版 標準土色帖』(2003年度版)に基づき行った。含有量は10~20%を基準とし、これより少い場合は「少量」「ごく微量」、多い場合は「多い」「非常に多い」等に区別した。また、含有物の粒径や状態(ラミナ状・ブロック状等)及び層の「しまり」・「粘性」は、顕著な場合のみ記した。

次節では、遺跡の理解において重要な遺構について、数値化できない情報を中心に詳述する。記載できなかった遺構やそれぞれの計測値等は観察表を参照されたい。

図面図版は、1/300の全体図、1/100の平面分割図、1/40の平面図・断面図・エレベーション図を基本とし、それぞれスケールを付した。写真図版は、本文中に解説した遺構を中心に掲載した。なお、今回の調査では中世・近世の遺構とともに同一の面で検出したが、図版ではこれらを分けて掲載した。

2 遺構各説

A 掘立柱建物

1) 概要

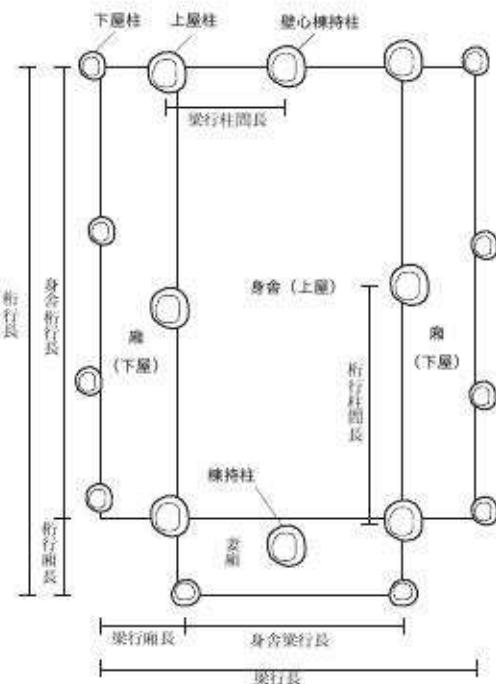
掘立柱建物は7棟を検出した。4区の東側で検出された3棟(SB7~9)とあわせて一つのまとまりと捉えられるため、以下ではこれらを合わせて概観する(第15図)。なお、6区では調査区の制約から2棟を認定したに過ぎないが、30Zグリッド周辺にはビットが密集しており、柱の痕跡を残すものも多いことから、北東側の調査区外にかけてさらに多くの掘立柱建物が存在したことは確実である。

建物の規模及び主軸方位の復元に際しては、30cmを1尺と仮定し、これを基準としたグリッド上にできる限り多くの柱穴が載るように割り付けた。

今回の調査で検出した建物は、いずれも梁間一間型【宮本1999】と考えられる。4区東側を含めても、総柱型のSB7以外は梁間一間型である。これらは、身舎(上屋)の梁行長が14尺を超えるもの(SB8・774・775・777・1051)は棟持柱をもつものに対し、12尺のもの(SB9・776・1052)はもたない(後述のSB945を除く)。また、桁行が3間を超えるもの(SB774・775)は身舎(上屋)内部に棟木を支持する柱を備える。

建物の規模に着目すると、SB774・775は梁行長10mを超える大型の建物で、長辺両側に廂(下屋)を備える。隣接して建てられたこの2棟は主軸方位もほぼ一致し、西側の妻を揃えて配置されている。その他は桁行2間で長さが5m前後におさまる小型の建物が多い。

主軸方位が近いもの(直行するものを含む)でグループピングを行うと、[SB8・9・774・775・776・1051]と[SB945・1052]に大別できる。ただし、SB775と776は柱穴の切り合いはないが建物空間

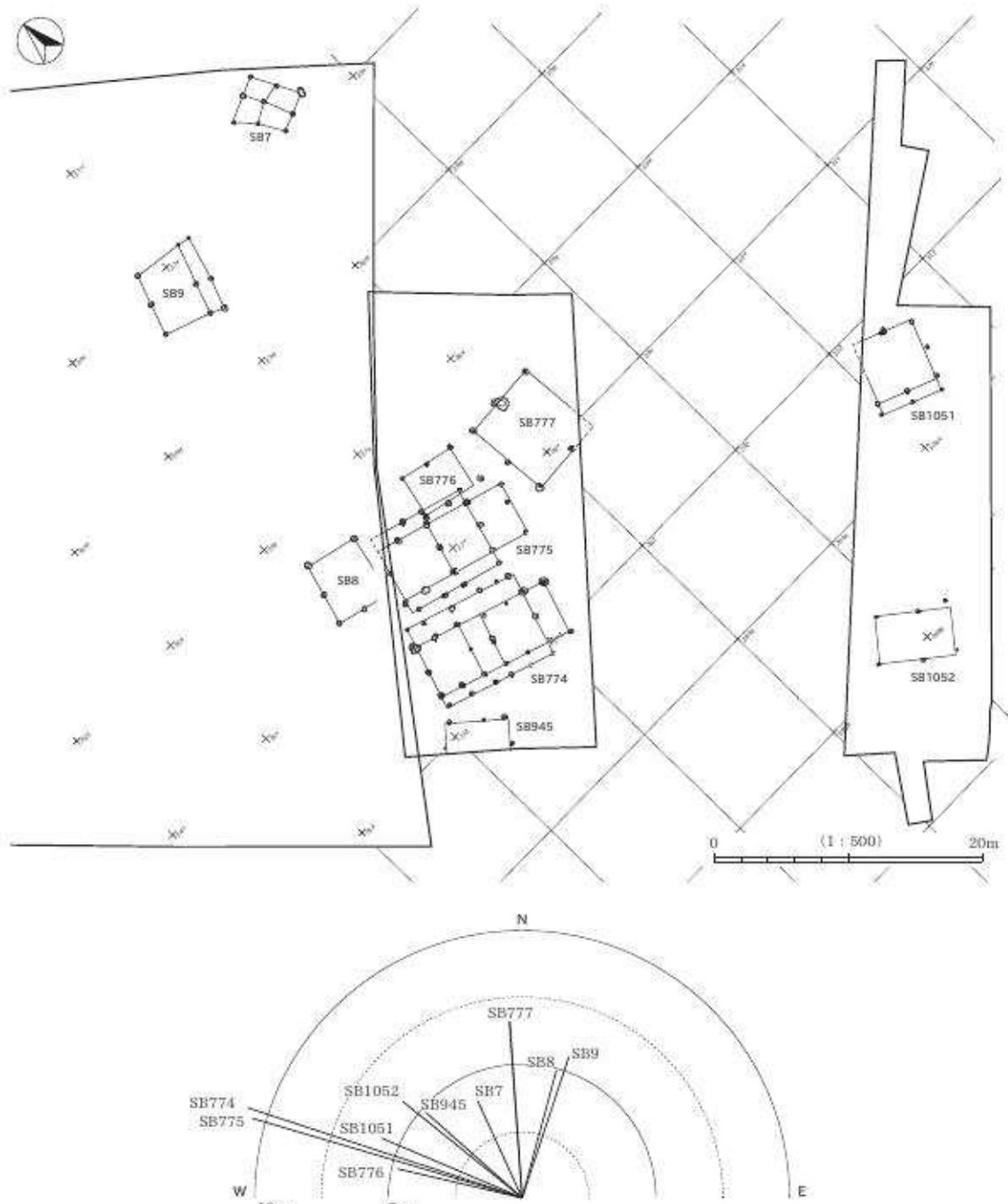


凡例

① 計測位置の名前は荒川¹⁵2012に従った。

※ その他の部位名前は古墳路遺跡の分析での中尾七重の用法に従った【中尾2011】。

第14図 掘立柱建物の計測位置



第15図 振立柱建物の分布と主軸方向

が重複しており、主軸方位が一致するものがすべて同時期に存在したわけではない。建物以外の遺構では、前者と SD612・805・810・821・道4、後者と道3の方向性が近似する（または直行する）。いずれとも方位が揃わない建物は総柱型の SB7 と柱間長が極端に長い SB777 の2棟であり、他の建物とは性格を異にする可能性がある。

2) 各 説

SB774 (図版 10・29)

26Y・27Y グリッドに位置する。桁行 6 間の梁間一間型建物で、桁行柱間長は 6 尺の等間である。西側の 1 間は柱穴が浅い点から妻廂と考えられ、これを除く 5 間分が身舎（上屋）に相当する。身舎（上屋）の両妻には壁心棟持柱（P629・645）を配する。P684 と P658 は棟木を支持するとともに室内の間仕切りの役割を果たしたと思われ、身舎（上屋）内部は桁行 1 間分の間仕切りを介して 2 間 × 2 間 (14 尺 × 12 尺) の部屋が並ぶ空間となる。南北に取り付く廂（下屋）の柱穴の深度が浅く、柱間が身舎（上屋）と揃わないのは、これらが身舎（上屋）と構造的に分離し、外壁と垂木端を支える機能しか持たないためである [中尾 2011]。南側の廂（下屋）は北側と比べて東 2 間分の柱穴が不足しているが、当該箇所には SK619 と防風林の杉の根が重複することから、本来はこの場所にも柱穴が存在したと思われる。

以上から、SB774 は長辺両側に下屋、西側妻に廂を備える建物と考える。なお、下屋の出が南北で異なる点 (3 尺と 5 尺) には留意が必要である。

SB775 (図版 11・29)

26・27Y・X グリッドに位置する。桁行 4 間の梁間一間型建物である。桁行柱間長は西から 9 尺・12 尺・8 尺・6 尺であり、全長は SB774 より 1 尺短い。南北に取り付く廂（下屋）の出はともに 3.5 尺である。P747・650・919 は柱筋が揃うことから棟を支える柱と考えられるが、P750 はややずれることから、壁心棟持柱とするには難がある。しかし、西側 1 間分は柱間が広く両隅の柱穴も深いことから身舎（上屋）の一部と考えられるので、西妻は棟束で支えたとみておく。P650・747 が間仕切りを兼ねたとすると、身舎（上屋）内部は 3 つの空間に分かれ、中央は SB774 と同じ 14 尺 × 12 尺となる。

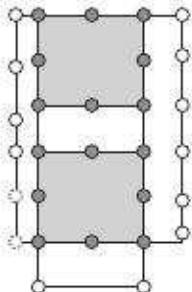
遺物は P771 から瓷器系陶器の甕 (図版 24-11) が出土し、SK613 のものと接合した。

SB945 (図版 13)

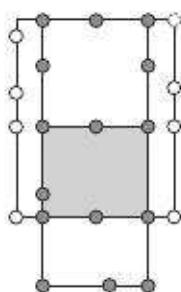
25・26Y・Z グリッドに位置する。調査区外に延びるため全容は不明であるが、桁行 2 間の梁間一間型建物で、P784 - P690 間に直行するラインよりもやや外側に逸れる P707 と 627 は棟持柱と考える。棟木のラインを軸として左右対称に柱を割り付けると桁行長 14 尺 × 梁行長 12 尺の建物に復元できる。この 14 尺 × 12 尺という単位は上述した SB774・775 の間仕切りされた空間にも認められ、SB776 も南西隅柱 P772 が外に突出する部分を除くと同じ面積になる。このように、当地区では建物の大小に関わらず、14 尺 × 12 尺という広さを室内空間に採用する例が多く認められる (第 16 図～第 18 図のアミ掛け部分)。

SB1051 (図版 14・30)

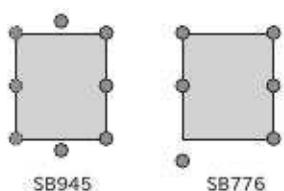
30Z グリッドに位置する。桁行・梁行とも柱間長は 8 尺の等間である。廂（下屋）は南側にのみ存在する。下屋の出は 3 尺で柱間は身舎（上屋）桁行と一致する。P863 は西側妻のラインよりやや外側に位置することが



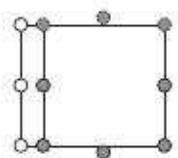
第 16 図 SB774 模式図



第 17 図 SB775 模式図



第 18 図 SB945・776 模式図



第 19 図 SB1051 模式図

ら棟持柱と考える。なお、現状では桁行 2 間としておくが、柱間長が長い点、廻（下屋）を備える点を勘案すると、東側の調査区外に続く大型建物の可能性もある。

B 井 戸

1) 概 要

井戸は 3 基である。いずれも素掘りの井戸で平面形は円形を呈する。砂層を掘り抜いていないこと、水に由来するとみられる堆積土が断面中にほとんど認められることなどから、別の性格をもつ大型の土坑の可能性もある。

2) 各 説

SE646 (図版 7)

27Y10・15 グリッドに位置する。調査区外に延びるため全容は不明であるが、平面形は円形で、直径は長径 2.6m 程とみられる。サブトレンチを設定し深度を確認したところ、検出面から 1m 以上掘り下げても底面に達しなかったことから、井戸と捉えた。調査を続行すると市道に影響が及ぶことが懸念されたため、バイパス工事の施工前に改めて調査を実施することとし、埋め戻した。サブトレンチ内から珠洲焼の甕 (図版 24-5) が出土した。

SE843 (図版 15・31)

29AA グリッドに位置する。上部は一部を攪乱や SD802・818 によって切られるものの、遺存状況は良好である。平面形はやや角のある円形で、長径約 1.7m、短径約 1.5m、深さは 1.2m を測る。平面規模に比して深度は浅い。底面は砂層である。底面はほぼ平坦、側面の立ち上がりは急角度で、東南側面に崩落に起因するとみられるテラス状の凹凸がある。覆土は、1～9 層は暗灰黄褐色系シルト質土、10～16 層はオリーブ色系シルト質土、17～20 層は淡黄色系細砂質土で、レンズ状の堆積を示す。12・13 層は炭化米や細木片などを少量含む。遺物は、土師質土器小皿 (図版 24-6)、珠洲焼片口鉢 (図版 24-7) などが中・上層から出土した。

SE1030 (図版 15・31)

30Z グリッドに位置する。SD810 の掘削中に検出したもので、上部の大半をこれに切られ、底部と側面の一部のみ残存する。平面形は方形を呈すると推定され、残存長径約 0.8m、同短径約 0.7m、SD810 の遺構検出面からの深さは約 1.1m を測る。底面は若干の円味をもち、側面はやや急斜度で立ち上がる。覆土は 1・2 層に炭化物を含み、3 層は黒灰色のシルト質粘土である。

C 土 坑

1) 概 要

火葬土坑を除く土坑は 33 基を検出し、うち 28 基は 5 区に集中する。これらには、堆積土が相互に類似するものがあり、灰色シルトに橙色シルトが混入するもの (1 類)、黒褐色シルトが主体、あるいは下層に黒褐色シルトが堆積するもの (2 類)、にぶい黄褐色シルトから灰黄褐色シルトが主体をなすもの (3 類)、その他に大別できる (第 20 図)。1 類は基本層序 I 層からの掘り込まれる近世～近代の土坑である。これらは 6 区で検出した近世の道路遺構である道 1 に沿うように分布しており (図版 2)、道路を基軸とした土地利用を示唆する。2 類は、主に 5 区の北～東側に分布し SK609・610・611・617・618・718・

732 が該当する。直接的な重複関係は確認できないが、SK609 は SB777 の北側柱の柱穴を切っている可能性が高い。3 類は最多の 11 基を数える。直径が 1m を超える大型土坑 SK623・687 等を含み、掘立柱建物と分布域が重なる。SK623・687・725 のように掘立柱建物の柱穴に切られるものも存在するが、掘立柱建物の柱穴の覆土も 3 類に類似することから、両者は同時期に変遷したと考えられる。また、その他とした SK613 も、出土した瓷器系陶器の甕が SB775 の柱穴 P771 と接合することから、掘立柱建物群と埋没時期を同じくすると推測できる。

2) 各 説

SK609 (図版 16・32)

28X11 グリッドに位置する。覆土は 2 類。平面形は円形を呈し、断面形は底面が平坦で側壁は急斜度に立ち上がる。SK610 より新しい。3 層から軽石製品 (図版 26-57) が出土した。

SK611 (図版 16・32)

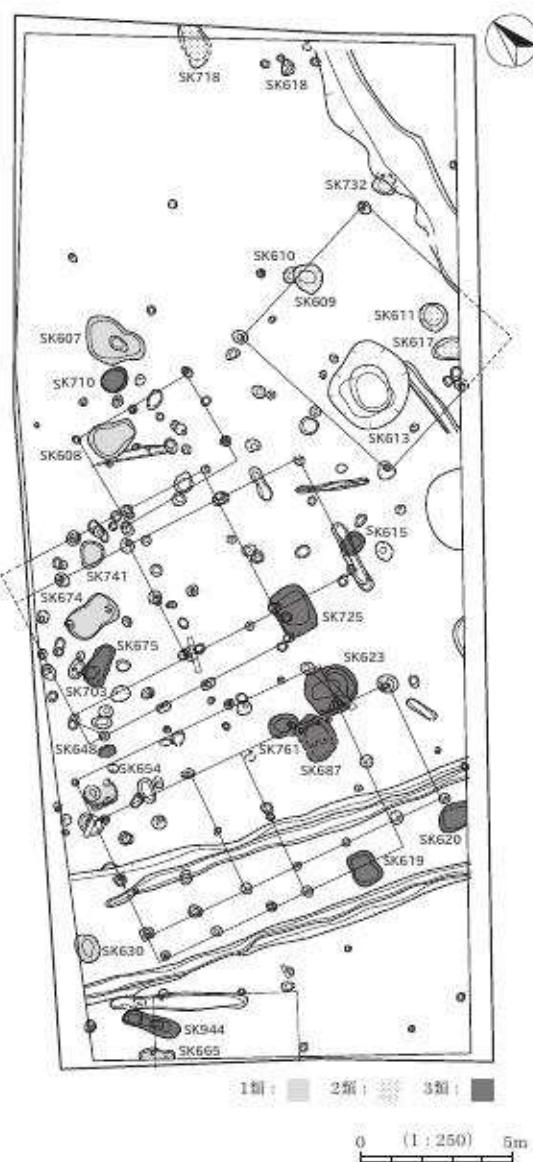
28X22 グリッドに位置する。覆土は 2 類。平面形は円形を呈し、断面形は底面が平坦で側壁は急斜度に立ち上がる。セクション面において、基本土層 IVb 層から覆土 3 層へ走る噴砂脈を確認した。SK611 から採集した炭化物の放射性炭素年代は 12 世紀後半から 13 世紀後半の値を示す (第 VI 章)。一方、山口野中遺跡 2 区で検出された噴砂は残留磁化測定により 1275 ± 25 年という年代が得られている [酒井ほか 2013]。従ってこれらの噴砂は同一の地震に起因するもので、SK611 はそれ以前に機能し、埋没後に地震に見舞われたと想定すると年代的に矛盾がない。

SK617 (図版 16)

28Y1・2、28X21・22 グリッドに位置する。覆土は 2 類。平面形は梢円形を呈し、断面形は底面が全体に平坦で、中央部にわずかな凹凸をもち、側壁は緩やかに立ち上がっている。覆土中層において、北西方向に上昇する噴砂が確認できる。土坑の埋没後に土坑を破壊して吹き上がったものとみられ、遺構の埋没から地震の発生まで SK611 と同じ推移を辿ったことが想定できる。

SK718 (図版 18・34)

28W17 グリッドに位置し、北側の調査区外に延びる。覆土は 2 類。平面形は梢円形を呈し、



第 20 図 土坑の分類

断面形は底面が平坦で、側壁は急斜度で立ち上がる。1層から土師質土器片、不明金属製品（図版 25-43）が出土した。

SK623（図版 16・32）

27Y11・12・16・17 グリッドに位置する。覆土は3類。平面形は円形を呈し、断面形は底面が平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。長径 1.71m、短径 1.69m、深度 0.54m を測る大型土坑である。SB774 の柱穴 P632 に切られる。

SK675（図版 17）

26X24 グリッドに位置する。覆土は3類。平面形は不整方形を呈し、断面形は底面が平坦で側壁は急斜度に立ち上がる。SK703 を切る。1層から土師器片が出土した。

SK687（図版 17・33）

26Y15・20、27Y16 グリッドに位置する。覆土は3類。平面形は梢円形を呈し、断面形は底面が平坦で側壁は急斜度に立ち上がる。長径 1.58m、短径 1.12m、深度 0.74m を測る大型土坑である。SB774 の柱穴 P724 に切られ、SK761 を切る。1層から珠洲焼の片口鉢（図版 24-12）、2層から土師質土器片、3層から刀子（図版 25-47）が出土した。

SK761（図版 17）

26Y15 グリッドに位置する。覆土は3類。平面形は長方形を呈し、断面形は底面が平坦で側壁は緩やかに立ち上がる。

SK725（図版 18・34）

27Y6・7 グリッドに位置する。覆土は3類。平面形は隅丸方形を呈し、断面形は底面がおおむね平坦で中央に凹みをもち、側壁は急斜度で立ち上がる。SB775 の柱穴 P765・766 に切られる。

SK732（図版 18・34）

28X13 グリッドに位置する。覆土は3類。平面形は梢円形を呈し、断面形は底面に凹凸をもち側壁は急に立ち上がる。SD601 に切られる。1層から土師質土器片が出土した。

SK824（図版 18・35）

30Y23 グリッドに位置し、調査区外へ延びる。覆土は3類。平面形は梢円形を呈し、断面形は底面が平坦で、側壁は急斜度で立ち上がる。2層から鉄釘が出土した。

SK842（図版 18・35）

29AA3 グリッドに位置する。覆土は3類。平面形は長方形を呈し、断面形は底面が平坦で側壁は急斜度で立ち上がる。道 4【2期】の側溝である SD819 に切られる。

SK613（図版 16・33）

27・28X・Y グリッドに位置する。覆土は4類。平面形は円形を呈し、断面形は底面が凹凸をもち、側壁は緩やかに立ち上がる。長径 2.9m、短径 2.69m、深度 0.55m を測る大型土坑である。上層から珠洲焼の片口鉢（図版 24-9・10）及び SB775 の柱穴 P771 と接合する瓷器系陶器の甕片（図版 24-11）、中層から土師質土器小皿（図版 24-8）及び土器転用研磨具（図版 25-35）が出土した。

D 火葬関連遺構

1) 概 要

いわゆる火葬土坑〔梁瀬 2009、狭川 2011〕と考えられる遺構 2 基（SK719・804）と炭化物集中地

点2か所(SC840・841)である。火葬土坑2基はいずれも上面を大きく削平されており、ほかの中世の遺構より新しい時期の所産と考えられる。このことは、SK804から採集した炭化物の放射性炭素年代値がほかの中世の遺構とはかけ離れて新しい14世紀前半から15世紀前半の値を示すことと整合的である(第VI章)。炭化物集中地点は火葬土坑とは断定できないものの、やはり上面が大きく削平されている点や、SK804と近接する29AAグリッドに集中する点から、関連する遺構の可能性が考えられる。以下ではSK719・804とSC841について解説する。火葬土坑の部位名称は第21図のとおりである。

2) 各 説

SK719(図版15・31)

27Xグリッドに位置する。削平のため本来の形状は不明である。遺構検出の段階では焼土の被熱部が周縁に断続的に巡っていたが、樹根による擾乱も著しく平面形を確定できなかった。長径約0.7m、短径約0.6m、深さは最深で7cm、平均的には3~4cmである。底面は凹凸が強く、側面の立ち上がりも漸移的で不明瞭、断面形は弧状である。覆土は単層、焼土・焼骨・炭化物を含む褐灰色土で、焼土にはややすくすんだ暗赤褐色のものと明黄褐色のものとがみられ、粒径2~3cmの小塊状をなし、樹根による擾乱もあって全体的に散乱している。面的な集中部は認められず、特に強く被熱した部分や硬化・変色した部分、煤化または灰なども確認できなかった。焼骨は最大長1cm程度以下の碎片で、部位は判別できない。焼骨の残存状況から考えて大部分は拾骨された可能性が高い。焼骨はいずれも明白で強い焼成を受けたとみられる。炭化物は細粒か痕跡程度のものが多く、10数点採集したうち最大で約8×5×2mmである。遺物は出土していない。

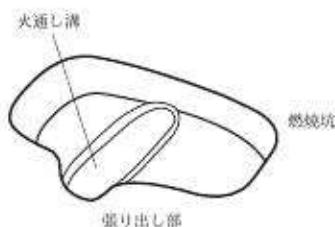
SK804(図版15・31)

29AAグリッドに位置する。隅円長方形の燃焼坑の中心に火通し溝を掘り込んでいる。火通し溝の両端は燃焼坑の外側に突出し、平面形は「中」の字状を呈する。火通し溝の方位は北が約84度西偏する。火通し溝がほぼ東西方向を向くことは阿賀野市域の山口遺跡〔荒谷ほか2010〕・柄目木遺跡〔加藤ほか2013〕の事例と一致しており、東北地方を含めて同様の傾向が認められるとのされる〔石垣2012〕。

底面は全体に凹凸をもち、側面は緩やかに立ち上がる。赤化や煤化、変色・硬化部分などは不明瞭である。覆土は5層に分かれ、いずれも焼土・焼骨・炭化物などを混在し、2・3層にやや多く含まれる。火通し溝部分の4層は炭化物・焼土主体で、下底に層厚1cm以下の炭化物と灰質層が堆積する。焼土は粒径3~4cmの小塊が20~30cmの範囲に集塊状に点在する。焼骨は最大長約10cm程度で、肩胛骨や尺骨と推察される部位などが中央部付近から出土した。炭化物は15×5cm程度の材が数点南半に認められたが、全般に小断片である。焼土・焼骨は底面より浮いた状態、炭化物は底面にほぼ密着した状態で出土したものが多いため、遺物は出土していない。

SC841(図版15・31)

29AAグリッドに位置する。平面形は橢円形を呈し、長径0.96m、短径0.64m、底面は緩い凹凸をもち、深さは平均7cm、最深12cmである。南側中央付近の上面に10×5cmの炭化材が出土した。遺物は出土していない。



第21図 火葬土坑模式図
〔加藤ほか2013〕

E 道路と側溝

1) 概要

通行部分の構造が確認できたのは道1のみであるが、2条の並行する溝とそれにはさまれた空間を有する4遺構を道路と認定した。

道路側溝と認定した溝のうち、道1と道4【2期】の両側溝の覆土には多量の礫が含まれていたため、出土位置を記録して取り上げを行った。一方、道4【1期】・道2・道3の側溝は他の遺構と同様、特に礫が多い印象は受けなかった。そこで、一定の範囲の溝覆土に含まれる礫の数量をカウントして、どのサイズの礫が道路から落下した可能性があるのかを調べてみた(第2表)。それぞれの土量を計算していくため遺構間の比較は難しいものの、SD806Aのみ直径2cm以上の礫をほとんど含まず、他の3遺構との大きな差が看取できる。従って道1及び道4【2期】においては、直径5mm以下の礫は主に自然に堆積したもの、2cm以上は主に道路の構築時に持ち込まれたものであり、その中間は両方が混在していると考えられる。また、道4【2期】は道1に比べ5mm以上1cm未満の割合が高いことから、後者よりややサイズの小さい礫も持ち込まれた可能性がある。

遺構名	道路名	礫のサイズ							
		~5mm	~10mm	~20mm	~30mm	~40mm	~50mm	~100mm	101mm~
SD801B	道1西側溝(2期)	77	144	42	3	3	0	1	0
SD801C	道1西側溝(1期)	136	99	72	6	4	3	7	1
SD815	道4西側溝(2期)	155	598	37	9	2	2	7	0
SD806A	道3北側溝	97	141	5	0	2	0	0	0

[5mm以下は重量(g)、それ以上は個数)

第2表 溝長50cmに含まれる礫の数量とサイズ

2) 各説

道1(図版19・28・37)

第II章で述べたように、昭和40年代頃まで使用された砂利敷の道路であるが、その下位で検出された北西側溝SD801、南東側溝SD802の掘り直し等から、最終段階を含めて4時期の変遷が確認できる。

1期はSD801C・SD802Cを両側溝とし、側溝中心間は4.7~5mを測る。溝の断面は、後述するSD801B・SD802Bよりも底面幅の広い台形状を呈し、底面には掘削時の工具痕が明瞭に認められる箇所がある。覆土最下層は地山ブロックを多く含んでおり、掘削時に底面を均した層と考えられる。

2期はSD801B・SD802Bを両側溝とする。ほぼ1期の位置を踏襲するが、南西側では若干南へ振れていくようである。覆土最下層は1期と同様に地山ブロックを多く含む。

1・2期側溝の底面の標高はおおむね6.8~7.0mの間を前後しており、一方向へ傾斜する様相を示さない。また、覆土最下層から中層を中心に亜円礫が多く出土している。

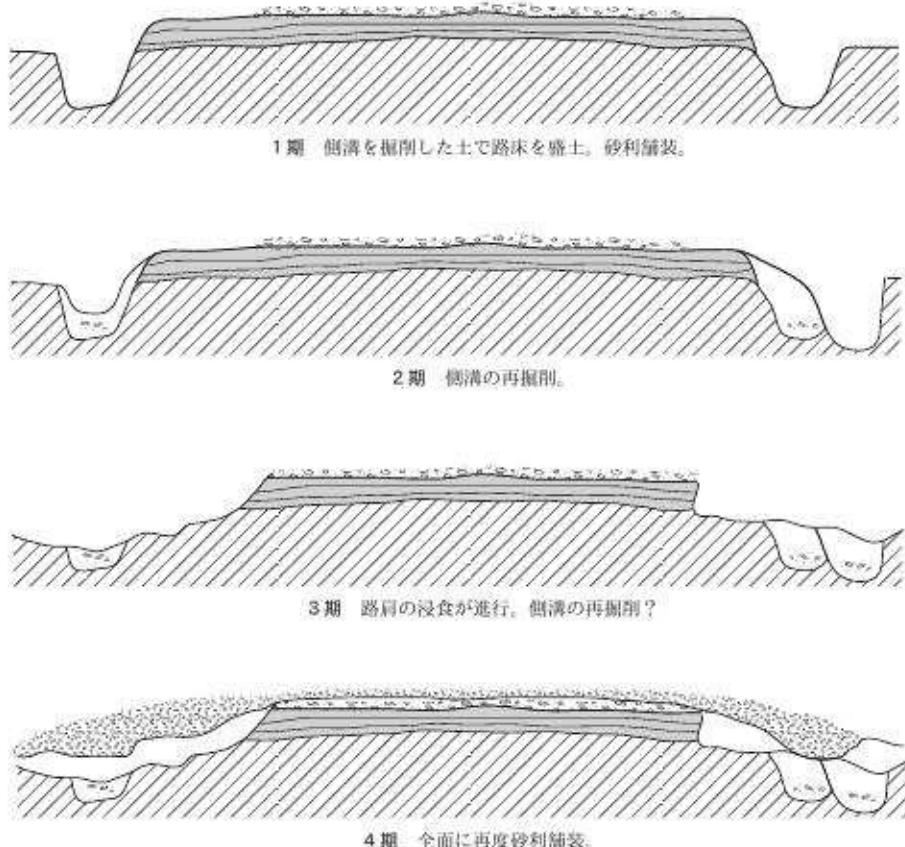
3期は1・2期の側溝上面に浅く堆積するグライ土によって認定した(SD801A・SD802A)。この段階は

	近代	近世	中世	縄文	総計
路床底土	0	0	3	0	3
1期側溝	0	4	3	1	8
2期側溝	0	7	2	0	9
3期側溝	6	8	2	0	16
総計	6	19	15	1	41

第3表 道1出土遺物



第22図 SD801A出土ガラス製目薬瓶



第23図 道1の変遷模式図

新たに側溝を掘削したのではなく、路肩が崩れて浅い窪地となっていた可能性もある。土質から、常時滲水しがちな状況であったことがうかがわれる。

両側溝間の路面に相当する部分には、やや砂質の土が約20cm盛られている。盛土は非常に硬化している。盛土中には側溝内で検出したサイズの碟は含まれないことから、碟は盛土の構築に用いられたものではなく、路面に敷かれていたと考えられる。

第3表は出土遺物の内訳である。まず側溝についてみると、中世以前の遺物はすべてに存在するが、近代以降の遺物（ガラス製品）は3期の覆土からしか出土していない。また、ガラス製品は、明治期の目薬瓶〔市村2010〕（第22図）や気泡を多く含む瓶など全体的に古相を呈することから、3期の上限は明治時代までは遡る可能性が高い。以上の状況から、2期と3期の境はおおむね19世紀後半に置くことができよう。

盛土からは中世の遺物のみが出土し、近世の遺物が1点も存在しないことから、盛土の造成は道路の敷設当初に側溝の掘削で生じた土を利用し、その際に破壊した中世の遺構から遺物が移動したと考えられる。また、上述のように1期の側溝覆土中にも亜円碟が存在することから、盛土・砂利敷は一体的に道路敷設時に施工され、4期にこれを覆うように再度砂利が敷かれたと考えられる。以上の道路の構造と変遷を模式化したのが第23図である。

道路の敷設時期を調査成果のみから判断することは困難であるが、以上の状況は第II章で絵図の検討から導かれた1729年から1816年という年代と齟齬は生じないといえよう。

道2(図版19)

SD807を北西側溝、SD818を南東側溝とする。調査区北東側では道1の内側で並行するが、南西側では徐々に東へ逸れる。側溝中心間は約3mを測る。重複する中世の遺構よりは新しく、道1の盛土層にバックされるためこれよりは古い。方向の類似から、道1に先行する近世の道路遺構と考えておく。ただし、遺物はSD807から中世の土師器2点と青磁1点、SD818から珠洲焼1点が出土したのみであるため、近世に降る確証はない。

道3(図版21・36・37)

SD806Aを北東側溝、SD1046を南西側溝とし、方向は北が約48°東へ傾く。SD1046は近代以降の掘り込みに大きく攪乱されており一部を検出したのみであるが、側溝中心間は約3mと推測される。溝の断面は台形状を呈する。規模や方向性から、境塚遺跡D区[荒川ほか2012]で検出された「道2」の一部と考えられる。SD806Aは部分的に2回掘り直されている(SD806B・C)。

道4(図版20・23・28・36・37)

SD816を西側溝、SD808を東側溝とする段階(1期)とSD815を西側溝、SD819を東側溝とする段階(2期)があり、1期側溝の埋没後にやや外側に拡張して2期の側溝が掘られている。側溝中心間は1期が約2.5m、2期が3.3～4.0mである。方向は北が約32°西へ傾く。溝の断面は台形状を呈し、1期のほうが2期よりも幅広である。側溝の底面の標高はおおむね6.7～7.0mの間を前後しており、一方へ傾斜する様相を示さないが、SD819のみSD810と交わる付近で急激に深さを増す。2期の両側溝にのみ底面付近から亜円礫が出土している。道4の場合、路面が削平されているために道1のような砂利敷きであったとは断定できないが、何らかの形で路面の構築に使用された礫が側溝に落下したと推測できる。

道4と道3で切り合いから新旧関係が判明するのは、①(旧)SD806A→SD815(新)、②(旧)SD806A→SD808→SD806C→SD806B(新)であり(開み文字は道4側溝)。道4の構築時に道3の当初の側溝SD806Aは埋没していたことがわかる。道4【1期】の側溝は道3の路面部を直進して調査区外へ延びるが、道4【2期】の両側溝はSD806Aと接する部分で道3の路面を避けるように「ハ」の字状に屈曲している。この状況から、道4【2期】における道3は、側溝は埋没していたものの路面部分は機能していたと考えられる。

F その他の溝・性格不明遺構

1) 概要

道路側溝を除く溝跡は17条である。

5区で検出した長軸5m以下の短小な溝(SD603・605・606・637・663・769)はいずれも掘り込みが不明瞭で、切り合い関係も1類の土坑以外のすべてより新しいため、中世の集落とは直接関係しない可能性が高い。また、掘立柱建物に伴う雨落ち溝と考えられるものは確認できていない。

6区で検出した大型の溝SD805・810・821はいずれも道3・4より古いものである。調査区が狭小なため、機能や方向性など不明な点が多い。

2) 各説

SD805(図版21・36)

28BBグリッドから西北西方向に延び調査区外へ続く。道3・道4の側溝より古く、SD821より新しい。

断面形状は北側の傾斜がなだらかである。起点となる箇所は土坑状に深く掘り込まれている。遺物は土師質土器小皿 1 点（図版 24-17）が土坑状の部分から出土しているほかは上層からの出土である。

SD821（図版 21・36）

大部分が SD805 と重複してこれに切られる。西北西・東南東とも調査区外へ続く。平面形は 28BB3 グリッド付近で北側にやや張り出し、緩く湾曲するものとみられる。遺物は出土していない。

SD810（図版 23・36）

29・30Z グリッドから西北西一東南東方向に一直線に延び調査区外へ続く。西側は 5 区で検出されていないことから、5 区・6 区の間で屈曲または収束すると考えられる。

断面形は V 字状を呈し、南側の傾斜は急である。北側は階段状に立ち上がり、最上段は幅 1m 程のテラス状の平坦面を設けている。覆土の堆積状況から、少なくとも 4 時期の変遷が確認できる。階段状の立ち上がりやテラス面は 2 期には既に機能していないようであるが、当初の掘削時には北側から溝へ降りていくような利用法も想定し得る。覆土には一部流水に由来するとみられる細砂やシルトの薄層が認められるものの、水路のように當時滞水していたとは考えにくい。

重複する遺構には、SD810 の覆土を切るもの（SD819）、掘削中に検出したもの（SB1051 の柱穴及び P812・813）、完掘後に検出したもの（SE1030・P1004）がある。掘削中に検出したものは、SD810 の上面が道 1 の路面の影響で変質していたため見落としたものであり、SD810 より新しいと判断した。

遺物は 4 期の埋没過程に伴うものが多い。最下層から須恵器の杯身が 1 点出土しているが（図版 25-37）、古代の遺物はこの 1 点のみであり溝の掘削時期を示すとは考えにくい。この 1 点を除くと、溝の上層から下層まで遺物の年代に顕著な差は認めがたい。

SD612・SD660・SD661（図版 22・35）

幅約 4m の浅い溝 SD612 の底面の両側に SD660 と SD661 が並列する。SD660 は位置・規模からみて 4 区の SD490 と同一遺構であり、25Y14 グリッド付近で北へ屈曲すると考えられる。4 区は遺構確認面が 5 区より約 30cm 低いために SD612 を検出できていないが、本来は SD490 の西側までは続いていたと思われる。SB774 の柱穴に切られる。

これら 3 条の溝は方向性等から一体で機能したことが明らかである。幅広で底面が平坦な溝の両脇に排水溝が巡るという解釈から、「掘込田」の可能性を想定し、土壤サンプルの花粉分析及び植物珪酸体分析を行ったが、作物生産を裏付ける結果は得られなかった（第VI章）。

SX1045（図版 8）

28BB16 グリッド付近に位置する落ち込みである。三方を調査区壁、一方を攪乱に開まれ規模・形状は不明である。土師質土器小皿が 1 点出土した（図版 24-27）。

第V章 遺 物

1 概 要

遺物は浅箱4箱分が出土した。今回の調査区で検出した遺構は近世の道路と土坑を除くとすべてが中世の所産であることから、出土した土器・陶磁器の時期別の内訳をみても、近世以降が32点、中世が179点、古代が2点、縄文時代が6点と、中世が多数を占める。それ以外の材質の遺物には帰属時期を特定できないものもあるが、上記の傾向を踏まえ、確実に時期が特定できるもの以外は便宜的に中世の遺物として扱う。

中世の遺物は材質ごとに項を分け、土器・陶磁器類は出土遺構別に検討する。土器・陶磁器類の年代観は、貿易陶磁器は山本信夫〔2000〕、珠洲焼は吉岡康暢〔1994〕、土師質土器は水澤幸一〔2005〕、瓷器系陶器は小田由美子〔1999〕・鶴巻康志〔2005〕等を参照した。珠洲焼は吉岡編年Ⅲ～Ⅳ期の所産であり、その他もおおむね同時期に位置付けられるが、小破片が多いため細分は困難である。

中世以外は点数が少ないため各節でそれぞれ一括して検討する。近世陶磁器の産地・年代は相羽重徳・安藤正美・大橋康二・近藤真佐夫・吉田博・渡邊ますみの各氏に御意見を賜った。

2 近 世 の 遺 物 (図版 24)

1は徳利、2は椀である。ともに肥前系磁器で17世紀後半から18世紀の製品である。1と同一個体と思われる破片がほかに数点出土している。

3は椀である。胎土が肥前産とは異なり、黒色の粒子を含む。近藤真佐夫氏・吉田博氏より、会津盆地でも類似する製品を散見するが、会津本郷焼とは異なるようとの御教示を受けた。会津地方の未調査の窯の製品である可能性を想定しておきたい。会津の焼物は阿賀野川から新潟湊を介して日本海側にも流通しており、新潟県内では下越地方を中心に出土例が報告されている〔相羽2006〕。会津の製品とすれば時期は19世紀代であろう。

4は土製の焙烙である。外面には使用時の煤が付着している。口縁部はわずかに外反気味に直立しヨコナデを施す。体部は外型で成形し口縁部と体部の外面接合部位はユビナデで平滑に仕上げる。底部は丸底と想定される。いわゆる江戸在地系焙烙と同様の形態・製作技法である。両角まりは、この種の焙烙の製作技法が18世紀後半以降、江戸から主要街道沿いに拡散することを指摘し、高崎城三の丸遺跡を例示する〔両角1996〕。三国街道で上野とつながる越後の事例にも示唆を与える見解である。

以上の近世以降の出土遺物は道1の両側溝SD801・SD802から出土している。SD801・SD802出土遺物の年代は中世以前のものを除くと17世紀後半が上限で18世紀代が主体となる。このことは道1の敷設時期についての手掛かりの一つとなろう。

3 中世の遺物

A 土器・陶磁器(図版24・25)

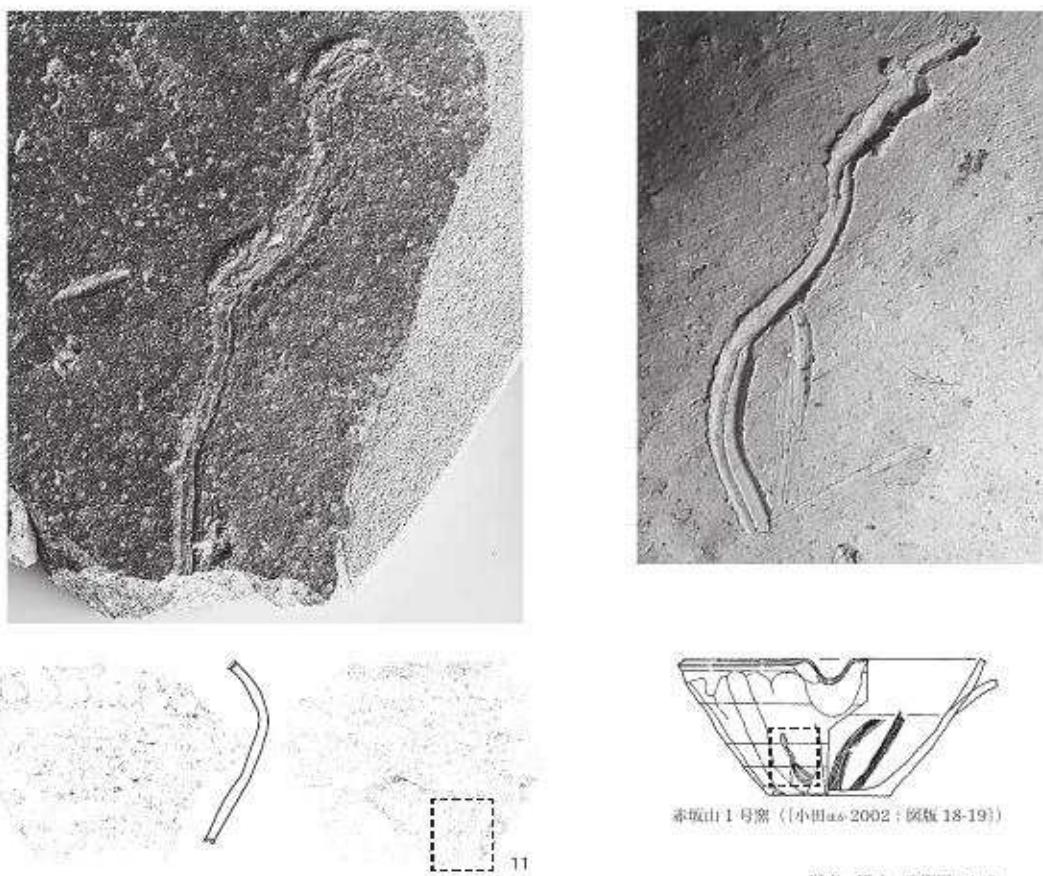
SE646 (5) 珠洲焼の甕である。

SE843 (6・7) 6は土師質土器の小皿である。ロクロ成形で底部は糸切りである。時期は13世紀中葉から後半である。7は珠洲焼の片口鉢である。

SK613 (8～11) 8は土師質土器の小皿である。ロクロ成形で底部は回転ヘラ切りである。時期は14世紀前半である。9と10は珠洲焼の片口鉢である。

11は瓷器系陶器の甕である。P771出土片と接合関係にある。肩部の押印から阿賀野市狼沢1号窯の製品と判断される。山口野中遺跡では4区でも2点の押印を施す瓷器系陶器甕が出土しており、いずれも11と同印である〔村上ほか2015〕。体部の中位には、蛇行する沈線を縦に一条施す。類例は、赤坂山1号窯の片口鉢に認められる。単純な意匠ではあるが、屈曲点の位置や角度など偶然の一致とは考えにくいほどに酷似している(第24図)。赤坂山1号窯は常滑5型式、狼沢1号窯は6a型式並行期に位置付けられるが、赤坂山2号窯覆土の出土遺物には6a型式が含まれることから〔小田ほか2002〕、狼沢と赤坂山の操業期間は一部重複すると考えられる。類似する線刻は、両窯場の工人の交流を示す可能性がある。破片資料では気付きにくい線刻であるが、今後の類例の増加に期待したい。

SK687 (12) 珠洲焼の片口鉢である。



第24図 類似する線刻

写真：原寸。実測図：1/8

道1 (13・14) 第IV章で述べたように、近世の道路遺構である道1の路床の盛土は、周辺の土を利用しているために中世の遺物が混入する。13は珠洲焼の甕の口縁部である。14は土師質土器の小皿である。

SD601 (15) 土師質土器の皿である。ロクロ成形で底部は回転ヘラ切りである。

SD805 (16・17) 16は土師質土器の皿である。ロクロ成形で、底部の切り離し技法は摩滅により確認できない。17は土師質土器の皿である。ロクロ成形で底部は糸切りである。時期は13世紀後半以降である。

SD819 (18・19) 18は珠洲焼の片口鉢である。19は龍泉窯系の蓮弁文の椀である。山本分類IIbまたはIIcに相当し時期は13世紀後半ないし14世紀初頭である。

SD810 (20～26) 20は土師質土器の小皿である。てづくね成形で時期は14世紀である。21は土師質土器の小皿である。ロクロ成形で底部は回転ヘラ切りである。時期は14世紀である。22は土師質土器の皿である。ロクロ成形で底部は糸切りである。23は土師質土器の皿である。ロクロ成形で底部は糸切りである。内面から口縁部側の破断面に煤が付着することから、口縁部を打ち欠いて燈明皿として使用したと考えられる。24は珠洲焼の甕である。25は珠洲焼の片口鉢である。26は珠洲焼の壺である。

SX1045 (27) てづくね成形の土師質土器の小皿である。時期は14世紀である。

P705 (28) 珠洲焼の片口鉢である。

P771 (29) 珠洲焼の片口鉢である。

遺構外 (30・31) 31は土師質土器の小皿である。ロクロ成形で底部は糸切りである。30は珠洲焼の片口鉢である。

B 土器転用研磨具（図版25）

珠洲焼の甕の体部を転用した研磨具が5点出土した。32・33はSD810、34はSD601、35・36はSK613からの出土である。過去の調査で出土したような筋状の研磨痕を有するものはない。35は、端面の一部が顕著に摩耗しており、右手に持つとちょうど手になじむサイズであることから、手に持って使用する研磨具として意図的に成形した形状と考えられる。このほかの内外面に広い研磨痕を有するものは、台などに固定し置いて使用したと考えられる。

C 金属製品・鍛冶関連遺物（図版25）

非鉄金属製品では、SD810の4時期目の覆土から皇宋通宝の破片が1枚分出土した(39)。

鉄製品では、刀子(47)、釘(40・41)、不明鉄製品(42～46・48)が出土した。

刀子は茎の先端を欠損する。関は刃側がやや不明瞭だが、刀身と茎の幅の違いから両関式と判断した。茎部には目釘孔と思われる影がX線写真で確認できる。鞘・柄は残存しないが、全体に刀身の方向に対して斜行する繊維の痕跡が確認できることから、有機物を巻き付けていた可能性がある。なお、本例はSK687に埋置されたような出土状況を呈するが、これと刀身長がほぼ等しい両関式の刀子が、隣接する4区でもやはり大型の土坑または井戸(SK488・SE386)から出土しており[村上ほか2015]、共通の儀礼的な行為に伴う可能性がある。

48は湾曲した板状の鉄製品である。X線写真によって、2列に等間隔で穿孔されている状況が確認できた。表土からの出土であり近代以降の製品の可能性もあるが、錆化の状況は他の鉄製品と類似する。

鍛冶関連遺物では、土製の鞴の羽口の一部(49)と鉄滓(50)が出土した。羽口の外面には光沢のある

多孔質の鉱滓が融着している。

D 石製品（図版 26）

石製品には、時期の異なる遺物を含むが、ここで一括して記述する。材質は、①凝灰岩系、②軽石、③チャートに分かれる。

①は砥石または磨石として利用された。本体を加工して石の自然面を残さないもの（51～53）と、自然面を砥面とするもの（54～56）がある。

②には、形状が丸味を持ち中央に穿孔するもの（57・58）、無孔のもの（59・60）、不定形のもの（61）がある。軽石製品は阿賀野川流域において縄文時代から近世の遺跡で出土しており、中世の遺物と断定できない。実際、59は5区において縄文時代の調査のために重機で間層掘削を行っている際に出土したもので、他より古い時期の所産である。立木宏明〔2014〕の集成によれば、有孔の57は新潟市上浦遺跡〔坂上2003〕、58は五泉市観下遺跡〔山崎ほか2004〕・阿賀野市町道上遺跡〔古澤2002〕に類例が存在する。また、無孔の60は円碟中形、59は円碟小形に該当する。なお、57と59は水に浮くが、58と60は浮かず、穿孔の有無と浮力は相関しない。

③はSD815の土壤サンプルに混じっていた石錐1点のみである（62）。2区下層において類似する製品が縄文時代晩期の遺構から出土している〔村上ほか2015〕。

4 古代の遺物（図版 25）

37はSD810の最下層から出土した須恵器無台杯である。小泊窯産で春日編年のV期（9世紀前葉～中葉）に位置付けられる〔春日1999〕。山口野中遺跡では2区で一定量出土している〔村上ほか2013〕。

5 縄文時代の遺物（図版 25）

38は基本層序IV層から出土した深鉢である。外面に条痕を施す。ほかにも周囲から数点出土したが、1個体に復元できるほどではなく、小破片のため図示できなかった。

第VI章 自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

山口野中遺跡Ⅲ（新潟県阿賀野市月崎地内）は、現在の阿賀野川右岸および旧小里川右岸に分布する微高地に立地する。本遺跡の発掘調査の結果、鎌倉時代～室町時代（13世紀後半～14世紀）を中心とする遺構や遺物が確認されている。また、本遺跡周辺におけるこれまでの発掘調査成果などから、およそ南北に伸びる幹線道路を基軸とする当該期の集落の広がりが明らかとされており、今回の調査区は町場とされる領域の西側に近接する。

本報告では、山口野中遺跡Ⅲの発掘調査で確認された遺構や堆積層の年代、掘込田の可能性がある掘り込みの用途や性格の検討を目的として、自然科学分析を実施した。

2 放射性炭素年代測定

A 試 料

試料は、中世と考えられる土坑（5区 SK611）、掘立柱建物（SB774）に帰属する柱穴（5区 P629、P670）、火葬遺構（6区 SK804）、隣接する境塚遺跡より続くと考えられる堀跡（6区 SD810）、道路跡に伴う溝跡（側溝）など（6区 SD806A、6区 SD816、6区 SD819）と、縄文時代晩期とされる堆積層（5区 26Z10 グリッド）より採取された炭化材9点である（表1）。なお、放射性炭素年代測定には、いずれの試料も抽出した炭化材片の残存する最外年輪部より数年輪分を供している。

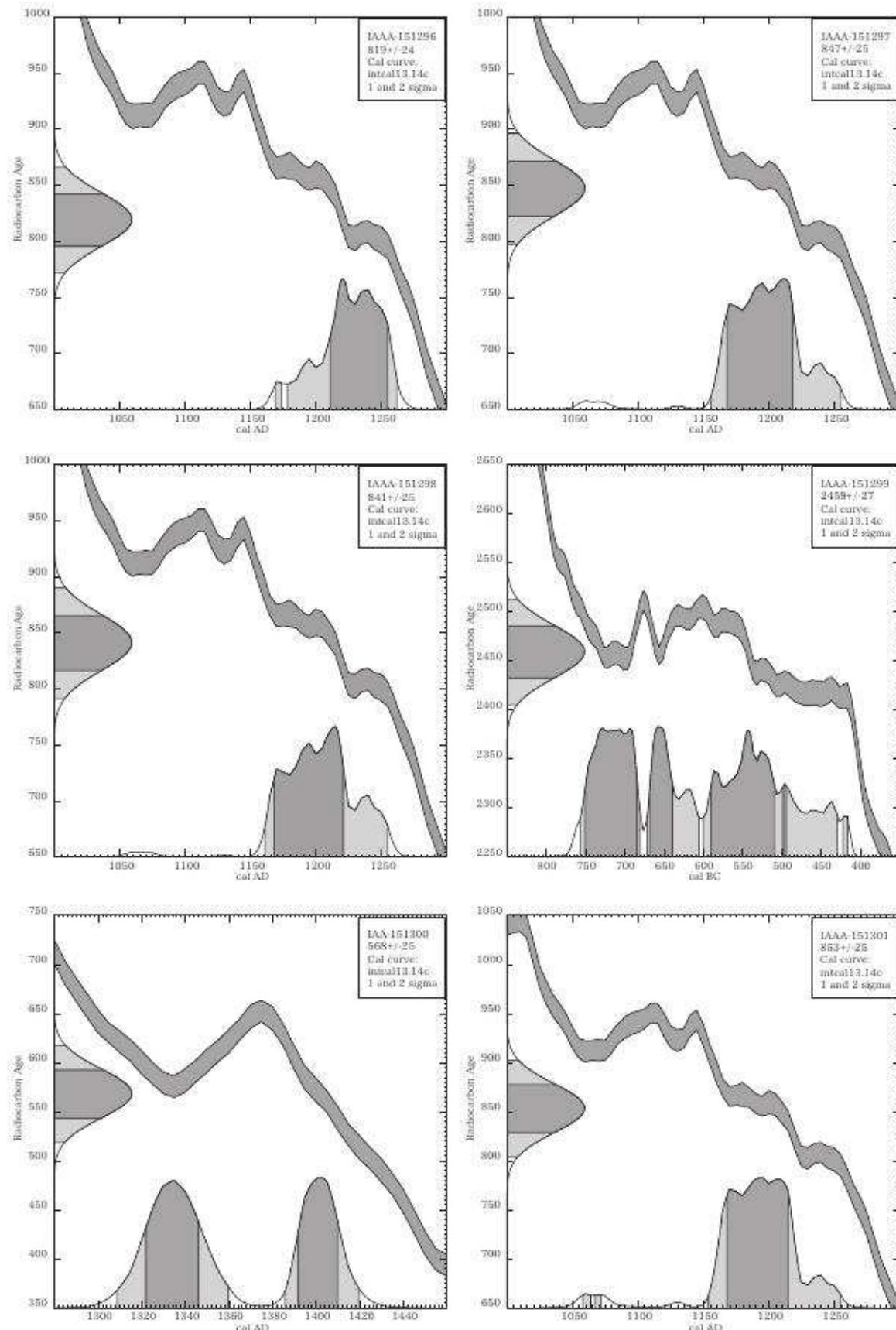
また、本分析では、試料の履歴に関わる情報を得ることを目的として炭化材の樹種の確認を行っている。その結果は表1に併記したので参照されたい。

B 分析方法

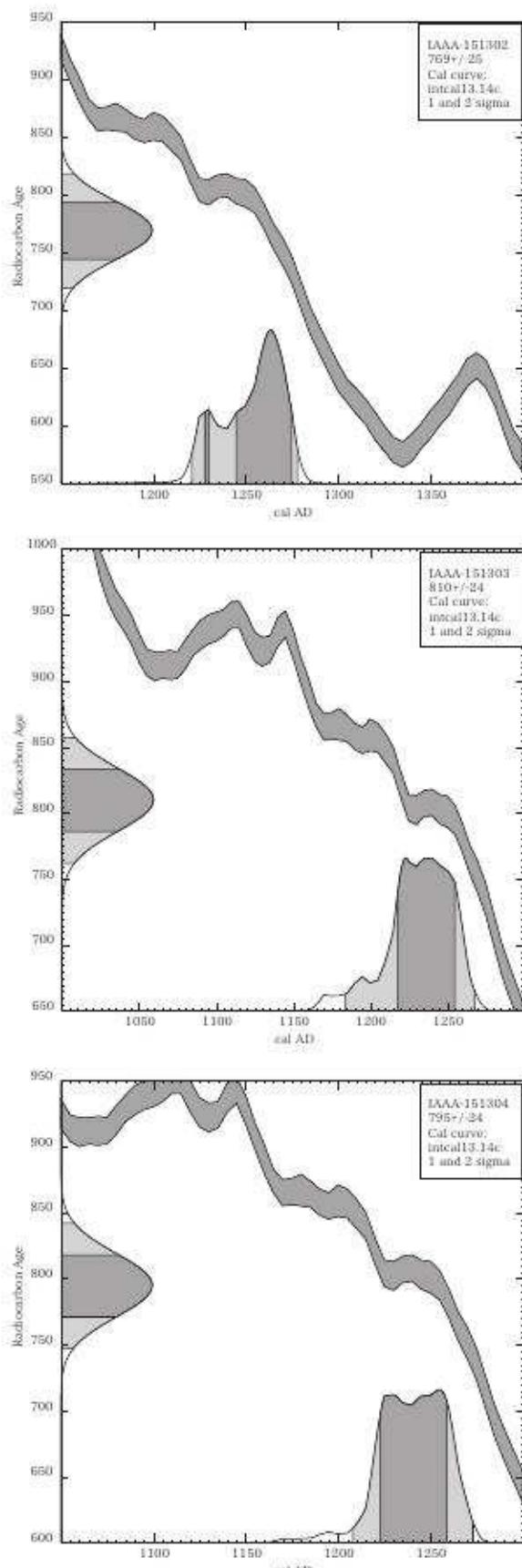
測定試料に土壤や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後、HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C（30分）850°C（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシユウ酸（HOX-II）とバツクグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³C

2 放射性炭素年代測定



第25図 曆年較正結果(1)



第26図 暗年較正結果(2)

calAD 1,209 - calAD 1,274 を示す(表1、図1)。

D 考 察

前述した放射性炭素年代測定結果に基づく暗年較正結果(2σ)のうち、縄文時代晩期とされる堆積層から出土した炭化材(5区26Z10)の暗年較正年代(2σ)は、calBC 756 - calBC 416(calBP 2,705 - 2,365)を示した。[小林 2008・2009]などを参考とすると、この年代は縄文時代晩期後葉から末葉頃に相当し、調査所見を支持する結果と言える。

また、中世とされる各遺構の暗年較正年代(2σ)は、土坑(5区SK611)や柱穴(5区P629、P670)、堀跡(6区SD810)や道路跡に伴う側溝(溝跡)(6区SD806A、SD816、SD819)などはおよそ13世紀前後に集中する傾向にあり、火葬遺構(6区SK804)は14世紀前半から15世紀前半頃に相当する。

このうち、柱穴2基(5区P629、P670)より出土した炭化材は、いずれも12世紀中頃から13世紀中頃に相当する暗年較正年代を示した。これらの柱穴は同一の掘立柱建物(SB774)に帰属することが指摘されているが、およそ同時期とみなせる年代を示すことから、この調査所見を支持すると考えられる。また、道路跡に伴う側溝のうち、6区SD816と6区SD819は同一の道路跡に伴う側溝であり、調査所見から旧側溝(6区SD816)、新側溝(6区SD819)という新旧関係が明らかとされている。これらの遺構より得られた年代は、放射性炭素年代(補正年代)や暗年較正年代のいずれも旧側溝でやや古い値を示す傾向にある。このような結果を踏まえると、上述した調査所見を反映することや新旧の側溝の時期差が極めて短かいなどの状況が推定される。なお、今回の測定に供した試料はいずれも年輪の部位を特定できない炭化材であったことから、古木効果などにより本来の使用(伐採)年代や埋没した年代よりも古い年代を示している可能性がある。そのた

め、各遺構の本来の年代や新旧関係の評価にあたっては、これらの点を踏まえた慎重な検討が望まれる。

この他、噴砂が確認された土坑（5 区 SK611）より出土した炭化材は 12 世紀後半から 13 世紀後半頃までを示した。本遺跡では過去に中世以前と推測される噴砂を対象とした残留磁化測定による推定年代 ($1,275 \pm 25$) [酒井ほか 2013] が得られているが、今回の結果はこの推定年代を含む曆年較正年代を示しており、その関連性が注目される。

3 花粉分析・植物珪酸体分析

A 試 料

試料は、調査所見より堀込田の可能性が推定される掘込み（5 区 SD612）と、同遺構内の壁際に確認された溝（5 区 SD660, 5 区 SD661）、および 5 区 SD612 の底面を構成する堆積層（IVa 層）より採取された土壌 6 点である。

これらの試料は、5 区 SD612 に設定された土層確認用の断面（SPA-SPA'）より採取されており、5 区 SD612 埋積物（覆土）より 3 点（SD612 サンプル A, SD660 サンプル C, SD660 サンプル D）、SD660・SD661 の埋積物より各 1 点（SD660 サンプル, SD661 サンプル）、さらに 5 区 SD612 の底面を構成する堆積層（IVa 層）より 1 点（5 区 SD612 サンプル B）からなる（図 2）。

また、これらの試料の観察では、5 区 SD612 埋積物に相当するサンプル A が灰褐色シルト、SD660 サンプル C, D が植物根が混じる褐灰色粘土質シルト～シルト、SD660 サンプルが灰色粘土質シルト、SD661 サンプルが灰白色のブロックが混じる褐灰色シルト、5 区 SD612 の底面を構成する堆積物（サンプル B）は灰褐色粘土質シルトからなる。

本分析では、以上の土壤試料 6 点を対象として、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。



第 27 図 試料採取位置

B 分析方法

1) 花 粉 分 析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレバラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレバラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や [島倉 1973], [中村 1980a], [三好ほか 2011] 等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。表中で複数の種類を - (ハイフン) で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

2) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体）を、[近藤2010]の分類を参考に同定・計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、各分類群の含量は100単位として表示し、100個/g未満は「<100」と表示する。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

C 結 果

1) 花 粉 分 析

結果を表2に示す。いずれの試料も分析残渣量が少なく、花粉化石は定量分析が可能な個体数が得られなかった。なお、わずかに検出された花粉化石の保存状態は、普通～やや悪い程度である。

検出された花粉化石についてみると、木本花粉はマツ属、スギ属、クルミ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属など、草本花粉はイネ科、サンエタデ節-ウナギツカミ節、ナデシコ科、ヨモギ属、キク亜科などが認められる。また、栽培種は、5区SD612サンプルAからイネ属が1個体確認されたのみである。

種類	SD612		SD660		SD660		SD661		SD612	
	サンプルA	サンプルC	サンプルD	サンプル	サンプル	サンプル	サンプル	サンプル	サンプルB	IVa層
木本花粉										
マツ属泡管束重属	1	5	-	-	8	1	-	-	-	-
マツ属(不明)	1	2	-	-	3	-	-	-	1	-
スギ属	2	1	-	-	-	-	2	-	-	-
クルミ属	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-
ハンノキ属	-	1	3	-	-	2	-	-	3	-
ブナ属	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-
コナラ属コナラ相属	-	-	-	-	2	-	-	-	2	-
コナラ属アカガシ相属	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
ニレ属-ケヤキ属	1	-	-	-	2	-	-	-	-	-
エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
草本花粉										
イネ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のイネ科	1	-	1	1	1	-	-	-	-	-
サンエタデ節-ウナギツカミ節	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ナデシコ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-
キク亜科	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
不明花粉										
不明花粉	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-
シダ類胞子										
シダ類胞子	14	8	23	37	46	7	-	-	-	-
合計										
木本花粉	6	11	3	18	6	8	-	-	-	-
草本花粉	3	0	2	3	1	1	-	-	-	-
不明花粉	0	0	0	1	0	1	-	-	-	-
シダ類胞子	14	8	23	37	46	7	-	-	-	-
合計(不明を除く)	23	19	28	58	53	16	-	-	-	-

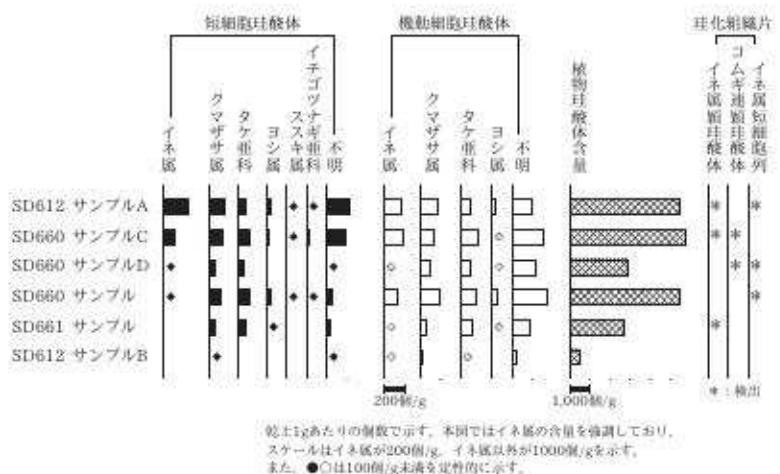
第5表 花粉分析結果

2) 植物珪酸体分析

結果を表3、図3に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されたが、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

植物珪酸体含量は、5区SD612埋積物より採取された3試料(SD612サンプルA, SD660サンプルC, D)が2,800～5,700個/g、同遺構に伴う溝跡の埋積物2試料(SD660サンプル, SD661サンプル)が5,500～2,600個/g、SD612底面の堆積層(SD612サンプルB; IVa層)が500個/gである。

各試料からは、栽培植物のイネ属の葉部に形成される短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が産出する。そ



第28図 植物珪酸体含有量

の含量は、短細胞珪酸体がSD661サンプル、SD612サンプルBが未検出であるほかは、100個/g未満～200個/g程度であり、機動細胞珪酸体が100個/g未満～200個/g程度である。この他、イネ属の穎(穎殼)に形成される穎珪酸体や短細胞列なども検出され、栽培種を含むコムギ連の穎珪酸体も認められる。

また、栽培種を除く分類群では、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが検出される。なお、SD612サンプルBは確認された分類群が少なく、クマザサ属を含むタケ亜科が確認された程度である。

D 考 察

1) 遺構の性格および栽培植物

掘込田の可能性が指摘された5区SD612とそれに伴うSD660・SD661などより採取されたいずれの試料からも、栽培植物のイネ属珪酸体が産出した。安定した稲作が行われた水田跡の土壤では、栽培されていたイネ属の植物珪酸体が土壤中に蓄積され、植物珪酸体含量(植物珪酸体密度)が高くなる。水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(機動細胞由来)が試料1g当たり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている[杉山2000]。

今回の試料におけるイネ属の機動細胞珪酸体の産状についてみると、各試料を通じて100個/g未満～200個/g程度と含量が極めて低く、上述した判断目安を大きく下回る。また、SD612底面を構成するIV層(SD612サンプルB)との比較では、植物珪酸体含量は大きく異なるものの、上記した試料と同様にイネ属が検出されており、有意差を見出すには至らない。

一方、花粉化石の産状についてみると、化石の保存は普通～やや悪い程度であったものの、産出状況は

分類群	SD612 SD660 SD660 SD661 SD612 サンプルA サンプルC サンプルD サンプル サンプル IV層				
	イネ属部短細胞珪酸体	イネ属	クマザサ属	タケ亜科	ヨシ属
イネ属	200	100	<100	<100	—
クマザサ属	800	600	200	600	200
タケ亜科	400	600	300	600	400
ヨシ属	200	100	—	200	<100
ススキ属	<100	<100	—	<100	—
イチゴツナギ亜科	<100	100	—	<100	—
不明	1,100	900	<100	300	200
イネ科葉部機動細胞珪酸体	200	200	<100	100	<100
イネ属	800	600	400	900	300
クマザサ属	500	800	500	800	600
タケ亜科	200	<100	<100	200	<100
ヨシ属	1,000	1,500	1,100	1,800	900
合計	2,800	2,400	700	1,700	800
イネ科葉部短細胞珪酸体	2,600	3,300	2,100	3,800	1,800
イネ科葉部機動細胞珪酸体	5,400	5,700	2,800	5,500	2,600
植物珪酸体含量					
珪化稻穀片					
イネ属珪酸体	*	*	—	—	*
コムギ連穎用珪酸体	—	*	*	—	—
イネ属短細胞	*	—	*	*	—

†<100: 100個/g未満

珪化稻穀片の産状: —: 未検出 *: 検出

第6表 植物珪酸体含有量

極めて少なかった。花粉化石の産状が悪い場合、取り込まれにくかった、あるいは堆積後に分解・消失したことなどが考えられる。今回の試料の場合、上述した状況などを考慮すると、堆積速度が速かったなどの要因などで花粉が取り込まれにくかった可能性がある。なお、検出された花粉化石のうち、栽培種では、SD612 サンプル A よりイネ属花粉が 1 個体検出されたのみであった。このように、栽培植物としてイネ属花粉や植物珪酸体・珪化組織片が検出されたものの、その産状が極めて悪いことから、5 区 SD612 などにおける稻作の可能性を支持することは難しく、生産遺構であるかの判断には至らない。

なお、本遺跡周辺では、柄目木遺跡や村前東 A 遺跡（阿賀野市）の中世の堆積層よりイネ属の植物珪酸体が検出されており、周辺での稻作が指摘されている〔株式会社古環境研究所 2010；パリノ・サーヴェイ株式会社 2013〕。また、柄目木遺跡の中世の井戸跡より出土した種実遺体には、多量のイネ、オオムギ、コムギをはじめとして、モモ、アワ、ヒエ、アサ、マメ類、シソ属、ナス科、メロン類などの多くの栽培種が確認されている。これらの調査事例などを考慮すると、今回の分析結果においてもイネ属の花粉や植物珪酸体などが産出したことから、当該期における周辺域での稻作やイネの利用が推定される。また、当該期にはムギ類の利用も確認されることから、珪化組織片として検出されたコムギ連穎珪酸体などはムギ類の栽培や利用を示している可能性もある。

2) 古 植 生

5 区 SD612 および SD660・SD661 より採取された 6 試料は、いずれも花粉化石の産状は悪かったが、マツ属、スギ属、クルミ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属一ケヤキ属、エノキ属一ムクノキ属などの木本花粉や、イネ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ナデシコ科、ヨモギ属、キク亜科などの草本花粉が検出された。

ブナ属やコナラ亜属などは周辺の山地や丘陵等に分布する広葉樹林に由来すると思われ、マツ属などは二次林などとして分布したと考えられる。クルミ属、ハンノキ属、コナラ亜属、ニレ属一ケヤキ属、エノキ属一ムクノキ属などは、渓谷沿いや河畔などの適湿地に生育する種類であり、スギ属も沢筋や湧水地に林分を形成することから、周辺域の氾濫原や低湿地などに分布した林分に由来する可能性がある。また、イネ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ナデシコ科、ヨモギ属、キク亜科などは、いずれも明るく開けた場所に草本群落を形成することから、調査地周辺の草地環境を反映すると考えられる。

<引用文献>

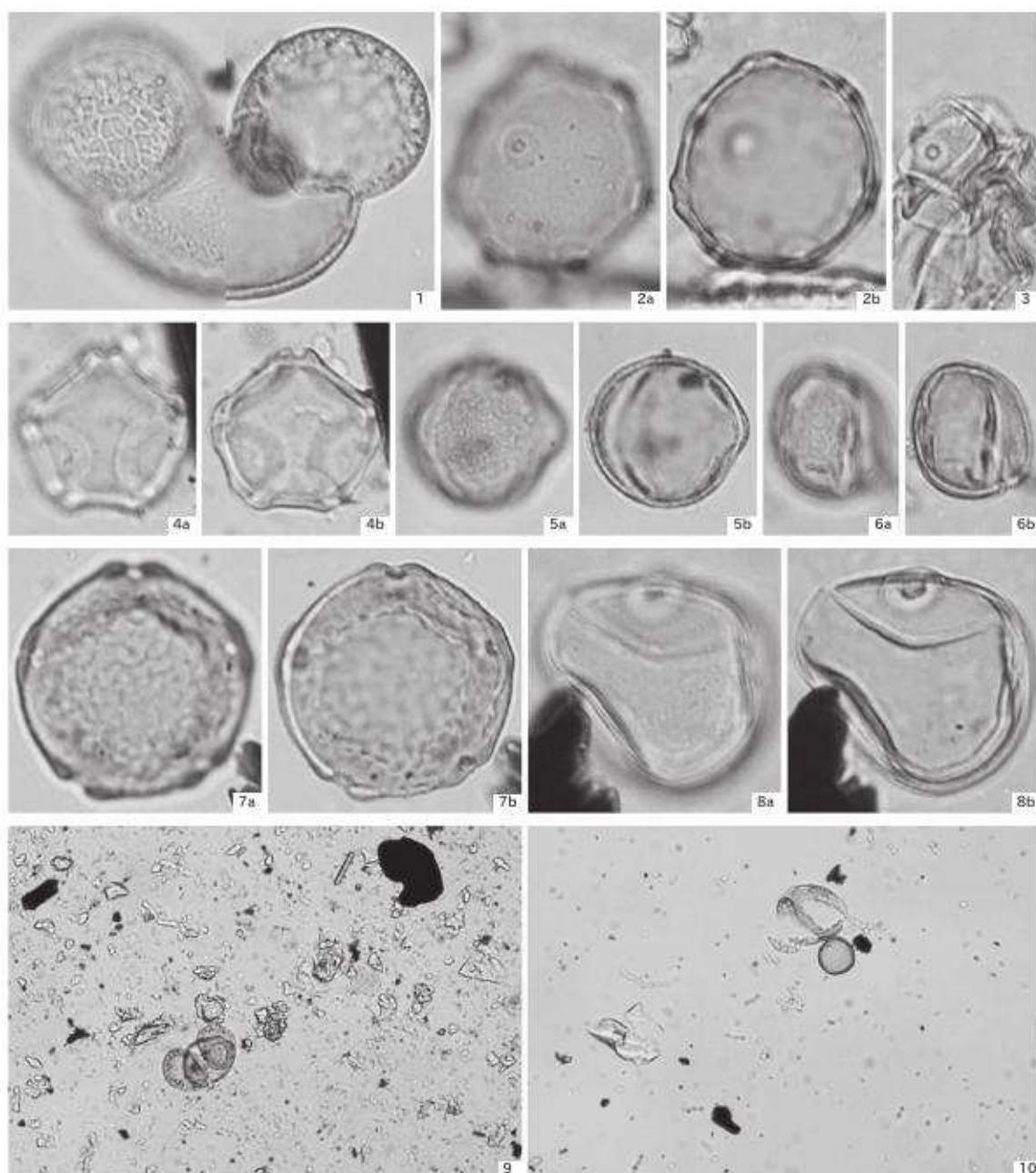
- 株式会社古環境研究所, 2010, 自然科学分析。一般国道 49 号 阿賀野バイパス関係発掘調査報告書IV 村前東 A 遺跡
村前東 B 遺跡, 新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 223 集, 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団, 51-67.
- 小林謙一, 2008, 繩文土器の年代(東日本), 小林達雄先生古希記念企画 総覧 繩文土器, 株式会社アム・プロモーション, 896-903.
- 小林謙一, 2009, 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編 弥生農耕のはじまりとその年代, 新弥生時代のはじまり 第 4 卷, 雄山閣, 55-82.
- 近藤鍊三, 2010, プラント・オハール図譜, 北海道大学出版会, 387p.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子, 2011, 日本産花粉図鑑, 北海道大学出版会, 824p.
- 中村 純, 1980a, 日本産花粉の標微 I II (図版), 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第 12, 13 集, 91p.
- 中村 純, 1980b, 花粉分析による稻作史の研究, 自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究－総括報告書－, 文部省科研費特定研究「古文化財」総括班, 187-204.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 2013, 柄目木遺跡の自然科学分析。一般国道 49 号 阿賀野バイパス関係発掘調査報告書VI 柄目木遺跡II, 新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 237 集, 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団, 44-55.

3 花粉分析・植物珪酸体分析

酒井英男・名古屋岳秀・加藤 学, 2013, 山口野中遺跡で認められた噴砂の磁化の研究。一般国道49号 阿賀野バイパス関係発掘調査報告書VII 山口野中遺跡、新潟県埋蔵文化財調査報告書 第248集、新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団, 52-57。

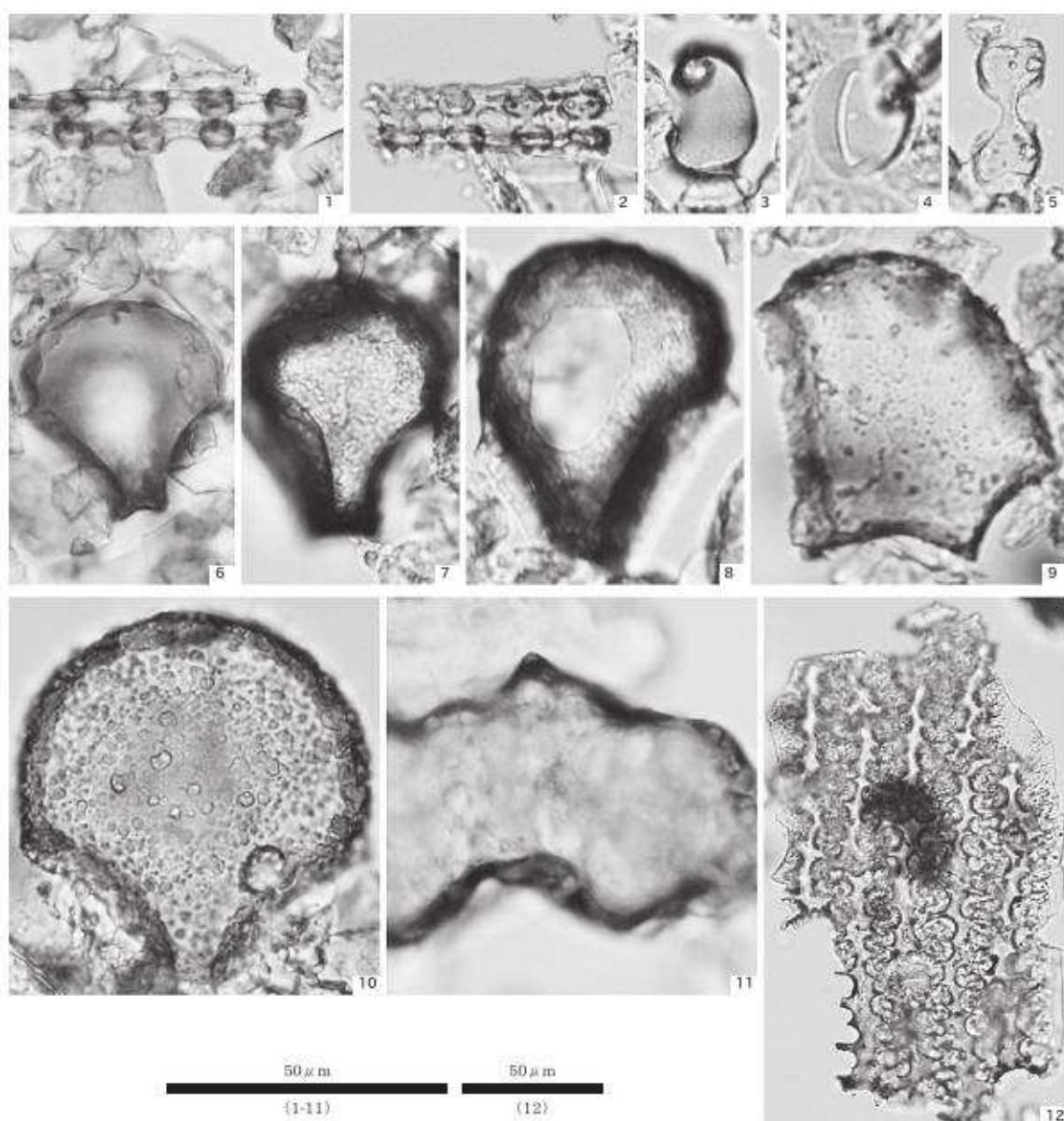
島倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態, 大阪市立自然博物館収蔵目録 第5集, 60p.

杉山真二, 2000, 植物珪酸体 (プラント・オバール), 辻 誠一郎 (編著) 考古学と自然科学3 考古学と植物学, 同成社, 189-213.



- 1. マツ属 (SD660 : サンプル)
- 2. クルミ属 (SD660 : サンプル)
- 3. イネ科 (SD660 : サンプル)
- 4. ハンノキ属 (SD661 : サンプル)
- 5. コナラ属コナラ種類 (SD660 : サンプル)
- 6. コナラ属アカシ重属 (SD660 : サンプル)
- 7. ニレ属一ケヤキ属 (SD660 : サンプル)
- 8. イネ属 (SD660 : サンプル D)
- 9. プレバラート内の状況 (SD612 : サンプル B)
- 10. プレバラート内の状況 (SD660 : サンプル C)

第29図 花粉化石



- 1. イネ属短細胞列 (SD612 ; サンプルA)
- 2. イネ属短細胞列 (SD660 ; サンプルD)
- 3. クマザサ属短細胞柱體 (SD612 ; サンプルA)
- 4. ヨシ属短細胞柱體 (SD660 ; サンプル)
- 5. ススキ属短細胞柱體 (SD660 ; サンプル)
- 6. イネ属機動細胞柱體 (SD612 ; サンプルA)
- 7. イネ属機動細胞柱體 (SD660 ; サンプルC)
- 8. イネ属機動細胞柱體 (SD661 ; サンプル)
- 9. クマザサ属機動細胞柱體 (SD660 ; サンプルD)
- 10. ヨシ属機動細胞柱體 (SD660 ; サンプルC)
- 11. イネ属頸柱體 (SD612 ; サンプルA)
- 12. コムギ連頸柱體 (SD660 ; サンプルD)

第30図 植物柱體

第VII章 調査のまとめ

1 「往来道」からみた近世北蒲原の交通事情

A はじめに

6区で検出した道1は昭和40年代頃まで使用されていた道路であるが、その敷設当初（1期）の様相について、発掘調査の結果から以下のことことが判明した。

- ① 路床には側溝掘削時に生じた土を突き固めて20cm程度盛土し、上面に砂利を敷く。
- ② 道の両脇に側溝を有し、側溝中心間は4.7～5mを測る。

道路の敷設時期は古地図の検討から1729年から1816年の間と推定され（第II章）、両側溝から出土した遺物の年代観（第V章）とも矛盾しない。また、明治時代の地図（第5図）により、小字名に残る「往来道」とは道1を指すものと考えられる。以上を踏まえ、本節では近世道路遺構としての道1＝「往来道」の位置付けを他の調査事例や文献との比較によって試みるとともに、当該道路が近世の地域社会において果たした役割を考察する。

No.	道路	所在地（調査当時）	地形	輪員（m）	側溝	側溝中心間（m）	路肩	路床	その他の構造・痕跡	街道名・通称
1	名木沢筋路	山形県尾花沢市	B	10	無		B			羽州街道
2	坂ノ上	山形県山形市	B	3.5～3.6	有	4.4	B			羽州街道
3	中山	茨城県笠間市	A	4～5	有		C	A		
4	旧宝崎院	茨城県城里町	B	1～4	部分的		一部B			
5	中津川	茨城県石岡市	A	6.4以上	無		C	A・B	轍痕、波板状凹凸面	
6	新堀東	茨城県土浦市	A	2	無		C	A・B		
7	箱田古市筋1	群馬県勢多郡北橘村	A	4.6	有					
8	御成街道	千葉県印旛郡八街市	A	3.0～4.5	無		A・B			御成街道
9	三ノ宮・下木津根	神奈川県伊勢原市	A		無		C	B		旧大山街道か
10	山口野中	新潟県阿賀野市	A		有	5	B	A		
11	会津街道	新潟県東蒲原郡三川村	B	1～3	無		A	B		会津街道
12	水上・元開発	福島県射水郡大島町	A	2.7	有	5～5.5	B	A	両側に杭列	北陸道（下街道）
13	小糸・尾森野	福島県富山市	B	2.7	有	4.1			路面上にピット群	飛騨街道東道か
14	南中田A	富山県富山市	A	1	有	2	A			
15	富山城跡	富山県富山市	A		無		A			北陸道
16	町屋口	山梨県南巨摩郡富士川町	A	2.9～3.4	有	4.2	C	A	側溝内に杭列	河岸御歳道
17	長峰若跡	山梨県北都留郡上野原町	B	1.2	無		C	B		甲州街道か
18	中山道	岐阜県不破郡関ケ原町	A	6～6.5	無		C	A	道路両脇に幅約3mの盛土（並木）	中山道
19	勝川	愛知県日井市	A	4	有	4				下街道
20	石州街道	岐根郡邑智郡瑞穂町	B	3	有	3.8	A	B		石州街道
21	道平道路	岐根郡江津市	B		部分的		C	B	一部に鉄滓敷や波板状造構	浜田三次往還
22	近世山陽道路	広島県東広島市	B	3.5～4.0	無			A・B	一里塚	山陽道、西国街道
23	馬路甚戻山	佐賀県唐津市	A	2.2	有	3	B	A		太閤道
24	肥後街道	大分県竹田市	A・B	0.8～1.2	無		一部A	A・B		肥後街道
25	草刈田	宮崎県えびの市	A	0.4～1.06	片側		C	B		

範囲は、腰や駒などによって通行規制として示されている範囲を指す。
地形は、A：平地地、B：斜面・山地に区分する。

路歴の構造は、A：石敷・石畳、B：砂利敷、C：硬化舗装に区分する。

地形は、A：平地地、B：斜面・山地に区分する。
路歴下の構造は、A：盃土・埋め土、B：覆り込み・切通しに区分する。

第7表出典：1：山形県道委員会 1993『山形県世界文化財調査報告書』188、名木沢筋路発掘調査報告書；2：財團法人山形県世界文化財センター 2006『山形県世界文化財センター調査報告書』147、小松原宿跡・長者屋敷遺跡、坂ノ上道路発掘調査報告書；3：財團法人奈良県教育振興会 2003『奈良県教育振興文化財調査報告書』204集、中山道路；4：財團法人奈良県教育振興会 2009『奈良県教育振興文化財調査報告書』316、旧宝篋院路；5：同 2011『奈良県教育振興文化財調査報告書』328、中津川道跡；6：同 2012『奈良県教育振興文化財調査報告書』358、新刷東道路；7：財團法人群馬県世界文化財調査事業団 1997『財團法人群馬県世界文化財調査事業団調査報告書』191集、箱田古市筋1・2道路；8：財團法人印旛郡都市文化財センター 1986『大船太舟道路・御成街道調査報告書』9：公益財団法人かながわ考古学財団 2012『かながわ考古学財団調査報告書』285、三ノ宮・下木津根道跡；11：三川村教育委員会 2000『三川村文化財調査報告書』第1集、会津の道常磐調査報告書；12：大島町教育委員会 2000『水上・本園發道跡・近井北條道発掘調査報告書』13：青山見 2014『小糸・尾森野道路の近世道路跡』『富山考古学研究』17、公益財团法人富山県文

化振興財團世界文化財調査事業所；14：富山萬葉城文化財センター 1990『富山萬葉城跡・南中田A道跡・任我縫合遺跡・南中田C道跡』；15：富山市教育委員会・現成文化財センター 2009『富山市埋蔵文化財調査報告書』36、富山城跡発掘調査報告書；16：山梨県教育委員会・中日本高速道路株式会社 2012『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』281、町原口道路；17：山梨県教育委員会 2010『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』188、長野跡；18：財團法人越後平野文化財保護センター 2001『枝草原文化財保護センター調査報告書』67、中山道；19：財團法人愛知県埋蔵文化財センター 1999『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第19集、勝川道跡；20：勝利町教育委員会 1993『石州街道発掘調査報告書』；21：江津市教育委員会 2011『浜田三次往還・道平道路ほか発掘調査報告書』；22：財團法人広島県教育委員会 2003『近世山陽道路・日向一里塚・石立宿跡』；23：勝浦市教育委員会 1988『勝浦市文化財調査報告書』第31集、馬頭甚戻山道跡；24：吉田市教育委員会 1988『有ノ元開発・肥後街道』；25：宮崎県えびの市教育委員会 2004『えびの市埋蔵文化財調査報告書』39、草刈田道跡。

第7表 近世道路遺構の調査例

B 近世道路の規模と構造

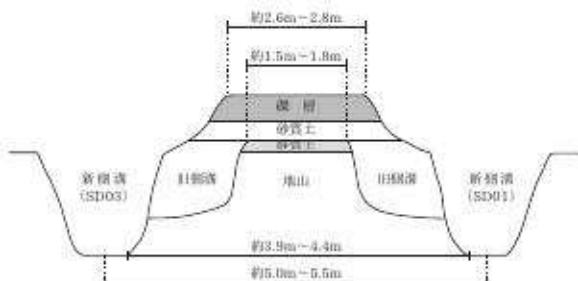
第7表には、発掘調査が行われた近世道路遺構のうち、通行部分に何らかの造作を伴うものを示した。これによれば、「往来道」の道幅（側溝中心間）は、全国的にも大規模な部類に位置付けられることがわかる。なお、江戸時代の「街道」は行政的には道中奉行が管轄する五街道と勘定奉行が管轄する脇街道に区分されるが、道路幅に関する統一的な基準はなかったと考えられている〔丸山 1970〕。五街道第一の東海道においても道路幅は一定でなく、主要な城下等で5間、標準が3～4間、山間部が2間ほどであったというから〔武部 2003〕、「往来道」より道幅が狭いことも珍しくなかった。

路面の構造には、土を踏み固めただけのもののほかに砂利敷と石畳がある。石畳といえば箱根路が著名だが、発掘調査例も斜面地や山間部に偏在することから、平野部においては基本的に砂利敷が最も格の高い道路であったと考えられる。武部健一も、江戸時代の道路構造について「街道は一般に砂利道であった」「坂道ではしばしば石畳が用いられた」としている〔武部 2003：101-102頁〕。

規模・構造及び遺構の検出状況が「往来道」と最も類似する調査例として、富山県射水市（旧大島町）の水上・本開発遺跡の北陸街道「下街道」を挙げる〔田中 2000〕。17世紀後半～18世紀前半の街道整備期には、地山を盛って路床を成形し、上面に1～5cmの大の礫を敷いている。礫の一部は側溝中に崩落するという堆積状況を示す。側溝中心間は5～5.5m、側溝の内側には並行して土留めの木杭が打たれ、幅員は2.7m程度である（第31図）。このように、「往来道」と北陸街道の規模・構造が、木杭の設置を除きほぼ一致する点は注目できよう。

江戸時代の道路構造を記した文献史料としては、文政10年（1827）の「東海道往還道造御普請出来形帳」が挙げられる〔神奈川東海道ルネッサンス推進協議会 2000：100-101頁〕。これによれば、神奈川宿の東海道における補修工事に際し、道幅2間の範囲を1尺の厚さで盛土し、その上面に砂利を幅9尺、厚さ2寸で敷いたとあり、「往来道」と同様の工法が東海道に用いられていたことがわかる。

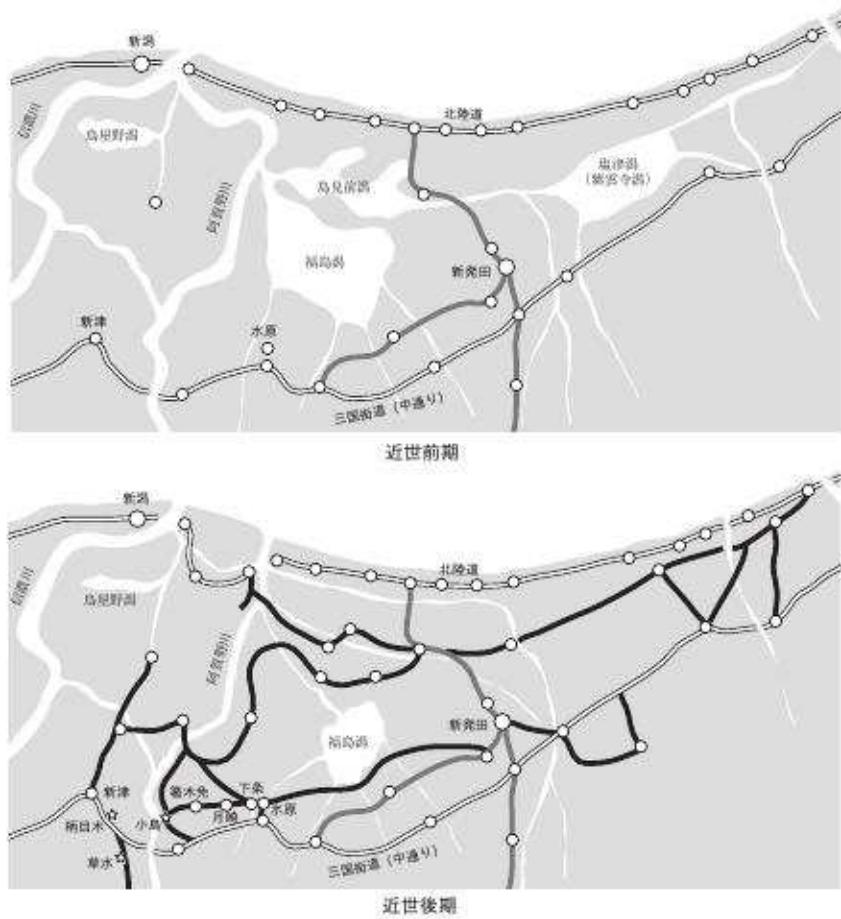
以上のように、敷設当初の「往来道」の構造及び規模は江戸時代の「街道」クラスの道路のそれに遜色ないものである。越後興地全図（第8図）を見ると、破線で表示される道路がある一方で、「往来道」に相当する月崎一下条間は線こそ細いものの三国街道中通りと同じ朱線で描かれており、重要な道路と認識されていたことを示唆している。「往来道」より低いランクの道路遺構の実例としては、1区で検出した側溝の中心間が約2.5mで通行部分の造作を伴わない道路（SD184・185）などが挙げられよう〔村上ほか 2013〕。



第31図 水上・本開発遺跡の北陸街道概念図 [田中 2000]

C 「往来道」の地域史的意義

近世後期の北蒲原地域は、享保11年（1726）の加治川の瀬替工事、享保15年（1730）の阿賀野川松ヶ崎放水路の開発によって、海岸砂丘の後背に滞水していた塩津潟（紫雲寺潟）・福島潟が一気に減水したことで大規模な新田開発の時代を迎えていた。これを契機として、それまでの主要交通路である丘陵沿いの三国街道中通りに加え、縮小した福島潟の南側を経由して新発田と水原を結ぶ新たなルートが開発された〔桑原 1987〕（第32図）。「往来道」の年代の上限である享保14年（1729）の「阿賀野川悪水抜き堀割場



桑原〔1987〕を基に作成。ただし月輪周辺については「越後夷地全図」により加筆。

第32図 近世北蒲原の交通路

所絵図」(第8図)はまさにその前夜の北蒲原を描いた絵図である。

新田開発の活発化と連動して延享3年(1746)には水原に代官所が設置され、周辺農村の幕領化も進んだ。また、笛岡の市が衰退したことで水原の六斎市が復興し、新潟・沼垂の鮮魚、新発田の織物、近隣の農作物などが持ち込まれ活況を呈したのもこの頃である〔小村 1971〕。

「往来道」の敷設は、こうした近世後期の北蒲原地域における内水面の干拓と新田開発の活発化、水原町の台頭と代官所の設置、そしてこれらに伴う交通網の再編、という歴史的な文脈の中に位置付けることができる。従ってその時期は、古地図の検討から導かれる1729年から1816年のうちでも、水原代官所が設置される18世紀中葉前後に絞り込める可能性が高い。

「往来道」の利用を示す史料として、天保11年(1840)の『当国道中記』がある。それによれば、下越後の見聞に出かけた魚沼郡塩沢の山口民之助は、新津から草水の油田、柄目木の火井、小島のハ房梅といった名所を訪れた後、水原を経て新発田へと向かっている。この際、小島-箸木免-水原と進んでいることから〔桑原前掲書: 81頁〕、第9図によれば民之助が「往来道」を歩いたことは確実である。江戸時代には庶民の名所旧跡巡りが全国的に流行したわけだが、越後でこれが盛んになるのは浄土真宗の開祖親鸞と高弟24人の足跡を訪ねる「二十四輩巡拝」に関する旅行案内書が出版される18世紀中葉以降とされ〔渡部 2013〕、奇しくも「往来道」の推定敷設時期と一致する。上述のハ房梅など、親鸞の聖跡を含むいわゆる越後七不思議は阿賀野市域や隣接する旧新津市域(新潟市秋葉区)に集中しており、多くの

旅行者を惹きつけたと思われる。こうした動向と「往来道」の敷設に直接の因果関係はないとしても、民之助の例にみるよう、「往来道」がこのブームを足下で支えていたことは確かである。

以上のように、「往来道」をとおして近世後期の地域社会をめぐる政治・経済・文化の諸側面を垣間見ることができた点は今回の調査成果の一つといえよう。

2 中世の集落について

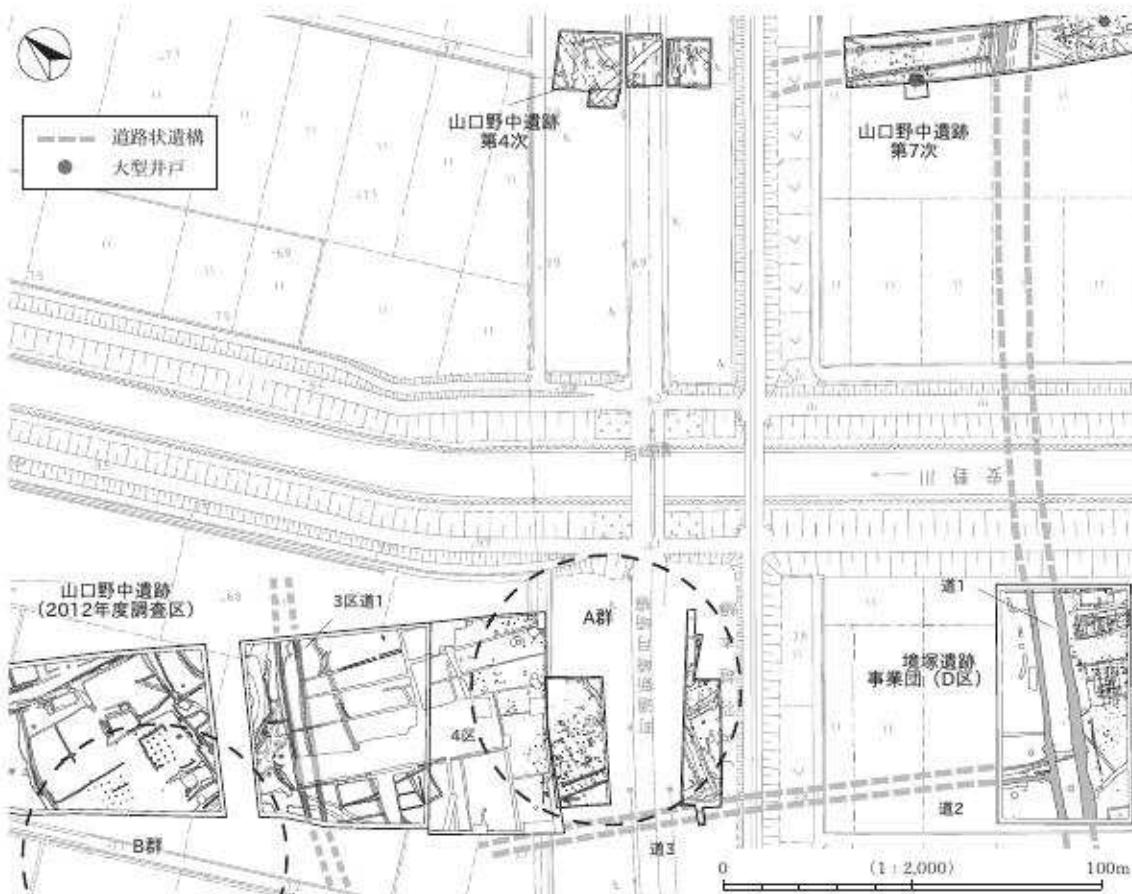
A はじめに

中世の調査については、遺物包含層が既に存在せず、遺構検出面が1面という状況から、出土遺物が多く、層位的な遺構の新旧関係も捉えにくい。遺構から出土したわずかな遺物は珠洲焼のⅢ期からⅣ期(13世紀後半から14世紀)が主体であり、土師質土器や輸入陶磁器の年代観ともおおむね一致する。しかし、大半が小破片のため、詳細な時期比定や遺構の新旧関係の判断にはあまり有効でない。

以上のような難しい条件下ではあるが、本節では隣接地の調査成果や自然科学分析の結果を踏まえながら、調査区周辺での土地利用の変遷について考察する。

B 遺構の変遷

今回の調査では、中世の掘立柱建物を7棟検出した。調査面積が狭いことから全容が不明な建物もあるが、1~4区で検出した中世の掘立柱建物が7棟であることを考えると、分布密度は高い。



第33図 周辺調査区との関係(古澤2011を基に作成)

遺跡全体を俯瞰すると、2区の3棟は主軸方位が揃い、井戸を伴う一体の居住域と捉えられる（第33図B群）。そこから約80mの遺構希薄域をはさみ、4区の東側から5・6区にかけてもう一つの遺構の集中域を形成する（A群）。

このA群を、掘立柱建物と井戸や大型土坑（第IV章で覆土1類としたもの）で構成される連続的な居住痕跡と仮定し、他の遺構との関係を検討する。まず、大溝SD810との新旧関係では、これに先行するもの（P1004・SE1030）と後出するもの（SB1051・P812・813）があり、A群の存続期間にはSD810の掘削前から埋没後までが含まれる。SD810には3回の掘り直しが認められることから、A群の存続期間には一定の時間幅が想定できよう。道4は、このSD810やSB1052を切って敷設されている。同じくSD810より新しいSB1051は、道4に面して方向を揃えて建てられており、SB1051と道4は同時期の可能性が高い。

以上の状況から、A群の存続期間を山口野中遺跡のⅠ期とすると、SD810の掘削前からこれが機能した前半期（Ia期）と、SD810の埋没後、道4が敷設された後半期（Ib期）に大別できる。また、道4【2期】の側溝は道3の路面を避けつつ、側溝SD806Aを切っている点から、道3の敷設はIa期に遡り、Ib期には側溝が埋没した状態で道4とともに機能していたと考えられる（第34図）。

次に、火葬土坑SK719やSK804は明らかに他の中世遺構より上位の面で構築され、大きく削平を受けた状況を示しており、Ib期より新しい時期の所産と捉えられる。居住域の衰退後、火葬土坑が展開する時期を山口野中遺跡のⅡ期とする。SK804に類似する火葬土坑は14世紀から15世紀の事例が知られている〔石垣2012〕。

ここまで考察と遺構出土炭化物の放射性炭素年代（曆年較正値）を対照してみる（第8表）。測定結果は、曆年代でみると上述した出土遺物の年代観よりも全体的に古い値を示している。この点については、測定に使用した試料がいずれも最外年輪を含まない小片であることから、いわゆる古木効果によって伐採年より古い値を示した可能性が指摘されている（第VI章）。しかし、同一の掘立柱建物の異なる柱穴の試料が近似した値を示す点、遺構の切り合い関係と年代値の新古が対応する点、SK804が他の試料とはかけ離れて新しい値を示す点などは、考古学的な検証結果と調和する。従って、測定結果は遺構の相対的な年代差の指標としては有効と判断して検討を進める。

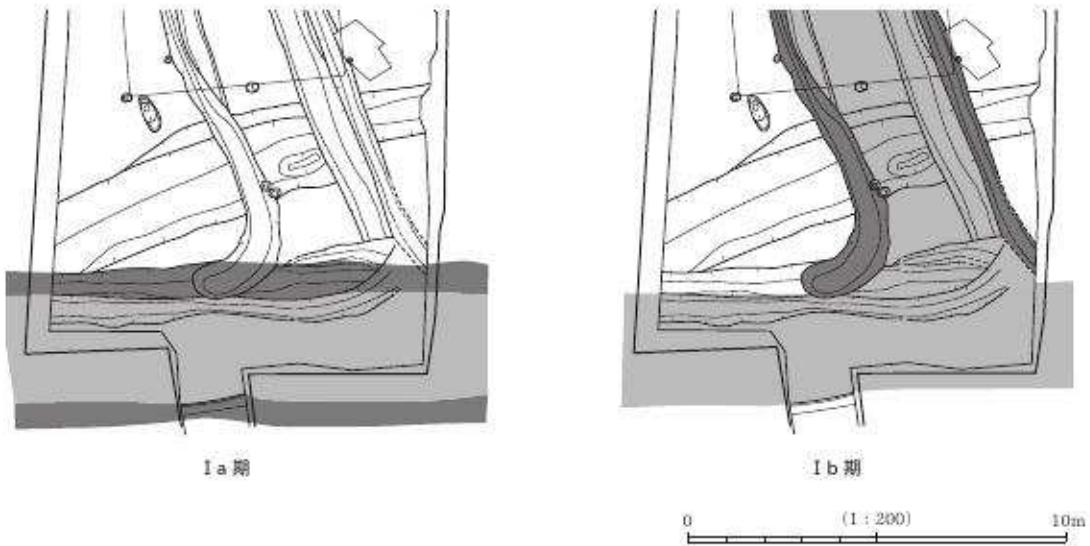
SD810【4期】と近似した放射性炭素年代値を示すSK611は、覆土が噴砂脈に切られている。今回の調査では噴砂の年代測定を行っていないが、2区で検出した噴砂は残留磁化測定により西暦1,275±25年という年代が得られており〔酒井ほか2013〕、SK611の噴砂も同一の地震に起因する蓋然性が高い。すなわち、SK611やSD810は13世紀後半に想定される地震以前に埋没していたと考えられる。

以上から、Ia期とIb期の境は13世紀後半以降に置くことができる。2区

珠洲続編年（参考）		I期	II期	III期	IV期	V期	備考
出土土器の年代	曆年較正値	1100	1200	1300	1400		
Ia期	P629		---				SB774柱穴
	P670	---	---				SB774柱穴
	SD806A	---	---	---			道3側溝
	SD810		---	---			4期覆土
	SK611	---	---	---			噴砂脈に切られる
Ib期	SD816		---	---			道4【1期】側溝
	SD819		---	---			道4【2期】側溝
日期	SK804				---	---	火葬土坑

黒は1σ、グレーは2σを表す。いずれも相対比の高いほうを示したが、SK804はほぼ同率のため併記した。

第8表 曆年較正値



第34図 道3・道4の変遷

で検出したB群に付随する井戸3基はいずれも噴砂脈を切って構築されていることから、Ib期以降に営まれた居住域と考えられる。II期に関しては、上述した遺構の検出状況、類例の年代、古木効果等を総合的に判断して14世紀後半以降と考えておきたい。

なお、Ia期においてはA群と道3が同時に存在したと考えているが、大型のSB774・775を含む多くの建物が道3に沿わない点が不可解ではある。断案はないが、建物の主軸はSD810や道3より古いSD805・SD821に近いものが多いことから(第IV章2A)、A群は道3に先行する溝に沿って配置され、道3がやや遅れて敷設された可能性を想定しておきたい。

C 境塚遺跡との関係

道3は、境塚遺跡D区の道2と同一遺構の可能性が高く、6区の北西方向へさらに続くことが明らかになった。山口野中遺跡3区では、境塚遺跡D区の道1と平行する道路跡が検出されており[村上ほか2013]、両道路がこのままの方向で直進すればほぼ直角に交わることとなる(第33図)。すなわち、境塚遺跡D区から山口野中遺跡3区までが直行または平行する道路によって計画的に結ばれていた可能性が出てきたと言え、交差地点での発掘調査による検証の機会が待たれる。

次に、道3=境塚遺跡D区道2(以下、道3と表記)を手掛かりに境塚遺跡D区との並行関係を考える。境塚遺跡D区においては、道1を基軸に「町場」が展開した13世紀後半~14世紀前半をII期とし、建物の新旧等を考慮してさらに細分する。その中で道3は、II-2期に敷設され、II-3b期には側溝が埋没していたとする[荒川ほか2016]。

従って、山口野中遺跡のIa期は境塚遺跡のII-3a期以前、Ib期はII-3b期以降と考えることができる。山口野中遺跡I期の上限については不詳であるが、上述したA群と道3の前後関係次第では、道3の敷設以前すなわち境塚遺跡D区のII-2期あるいはそれ以前にかかる可能性もある。

以上、遺跡の年代および境塚遺跡D区との関係は第9表のように整列できる。ただし、現状では自然科学分析・出

遺跡	曆年代		
	1200	1300	1400
境塚遺跡D区	■	■	■
I期			
II期			
III期			
山口野中遺跡	■	■	■
Ia期			
Ib期			
II期			

第9表 遺跡の年代と並行関係(試案)

土遺物の年代観・境塙遺跡との平行関係をすべて矛盾なく理解することは困難と言わざるを得ない。ひとまずは、中世における山口野中遺跡と境塙遺跡の密接な関係が再確認できた点を一定の成果とし、今後の境塙遺跡における調査の進展によって、山口野中遺跡の位置付けがより明確になることを期待したい。

3 中世の道路構造について

道4【2期】の側溝からは礫が大量に出土しており、道路通行部の構築に何らかの形で礫が用いられたことが想定できる。

県内の中世の道路遺構は何度か集成が行われており〔本田2008、荒川ほか2012〕、その後に調査されたものを含めると、両側溝から多量の礫を出土した事例は本例を含め7例にのぼる（第10表）。このうち4例は阿賀野

市域に集中し、それ以外には分布の偏在はない。「道路上に伴う礫」と判断する際のサイズや出土量の明確な基準はないため、あくまで調査者の目に留まった件数でしかないが、現状では白河荘に特徴的な道路構造と判断できる。以下、白河荘域の4例を概観して敷設時期や背景を探ってみたい。

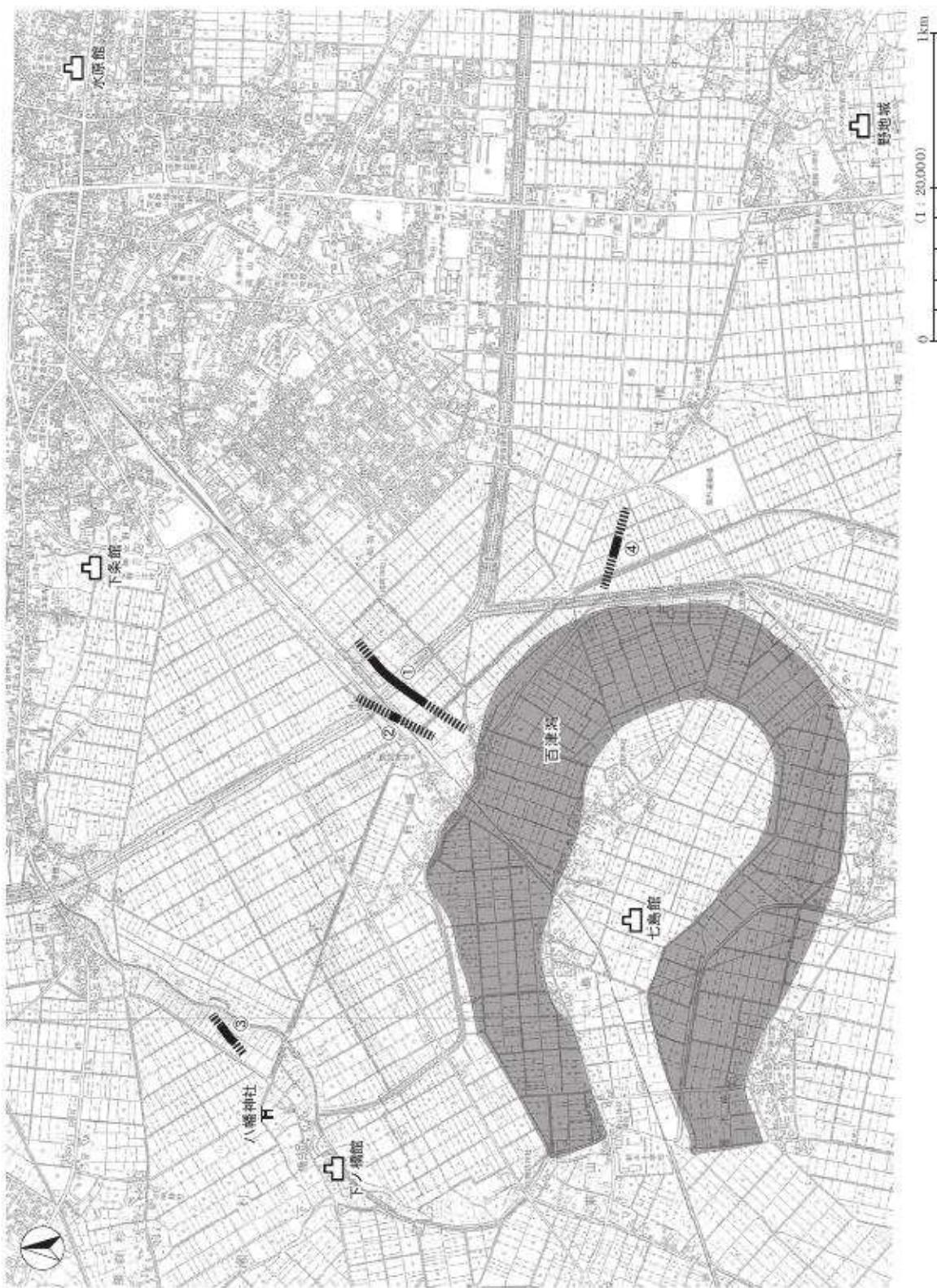
- ① 境塙遺跡D区（道1） 百津湯と水原方面を結ぶ、「町場」の基軸となる幹線道路である。側溝中心間は約5.5mを測る。礫の出土位置が溝の覆土上位に集中することから、礫は路面に敷かれたものではなく、路床に用いられた可能性が指摘されている。境塙遺跡D区II期（13世紀後半～14世紀前半）に機能したと考えられる。同時期にこれと直行する道2（山口野中遺跡の道3）も敷設されているが、こちらは覆土の堆積状況から礫は用いられていなかったとみられる。
- ② 山口野中遺跡（道4【2期】） 側溝中心間は約4mを測る。山口野中遺跡の道3の側溝覆土を切ることから、敷設時期は①より新しく位置付けられる。方向については、北東方向はこのまま直進すれば約1kmで下条館に行き着く。南西方向は未調査であるが、道3と交差して百津湯まで延びる可能性もある。
- ③ 柄目木遺跡（SD113・SD114） 報告書では道路と認定していないが、両溝のみ多量の礫を含む点、途中途切れる箇所はあるものの幅3～5mを保ち70mにわたって続く点から道路と考える。柄目木遺跡は13世紀後半～14世紀後半の集落とされ、両溝はそれらの遺構との切り合いにおいて最も新しい。この道を南西に進むと、八幡神社の参道の前面を通過して約500mで下ノ橋館にいたる。八幡神社の創建時期は不明であるが、天保15年（1844）の建て替え時の史料には、源頼義の参詣や建武年間の兵乱による破壊などが記されている〔京ヶ瀬村1969〕。記事の信ぴょう性はともかく、少なくともこうした伝承の下地となりうるような、八幡神社の参詣道に通じる道路は中世に存在したのである。
- ④ 新町遺跡（SD101・SD102） 側溝中心間が約18mと、中世では破格の規模の道路である。新町遺跡は15世紀後半を中心とする集落とされ、建物は道路と平行に配置されることから、道路はこれらより若干先行して敷設され同時に機能したと考えられる。道路の方向性は、西は百津湯方面へ進み、東は直進して管神丘陵の山浦城へ向かうか、あるいはやや南に逸れれば野地城へ到達するが、いずれにしてもかなり距離があるため今後中間地点での発掘調査による検証が必要である。

道路	所在地	道構	側溝中心間(m)	文献
境塙	阿賀野市	道1	5.5	荒川ほか2012
新町	阿賀野市	SD101・102	18	秋山ほか2016
山口野中	阿賀野市	道4	4	本書
柄目木	阿賀野市	SD113・114	3～5	佐藤ほか2010
馬場・天神殿	柏崎市	道1	4	品川2003
北小脇	燕市	SD9・10	3	布施ほか2002
鉢庭町	糸魚川市	SD7・8	3.3	山岸2003

第10表 側溝から多量の礫を出土した道路

以上のように、白河荘域における路面に礫を用いる直線道路は、百津湯から放射状に延びる例が多く（①・②・④）、物流拠点との関連が第一に指摘できる。②と③は、道路の規模や、館を目指す方向性などに共通点が認められる。こうした状況から、物流拠点と館、あるいは館相互のネットワークを強化する目的で路面に礫を用いる堅牢な道路が敷設された可能性を想定しておきたい。

今後は、道路跡の推定ライン上や、館跡の発掘調査事例を蓄積していくことで、白河荘の交通網の実態がより明確になっていくものと思われる。溝からの礫の出土はこれまであまり注意されてこなかった可能性があり、今後発見例が増加することも期待できる。本節では未だ事例が少ないことから「路面に礫を用いる道路」を一括して扱ったが、境塚遺跡で試みられたような礫の出土状況から道路構造にアプローチする視点も必要となつてこよう。



第35図 百津潟周辺の路面に櫛を用いる道路（水原町全図）
(水原町発行「水原町全図」1:10,000の原図)

要 約

- 1 山口野中遺跡は新潟県阿賀野市大字月崎地内に所在する。遺跡は、月崎集落が立地する自然堤防の北東側の沖積地に位置する。調査前は主にJR羽越本線の防風林として利用されていた。
- 2 調査は一般国道49号阿賀野バイパスの建設に伴い、2015年度に実施した。調査面積は、上層（中世）878m²、下層（縄文時代）601m²の1,479m²である。
- 3 調査の結果、上層で近世の土坑7基、道2条、中世の掘立柱建物7棟、井戸3基、土坑28基（火葬土坑2基を含む）、炭化物集中地点2か所、道2条、溝17条、性格不明遺構1基、ピット286基（掘立柱建物の柱穴を含む）を検出した。
- 4 出土品は、中世の遺物（土師器・青磁・珠洲焼・瓷器系陶器・土器転用研磨具・鍛冶関連遺物・金属製品・石製品など）が主であり、このほかに近世の陶磁器、古代の須恵器、縄文土器、時期不明の石製品等が少量ある。
- 5 近世の道路は、側溝の掘り直しなどにより4時期の変遷が認められ、出土遺物や絵図の検討から、敷設時期は18世紀代と考えられる。規模・構造ともに全国的にも大規模な部類に入り、地域の重要な交通路と位置付けられる。最終的には昭和40年代頃に現在の市道七島月崎線の位置に移設されて廃道となった。
- 6 中世の土地利用は、大小の掘立柱建物・井戸・大型土坑等で構成される居住域（Ⅰ期）から火葬場（Ⅱ期）へと変遷する。時期はⅠ期が13世紀後半を中心とし、Ⅱ期が14世紀後半以降と考えられる。
- 7 Ⅰ期の居住域は、境塚遺跡の「百津湯の拠点的な町場」と道路で結ばれる。
- 8 Ⅰ期の道路には路面に礫を用いたと推定されるものがある。同様の構造は百津湯の周辺に確認でき、館や物流拠点を結ぶ道路網として堅牢な構造が採用された可能性がある。

引用・参考文献

- 相羽重徳 2006 「東北系近世陶磁器雑考」『越佐補遺些』第 11 号 越佐補遺些の会
- 秋山泰利ほか 2016 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 263 集 新町遺跡』新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史 2007 「阿賀北・大坪遺跡ー中世初頭の居館跡ー」『御館の時代』高志書院
- 荒川隆史・加藤 学 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 93 集 和泉 A 遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史ほか 2004 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 133 集 青田遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史ほか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 153 集 大坪遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史ほか 2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 232 集 境塚遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史ほか 2016 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 262 集 境塚遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒谷伸郎ほか 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 215 集 山口遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石垣義則 2012 「中世の火葬土坑についてー新潟県及び東北地方を中心にしてー」『新潟考古』第 23 号 新潟県考古学会
- 市村慎太郎 2010 「近現代ガラス製日薬瓶の型式学的研究」『大阪文化財研究』37
- 大橋康二 1993 『肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社
- 近江俊秀 1997 ~ 1999 「道路跡一覧」『古代交通研究』第 7 ~ 9 号 古代交通研究会
- 荻野正博 1986 「第 6 章 花園と武士 第 2 節 花園と国衙領」『新潟県史』通史編 1 原始・古代 新潟県
- 小田由美子 1999 「五頭山麓古窯跡群」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 小田由美子ほか 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 99 集 堀越館跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小田由美子ほか 2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 117 集 赤坂山中世窯跡・赤坂山 B 遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 「土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 加藤 学ほか 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 223 集 村前東 A 遺跡 村前東 B 遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学ほか 2013 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 237 集 柄目木遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 神奈川東海道ルネッサンス推進協議会 2000 『神奈川の東海道(下)』神奈川新聞社
- 京ヶ瀬村 1969 『村史』新潟県京ヶ瀬村教育委員会
- 桑原 孝 1987 『新発田・新潟付近の交通路』『新発田郷土誌』16
- 小村 式 1971 『近世における五頭山麓』『水原郷』新潟県教育委員会
- 酒井英男ほか 2013 『山口野中遺跡で認められた噴砂の磁化の研究』『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 248 集 山口野中遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 坂上有紀 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 118 集 上浦遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 狭川真一 2011 『中世墓の考古学』高志書院

- 佐藤友子ほか 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 216 集 糙目木遺跡 I』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 品田高志 2003 「馬場・天神腰遺跡」『中世城館から城下町へ』 北陸中世考古学研究会
- 高橋保雄ほか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 172 集 鶴深甲遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 武部健一 2003 『道Ⅱ』 法政大学出版局
- 田中 明 2000 『水上・本間発遺跡－近世北陸道発掘調査報告－』 大島町教育委員会
- 田村 裕 2004 「南北朝・室町前期の白河莊」『笛神村史』通史編 新潟県笛神村
- 立木宏明ほか 2014 『細池寺道上遺跡Ⅲ 第 26 次調査』 新潟市文化財センター
- 鶴巻康志 1992 「六野瀬遺跡と赤坂窯」『新潟県安田町文化財調査報告 12 六野瀬遺跡 1990 年調査報告書』 新潟県安田町教育委員会
- 鶴巻康志 2005 「新潟県北部の中世陶器窯」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相－生産技術の展開と編年－資料集』
- 中尾七重 2011 「古渡路遺跡の掘立柱建物」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 221 集 古渡路遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 中野豈任 1976 「白河莊について」『社会科研究』第 12 集 新潟県高等学校教育研究会社会科部会
- 新潟県教育委員会 1995 『新潟県歴史の道調査報告書 第 8 集 三国街道（中通り）』
- 樋口真巳 2004 「白河莊の成立と城氏の展開」「鎌倉期の白河莊」『笛神村史』通史編 新潟県笛神村
- 布施智也ほか 2002 「北小脇遺跡・天神堂城跡・館屋敷遺跡・大橋遺跡」 新潟県吉田町教育委員会・日本芸術文化財総合研究所
- 古澤妥史 2002 『京ヶ瀬村埋蔵文化財調査報告書 第 1 集 町道上遺跡』 新潟県京ヶ瀬村教育委員会
- 古澤妥史 2011 『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書 第 6 集 水原代官所跡発掘調査概要報告書』 新潟県阿賀野市教育委員会
- 古澤妥史ほか 2011 『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書第 4 集 境塚遺跡・山口野中遺跡・三辺稻荷遺跡発掘調査報告書』 新潟県阿賀野市教育委員会
- 本田祐二 2008 「越後・佐渡（新潟県）の様相」『北陸中世のみち』 北陸中世考古学研究会
- 丸山雅成 1970 「近世の交通と管理」『体系日本史叢書 交通史』豊田武・児玉幸多編 山川出版社
- 水澤幸一 2005 「越後の中世土器」『新潟考古』第 16 号 新潟県考古学会
- 宮本長二郎 1999 「日本中世住宅の形成と発展」「建築土の空間－岡口欣也先生退官論文集－」中央公論美術出版
- 村上章久ほか 2013 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 248 集 山口野中遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 村上章久ほか 2015 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 258 集 山口野中遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・(公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 村上 直 1998 「江戸幕府の天領と水原代官所」『水原郷土誌料』第 3 集
- 両角まり 1996 「内耳鍋から焙烙へ－近世江戸在地系焙烙の成立－」『考古学研究』42-4
- 梁瀬裕一 2009 「房総の中世墓」『日本の中世墓』狭川真一編 高志書院
- 山岸洋一 2003 『鉄炮町遺跡発掘調査報告書』 新潟県糸魚川市教育委員会
- 山崎 天ほか 2004 「覓下遺跡」 五泉市教育委員会
- 山本信夫 2000 『太宰府条坊跡 XV－陶磁器分類編－』 太宰府市教育委員会
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
- 渡部浩二 2013 「江戸時代の旅と越後の名所」『歴史地理学』55-1

図 版

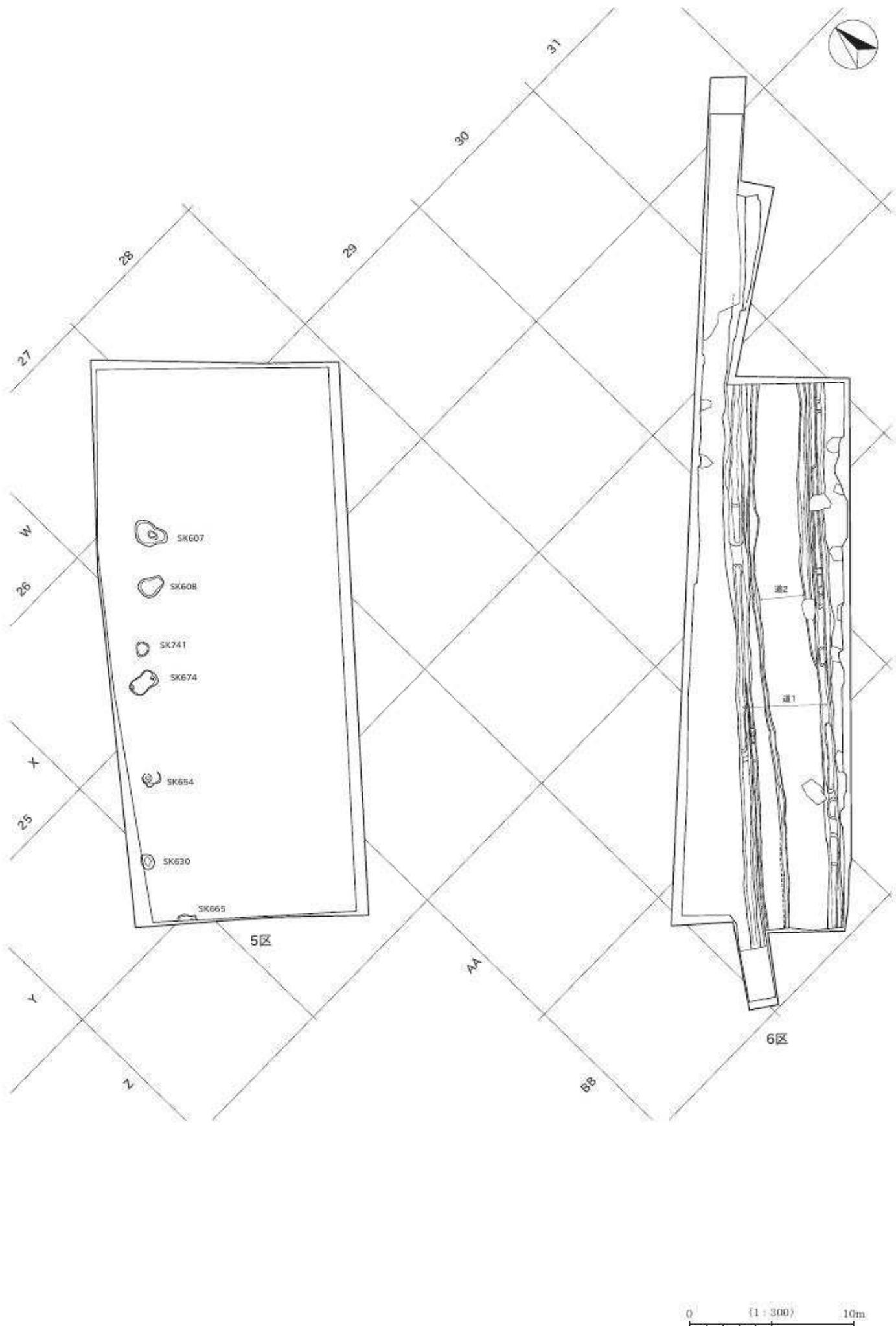
調査範囲図(1) 山口野中遺跡全体図

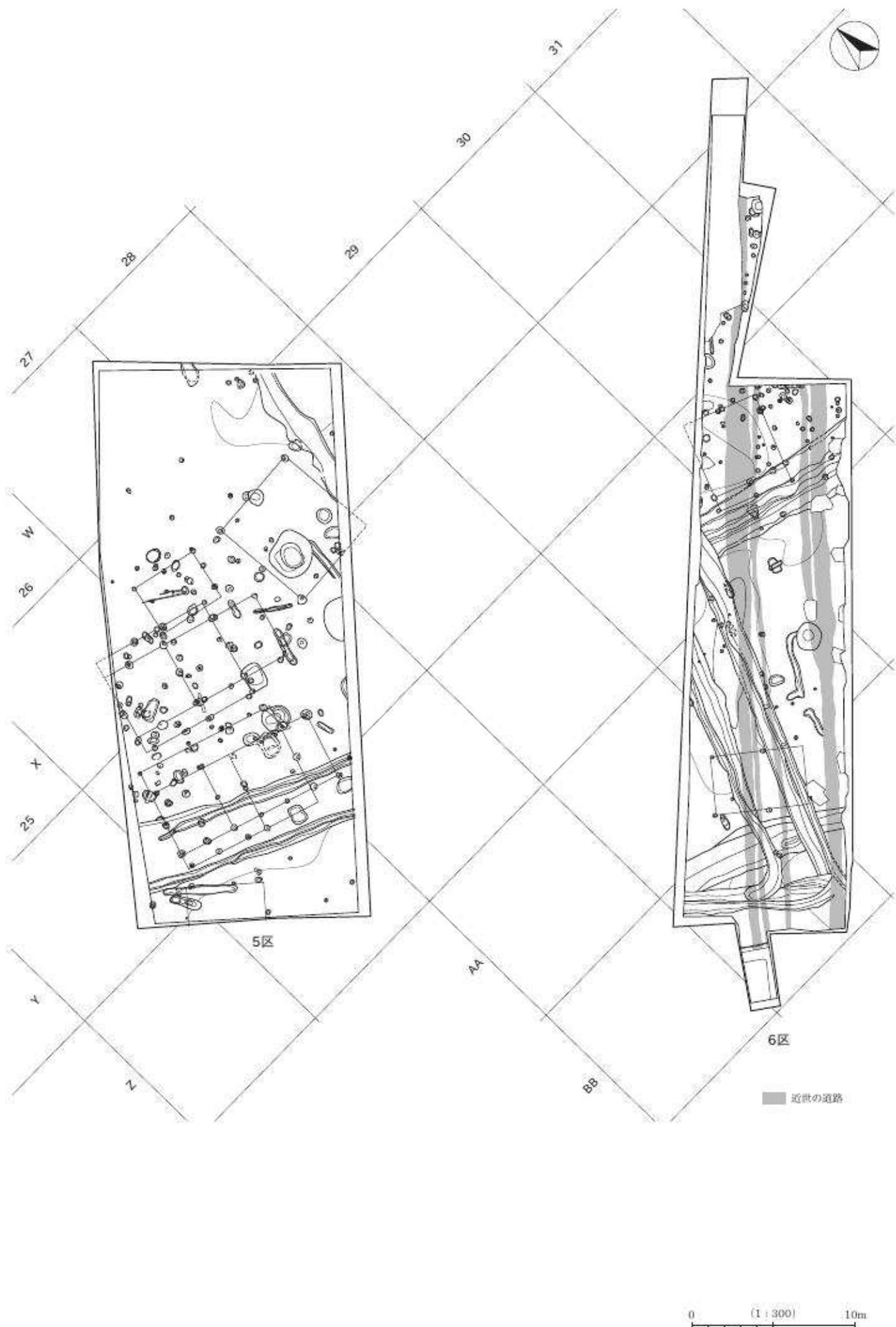
図版1

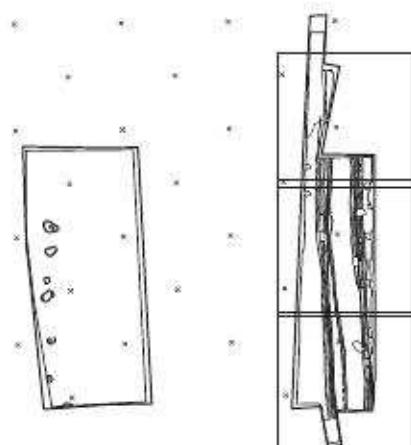
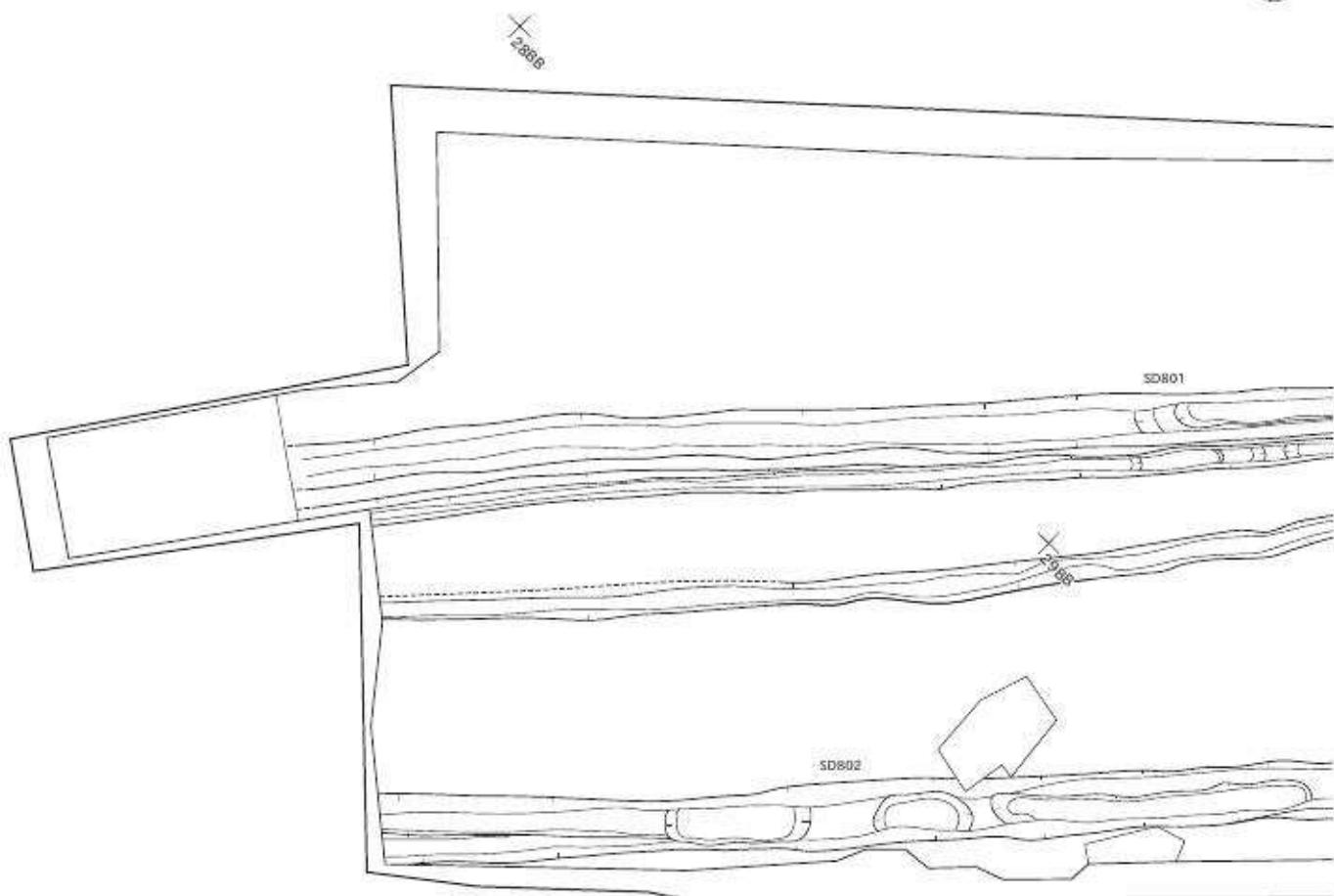


図版 2

調査範囲図(1) 5・6区近世遺構



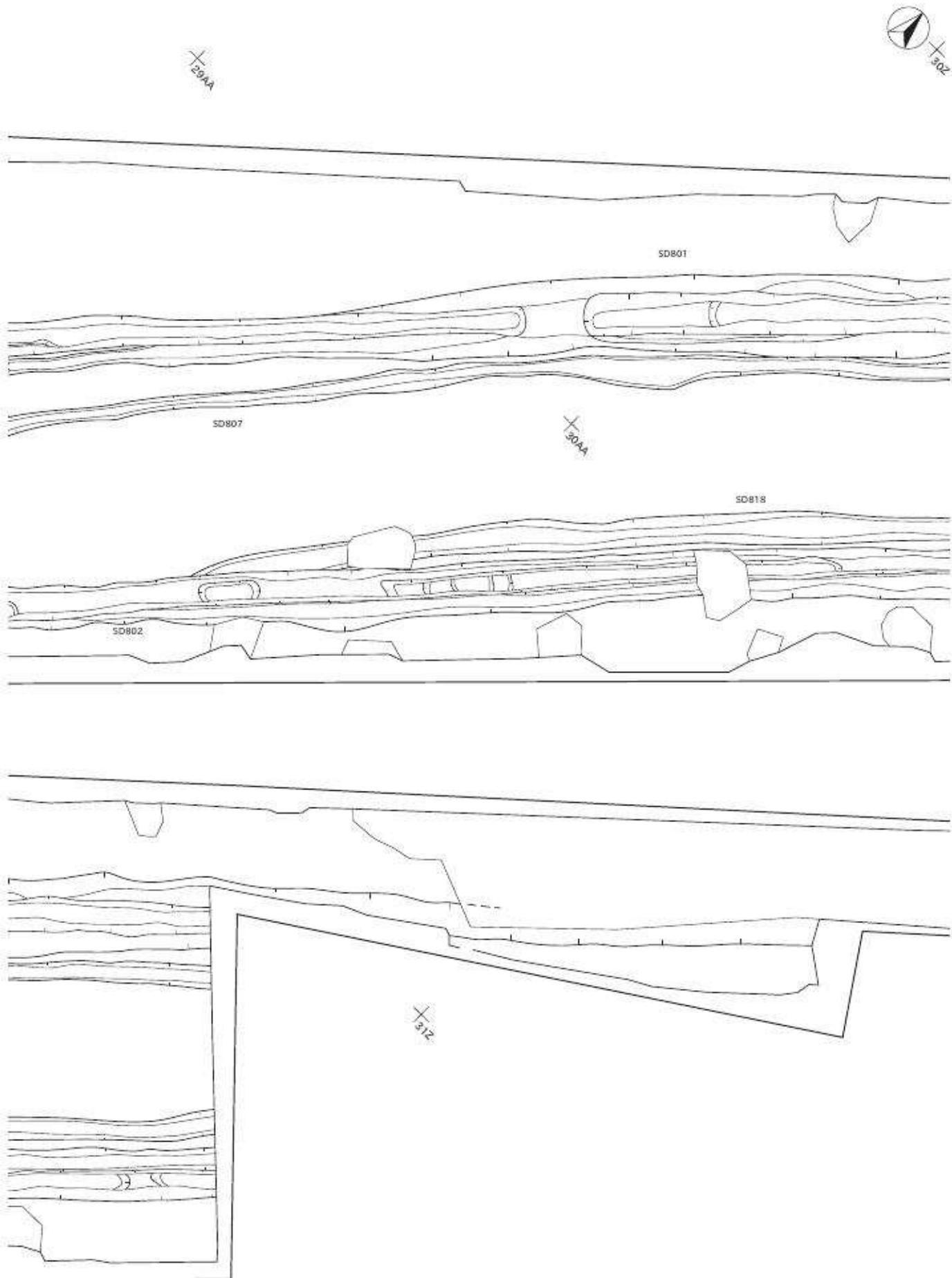


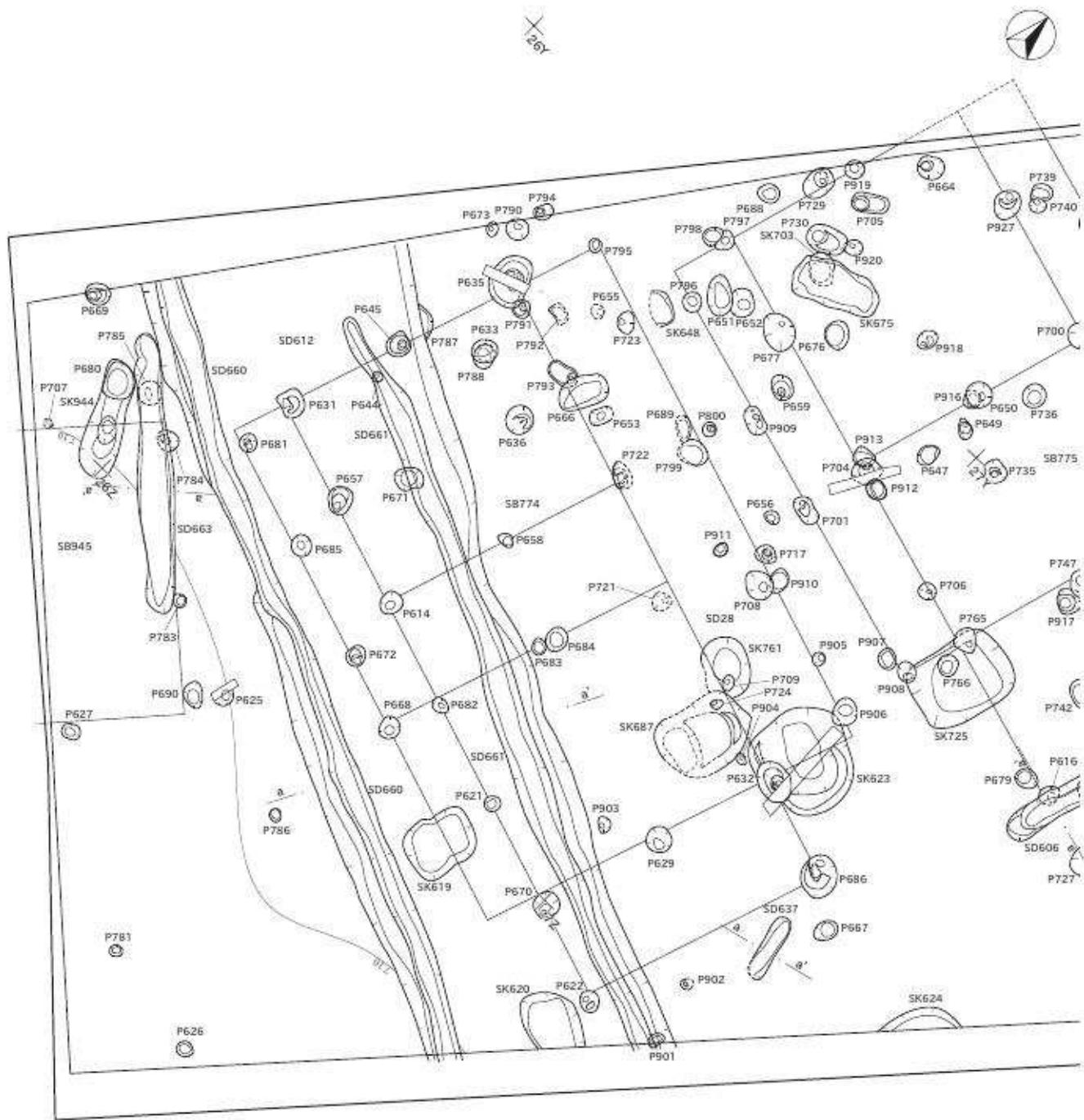


図版5下

図版5上

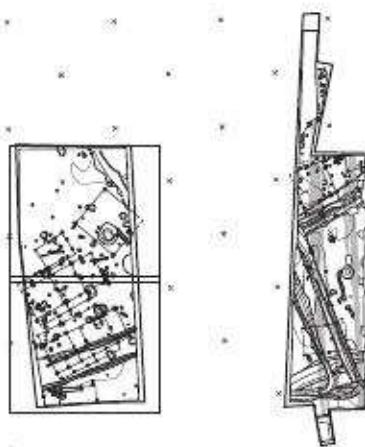
図版4

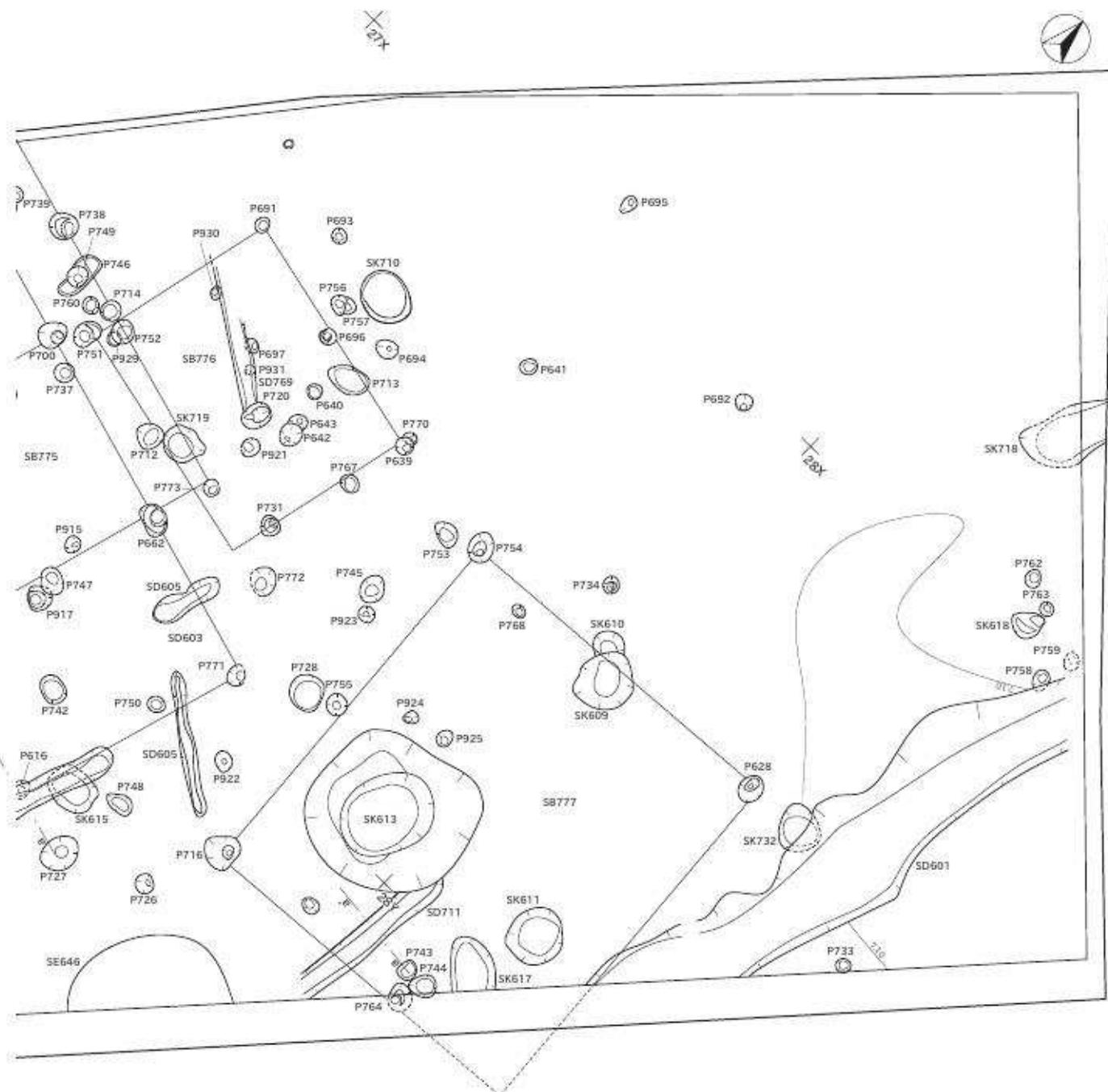


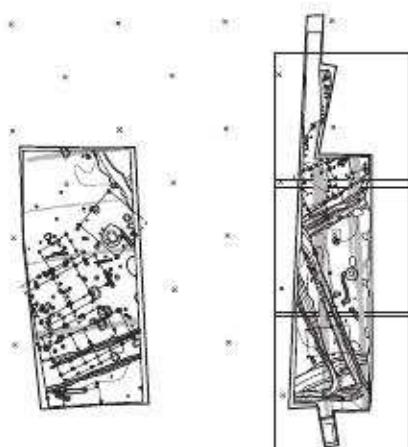
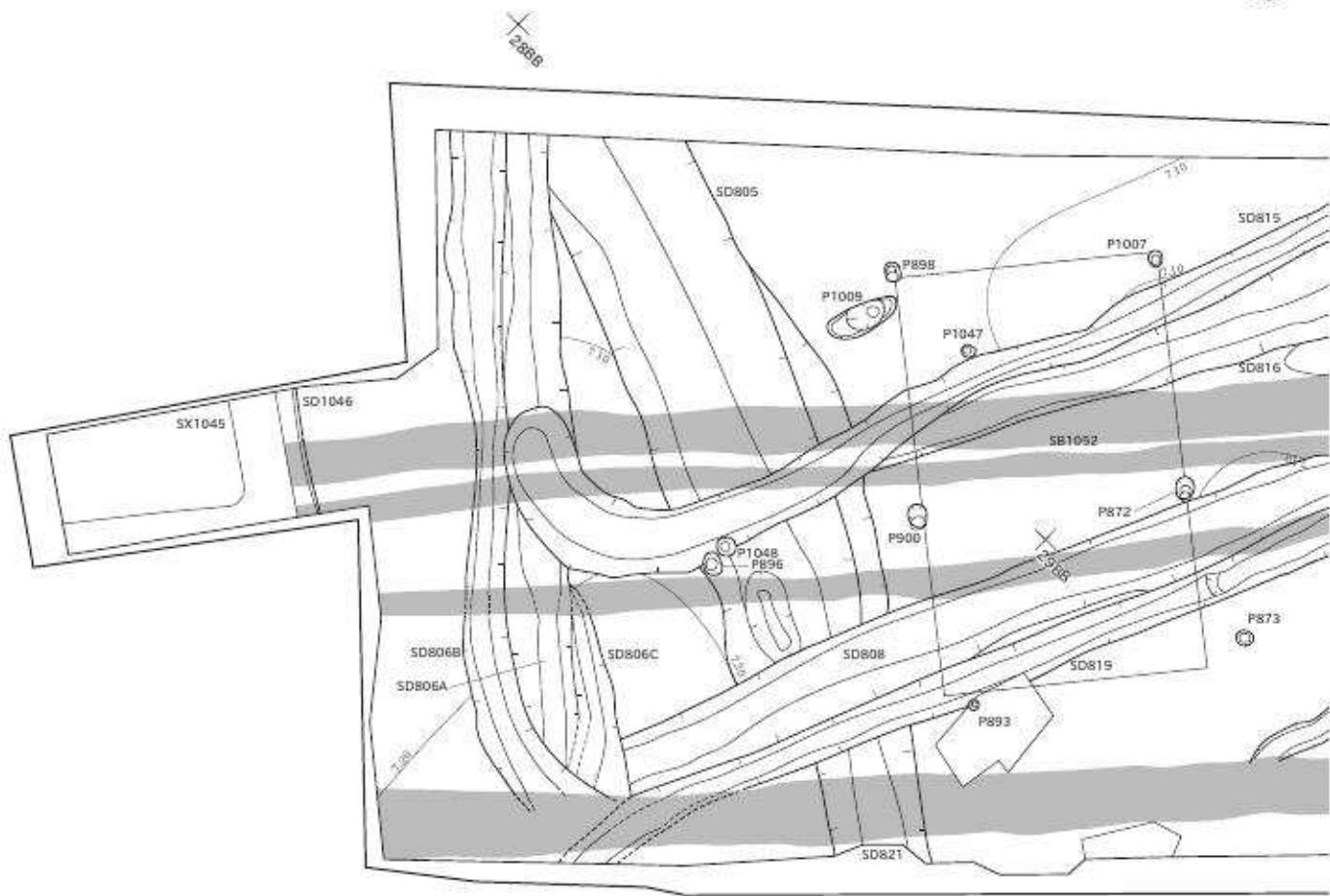


図版7

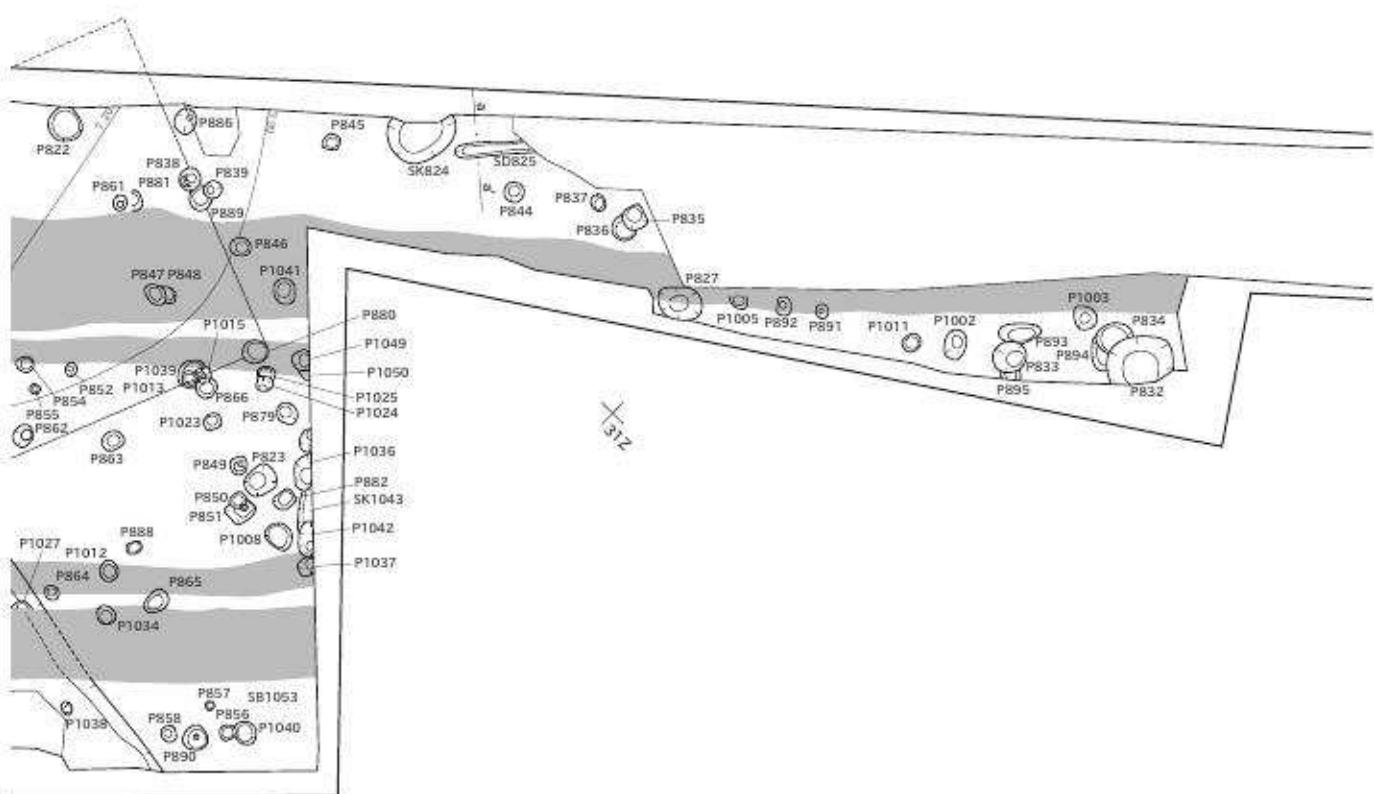
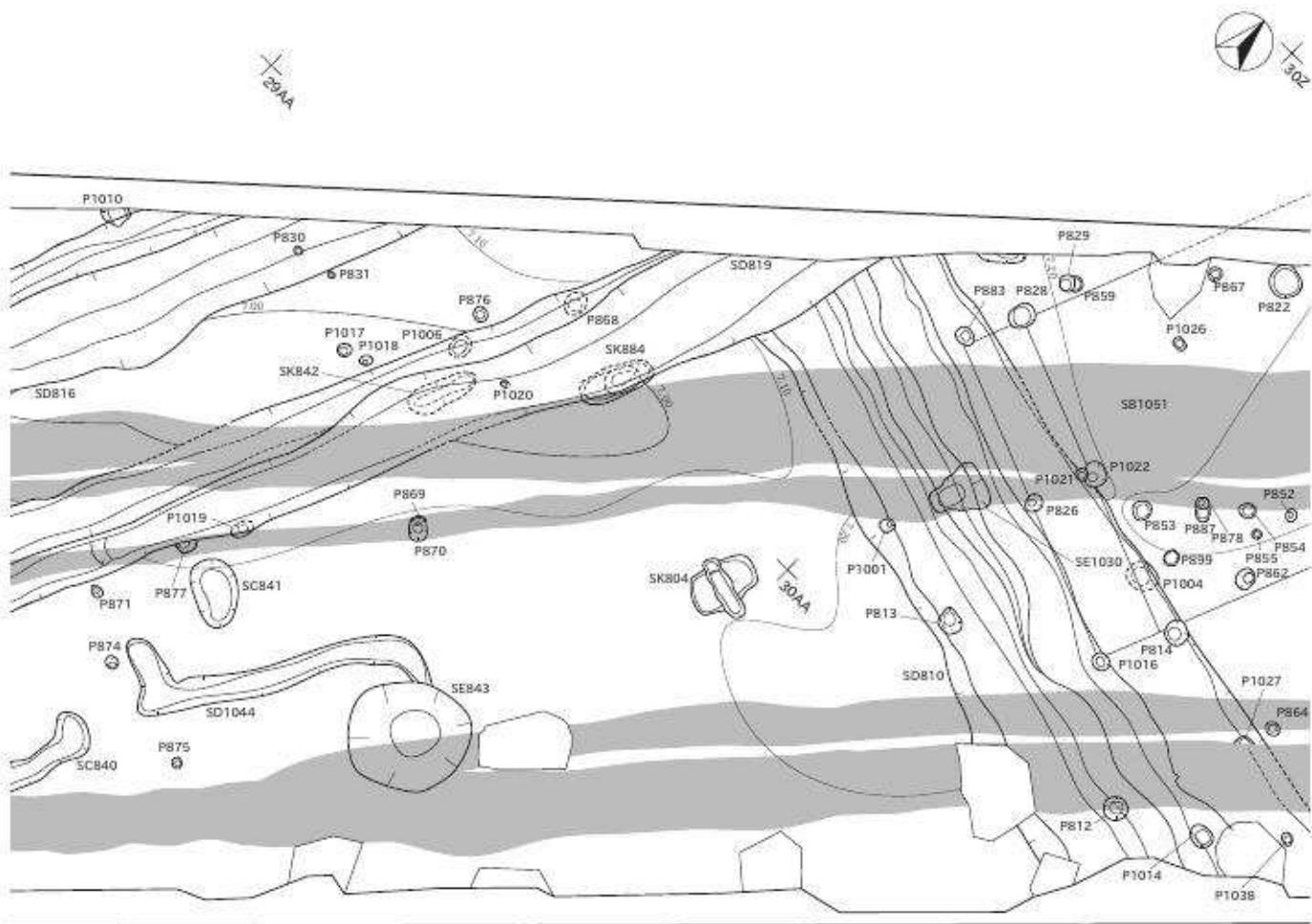
図版6



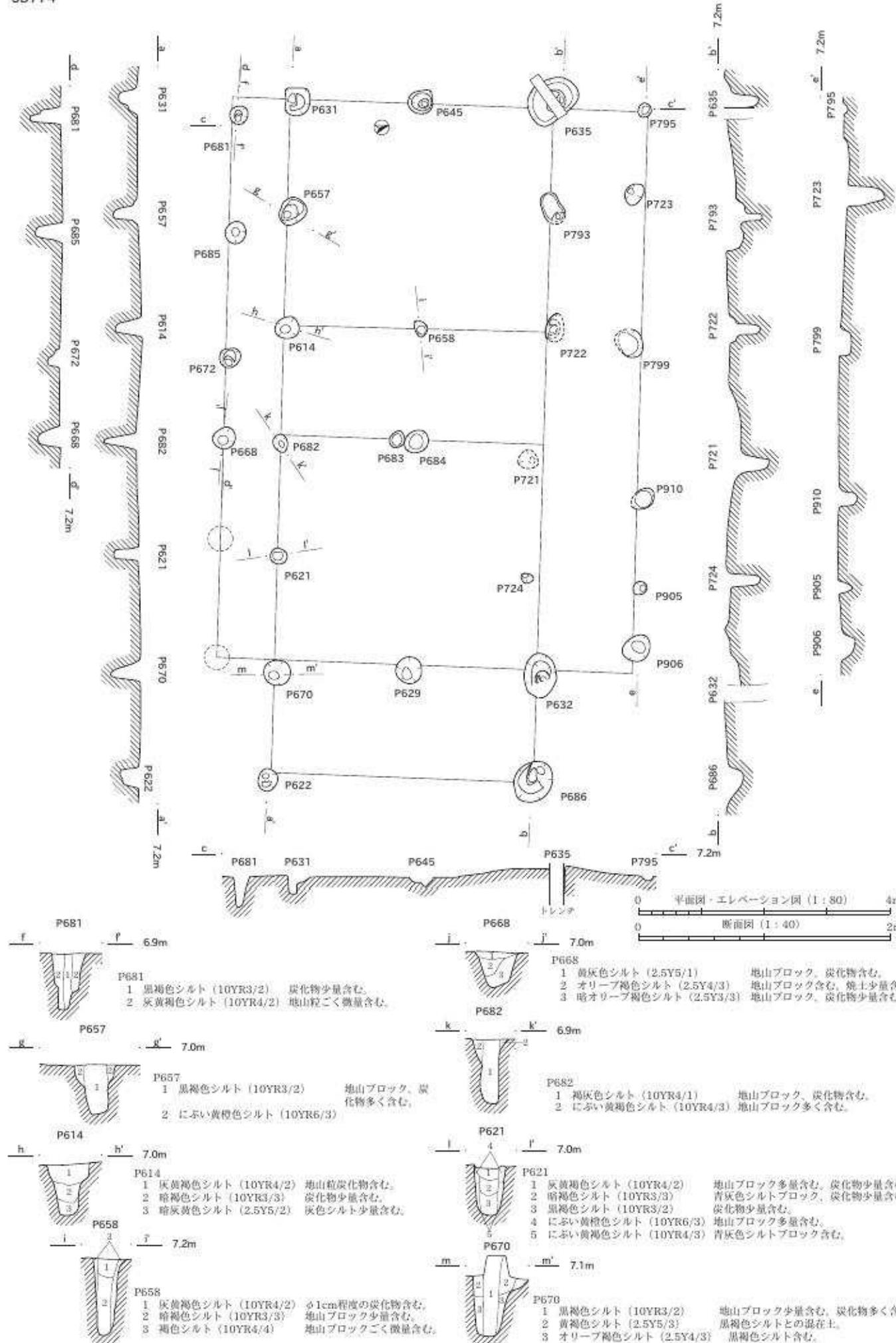


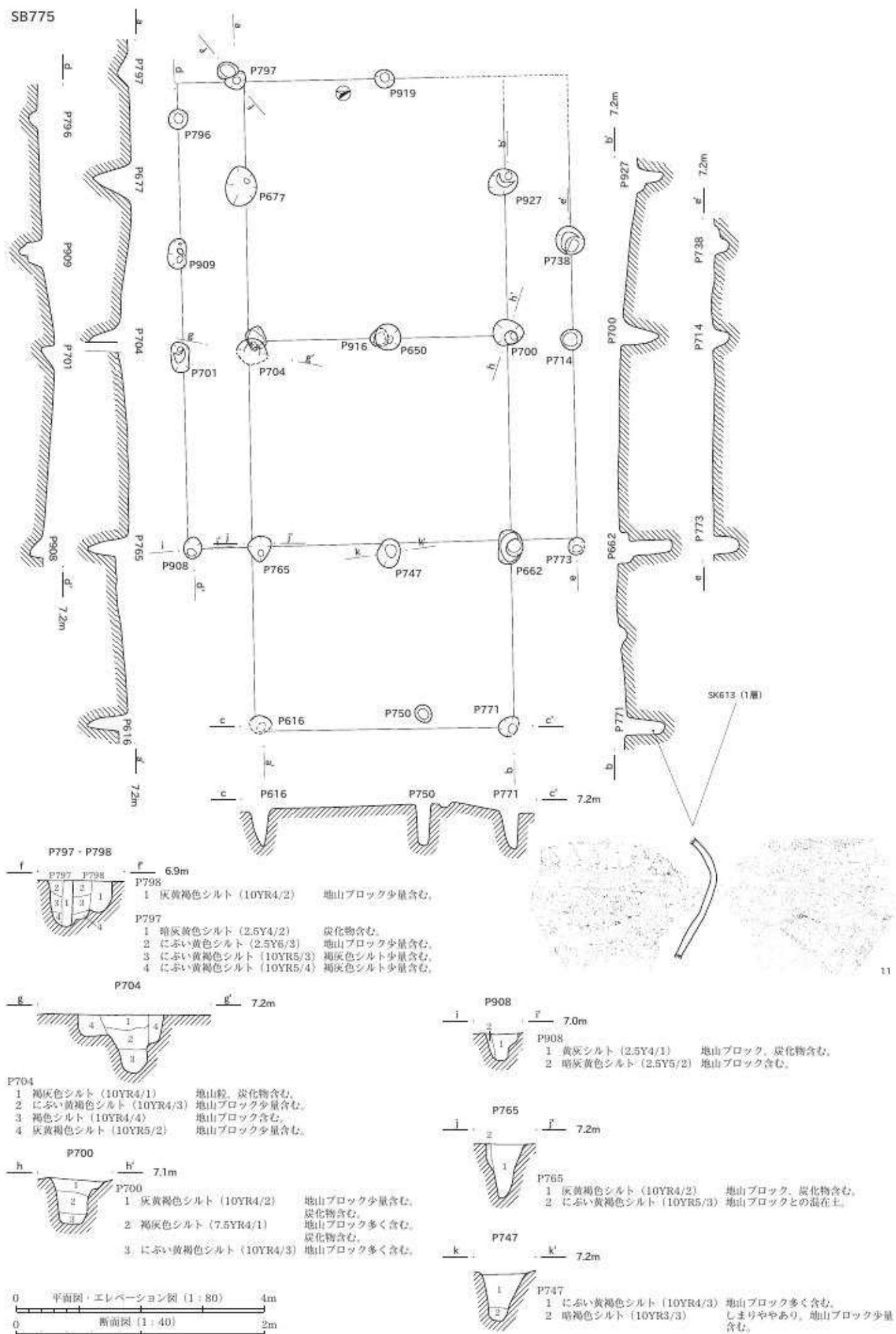


0 (1 : 100) 5m

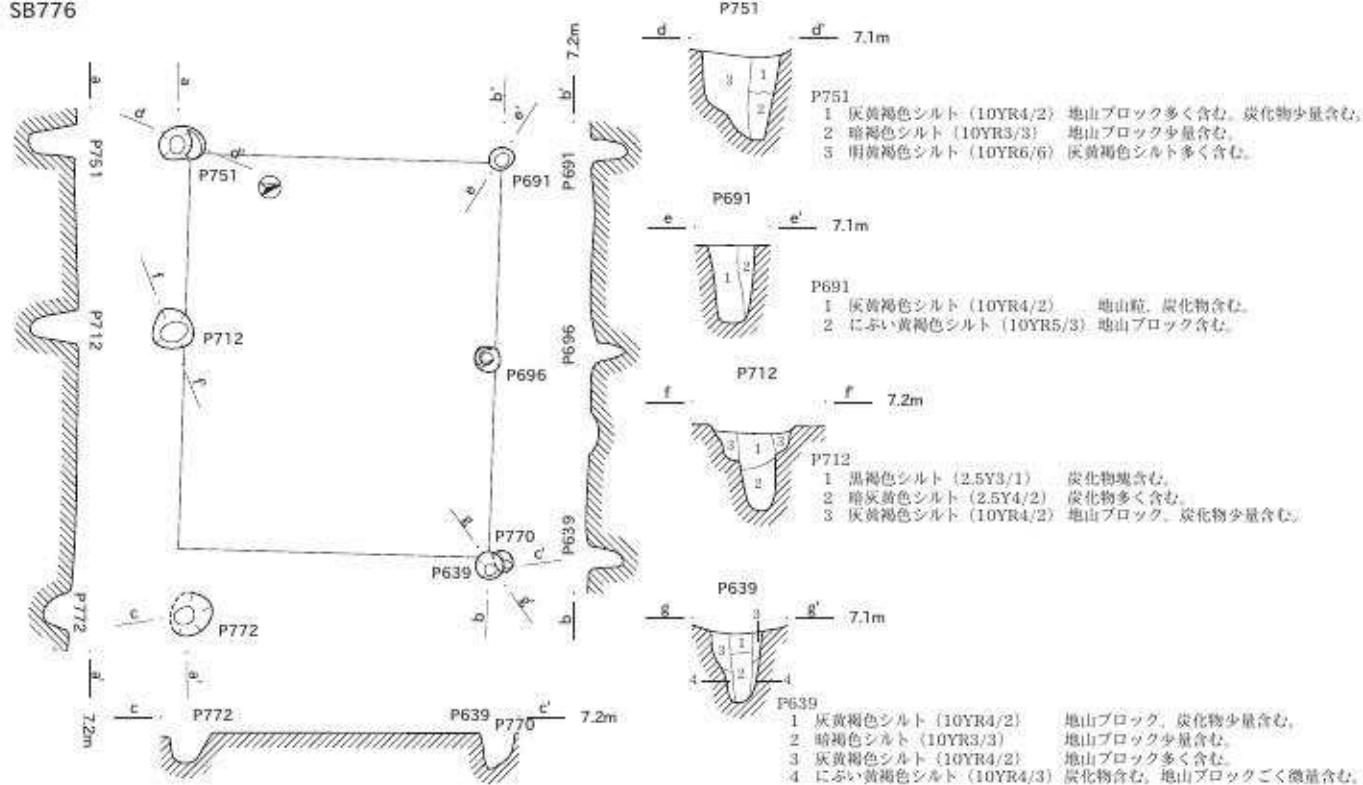


SB774

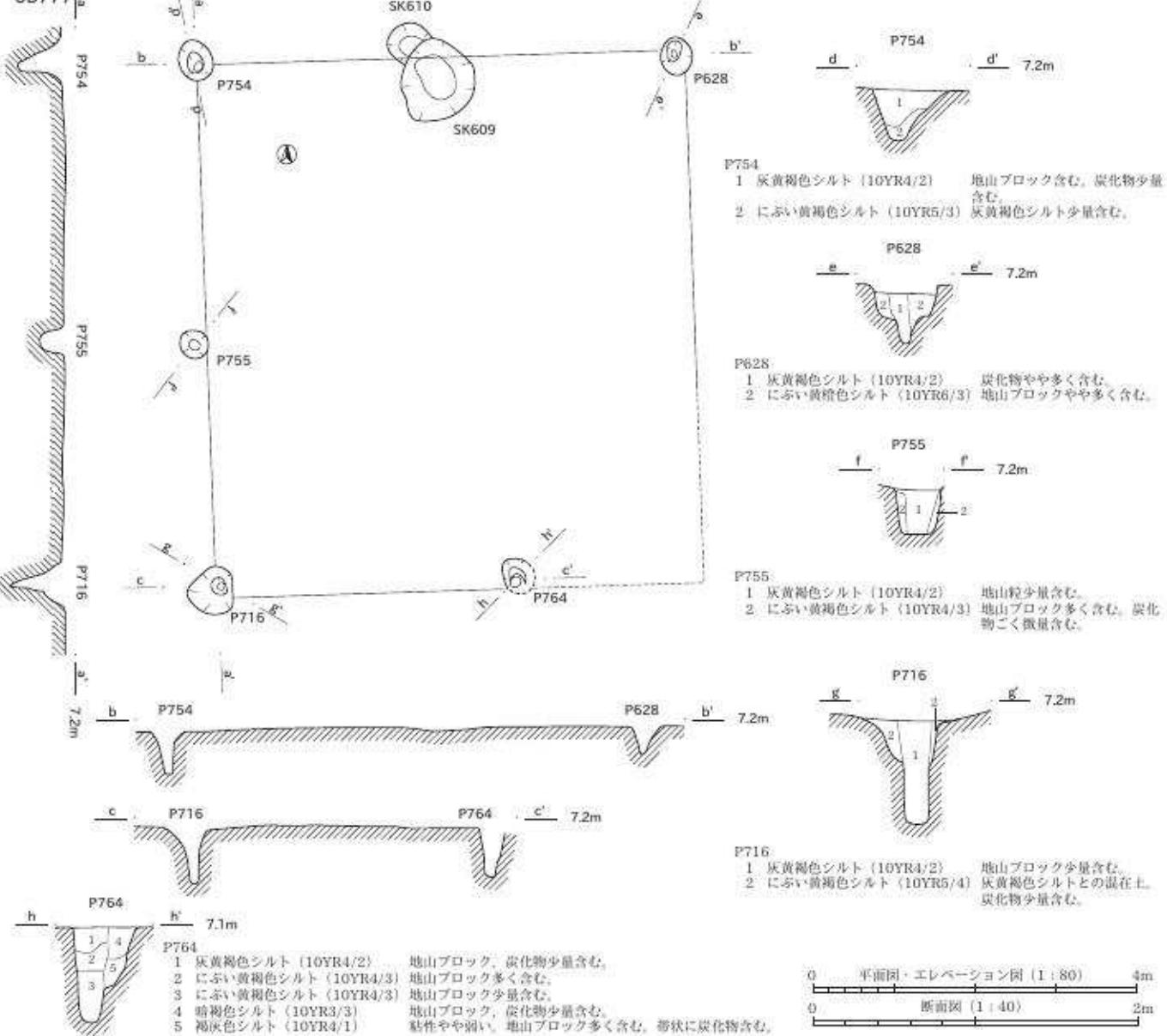




SB776

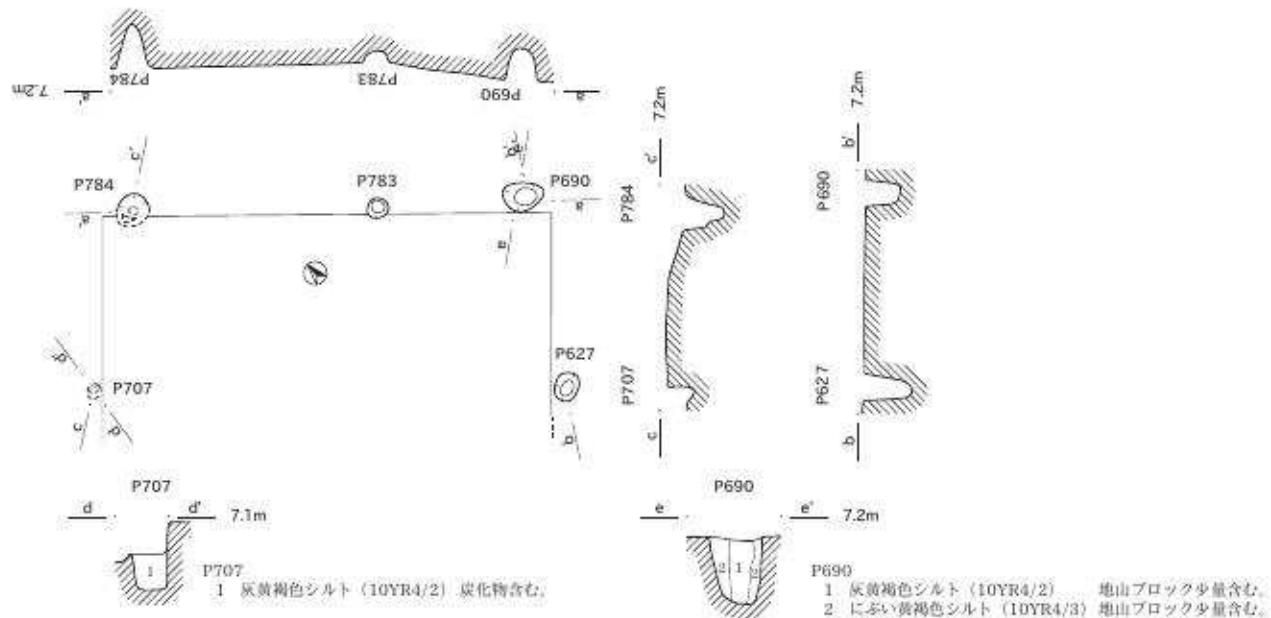


SB777

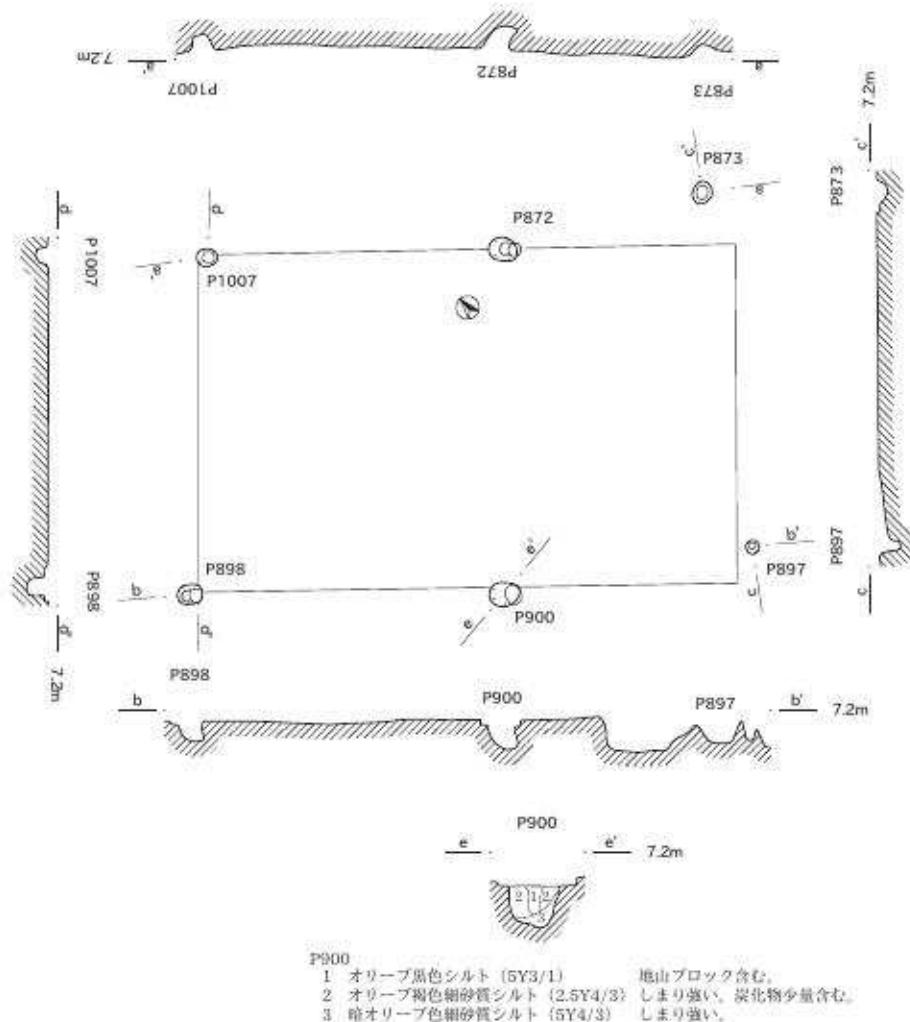


遺構個別図(4) SB945・1052

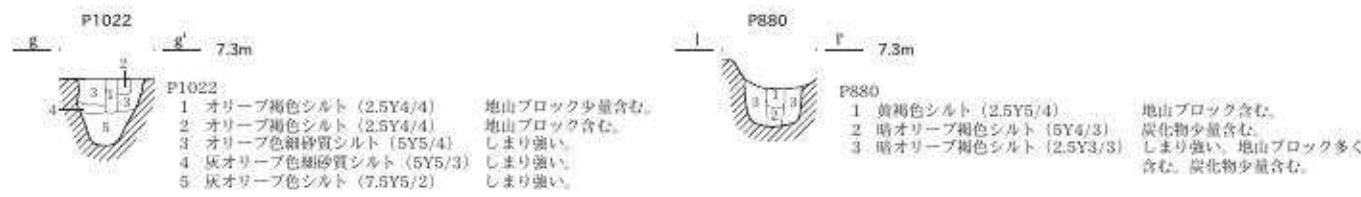
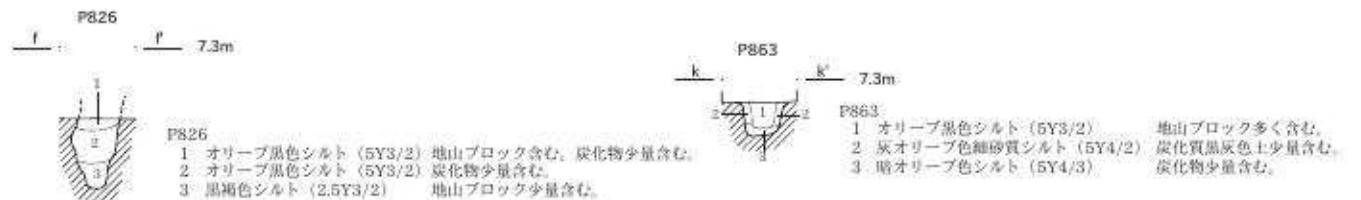
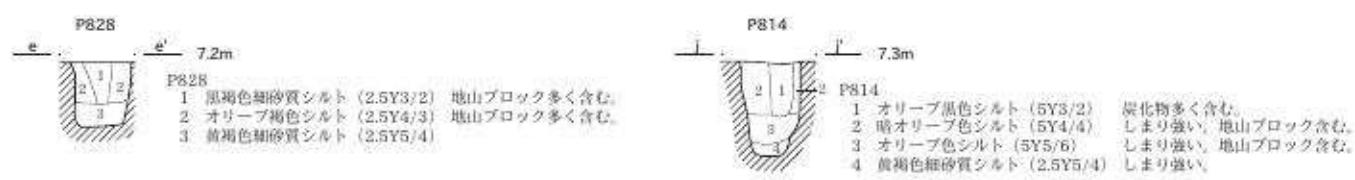
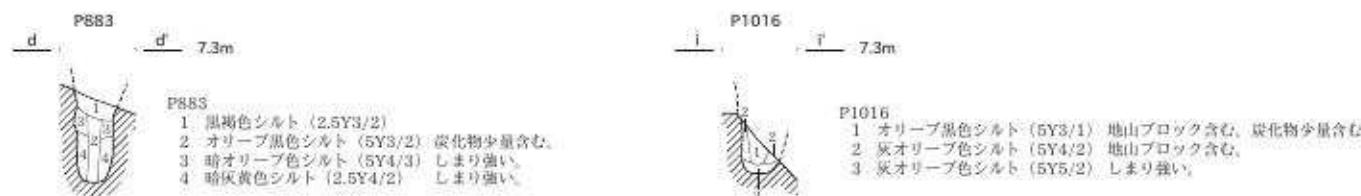
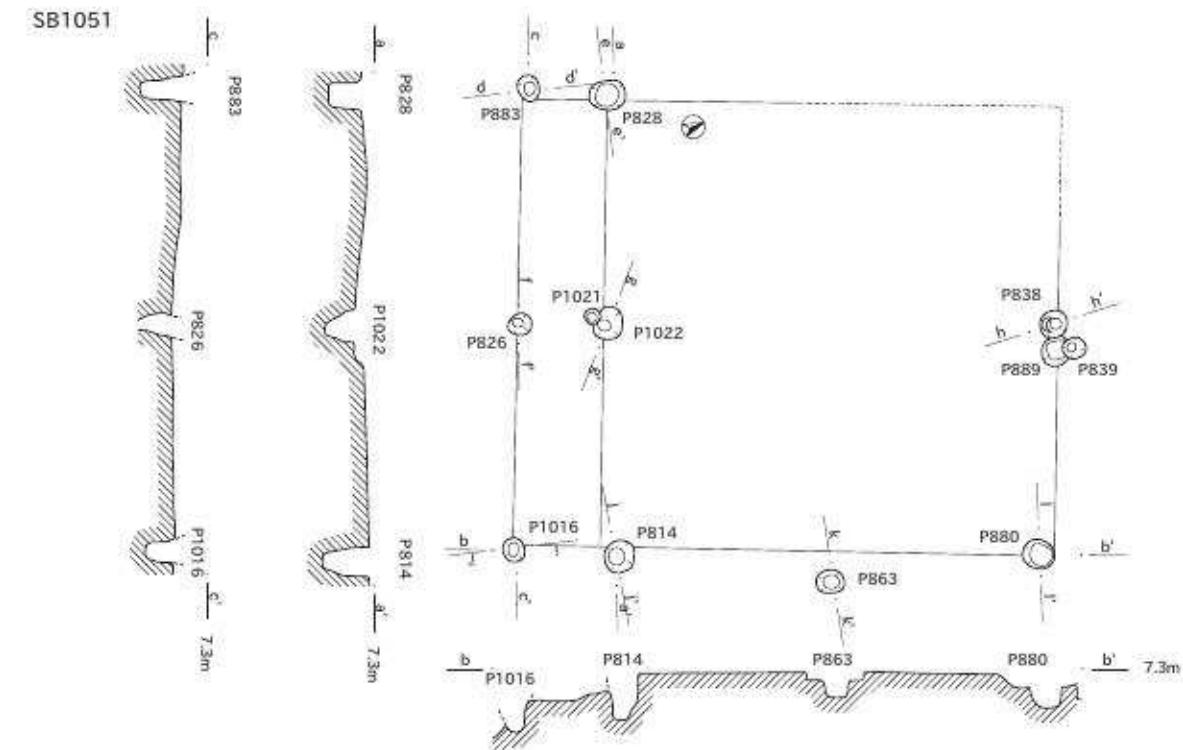
SB945



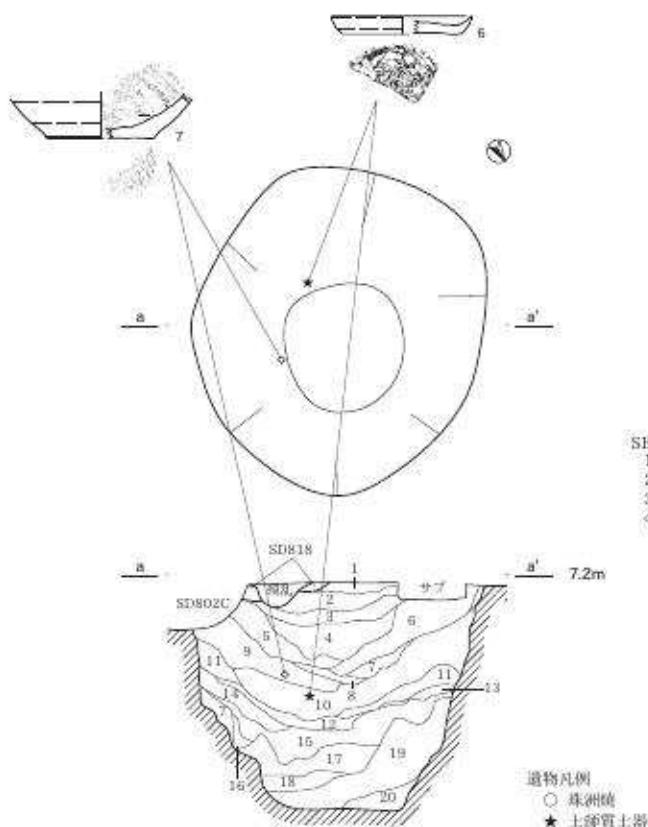
SB1052



SB1051



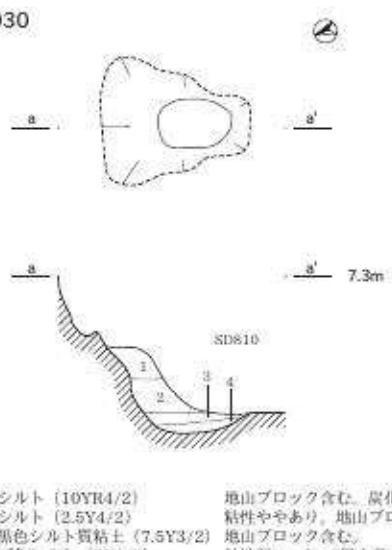
SE843



SE843

1 オリーブ色シルト (5Y5/4)	粘性なし。
2 暗灰黄色シルト (2.5Y4/2)	しまり強い。
3 黄褐色シルト (2.5Y5/3)	しまり強い。炭化物少量含む。
4 黄褐色シルト (2.5Y5/3)	しまり強い。炭化物含む。
5 黄褐色シルト (2.5Y5/3)	しまり強い。
6 にぶい黄色シルト (2.5Y6/4)	しまり強い。
7 暗灰黄色シルト (2.5Y5/2)	しまり強い。灰色シルト含む。
8 暗灰黄色シルト (2.5Y5/2)	しまり強い。灰色シルト多く含む。
9 暗灰黄色シルト (2.5Y4/2)	しまり強い。
10 灰色シルト (5Y4/1)	しまり強い。
11 灰オリーブ色シルト (5Y4/2)	灰色シルト少量含む。
12 オリーブ黒色シルト (5Y3/1)	炭化物互層状に含む。
13 暗オリーブ色シルト (5Y4/4)	炭化物少量含む。
14 黄褐色シルト (2.5Y5/4)	
15 オリーブ黒色シルト (5Y3/2)	地山ブロック含む。
16 オリーブ黄色細砂質シルト (5Y6/3)	しまり。粘性なし。
17 にぶい黄色細砂質シルト (2.5Y6/4)	
18 黄褐色細砂質シルト (2.5Y5/3)	粘性なし。
19 明オリーブ灰色シルト (5GY7/1)	
20 にぶい黄色細砂質シルト (2.5Y6/4)	明オリーブ灰色シルト少量含む。

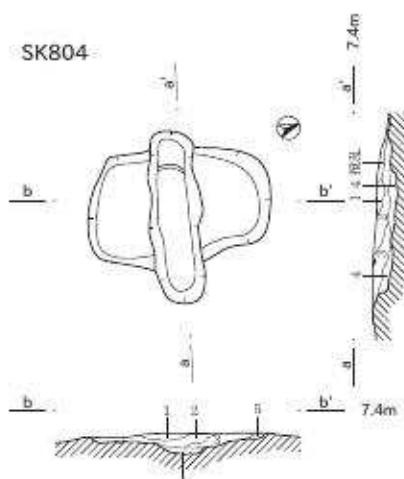
SE1030



SE1030

- 1 灰黄褐色シルト (10YR4/2) 地山ブロック含む。炭化物少量含む。
2 暗灰黄色シルト (2.5Y4/2) 粘性ややあり。地山ブロック含む。炭化物少量含む。
3 オリーブ黒色シルト質粘土 (7.5Y3/2) 地山ブロック含む。
4 灰オリーブ色シルト (5Y4/2) 粘性弱い。2・3層少量含む。

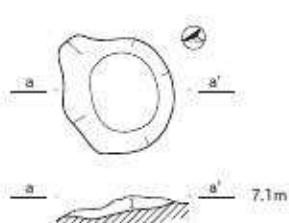
SK804



SK804

- 1 暗オリーブ褐色シルト (2.5Y3/3) しまり強い。地山ブロック含む。
2 暗オリーブ色シルト (5Y4/3) 烧土多く含む。炭化物含む。
3 暗オリーブ色シルト (2層よりやや淡黄色) (5Y4/3) 烧土多く含む。炭化物含む。
地山ブロック含む。焼骨含む。
4 炭化物、焼土層
5 暗オリーブ色シルト (5Y4/3) しまり強い。地山ブロック少量含む。

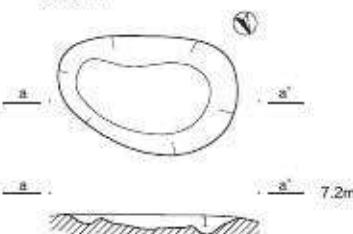
SK719



SK719

- 1 暗灰色シルト (7.5YR4/1) 燃土塊多く含む。焼骨含む。

SC841

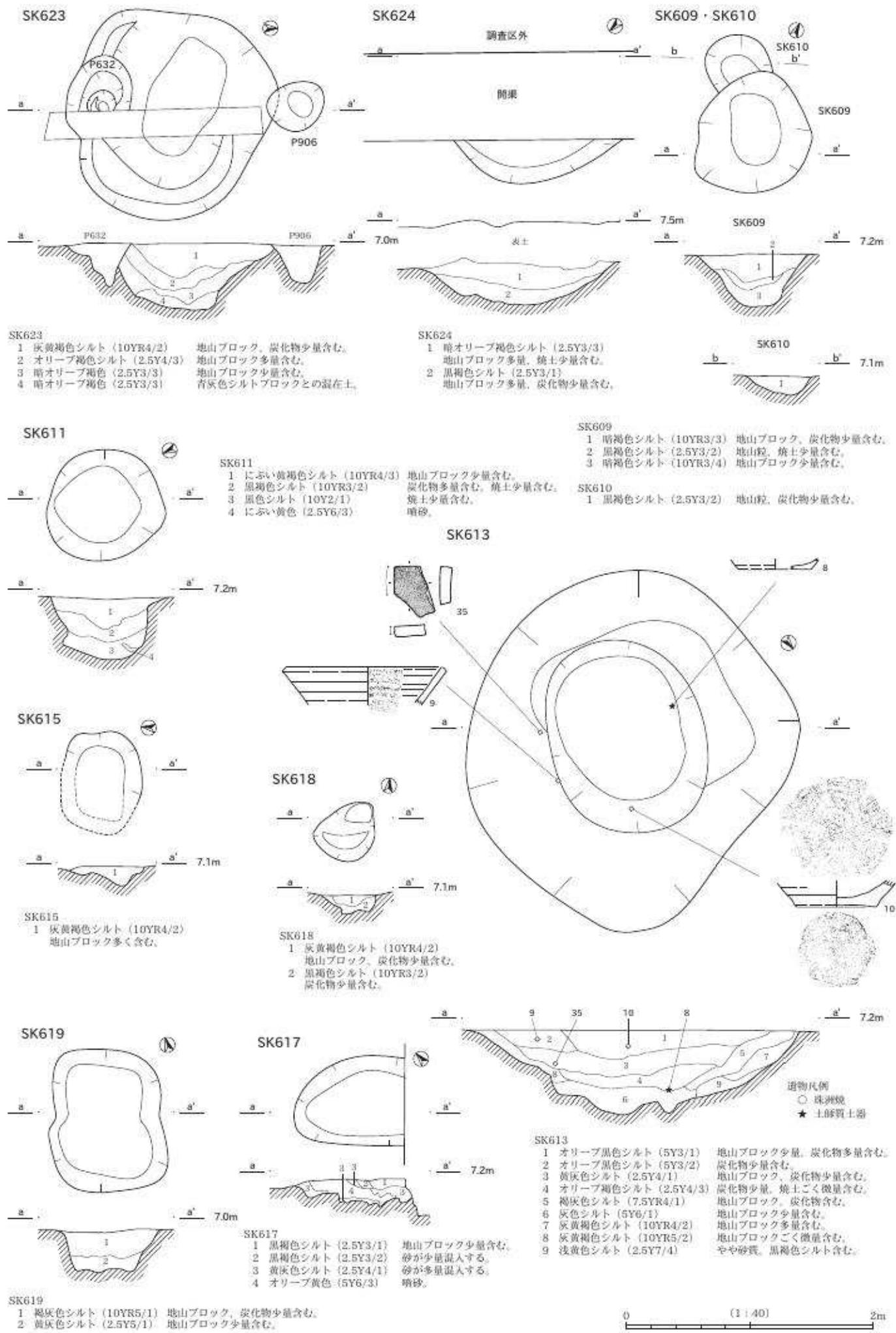


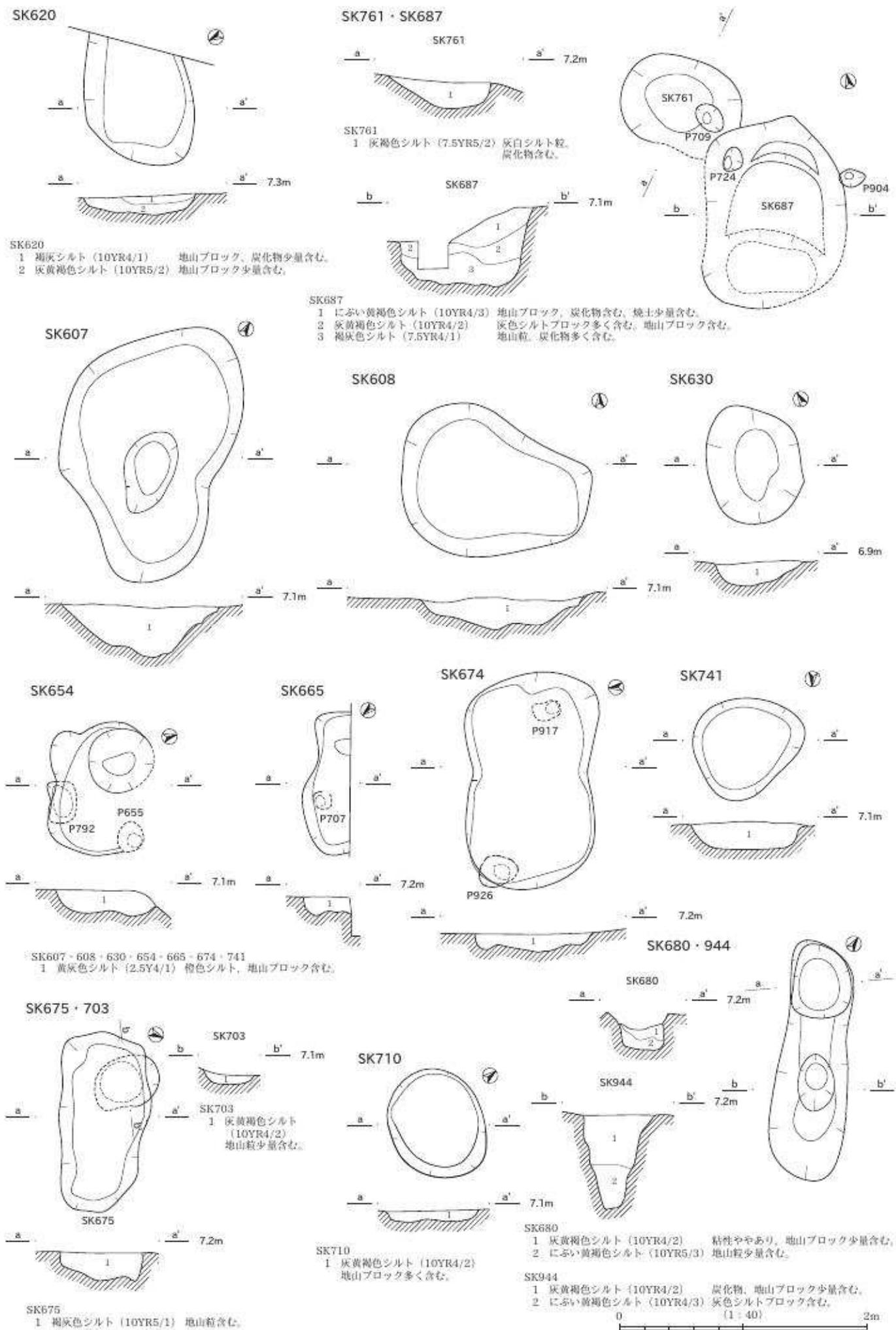
SC841

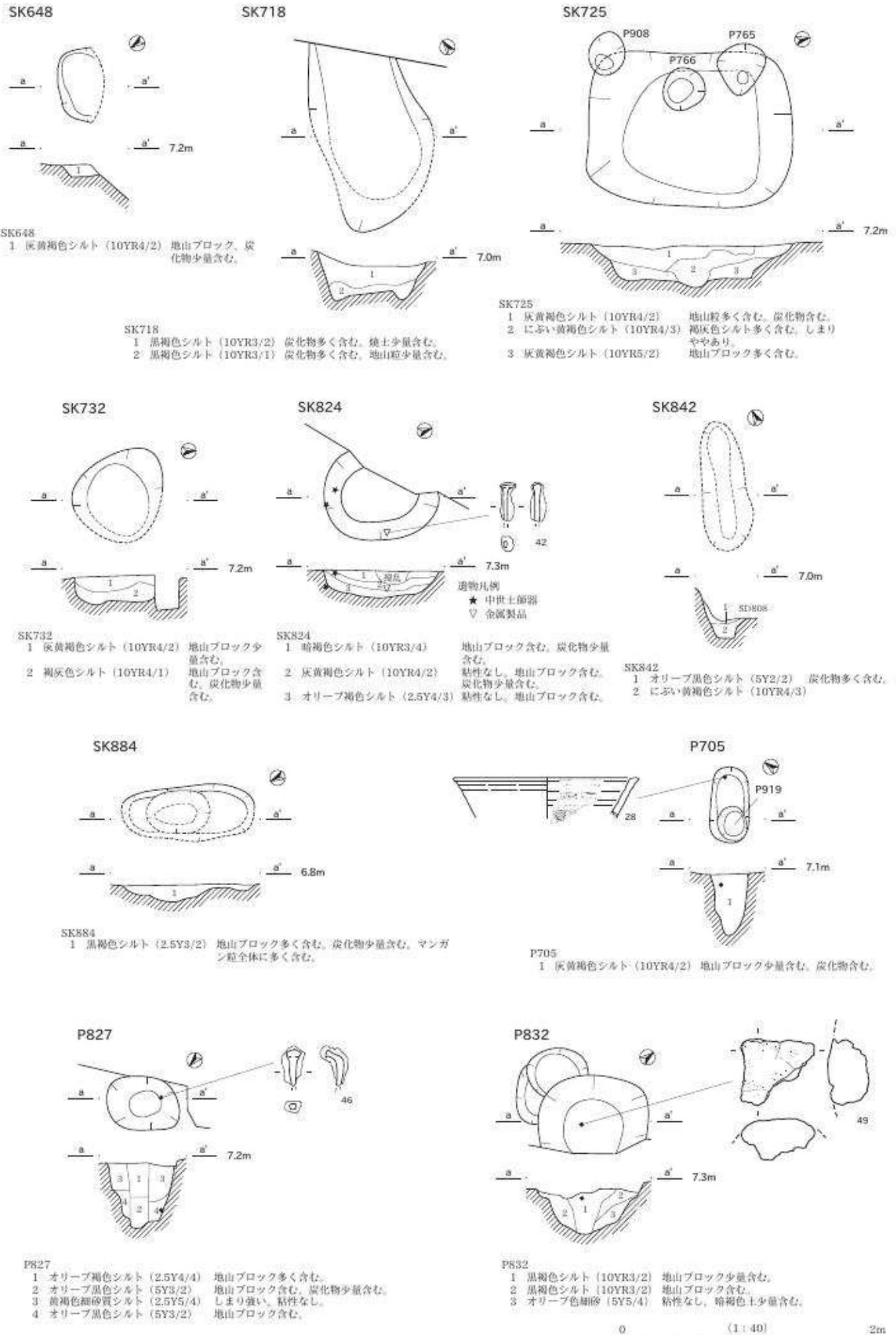
- 1 暗オリーブ色シルト (5Y4/3) しまり強い。粘性弱い。炭化物含む。

図版 16

遺構個別図(7) SK609 ~ 611・613・615・617 ~ 619・623・624

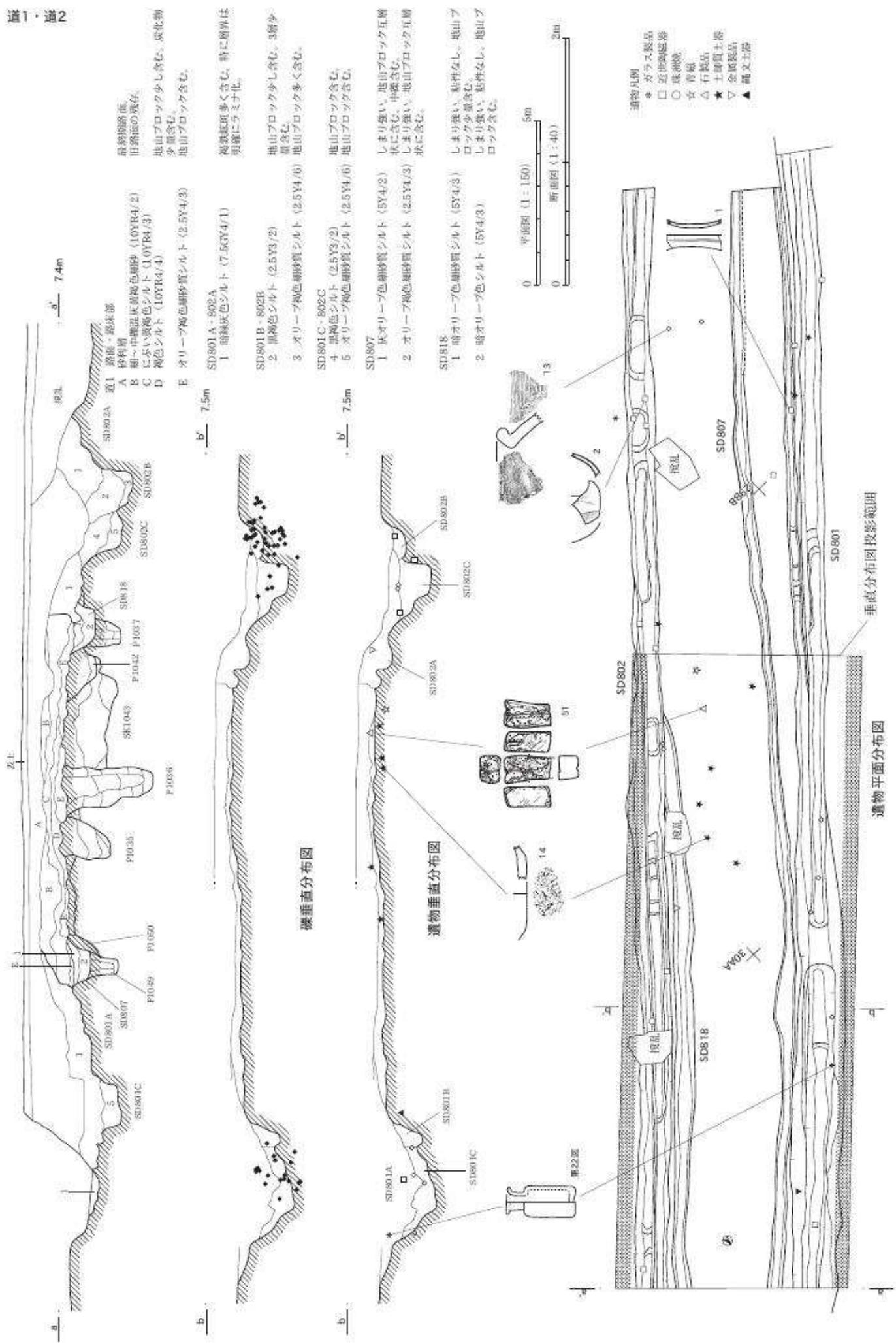


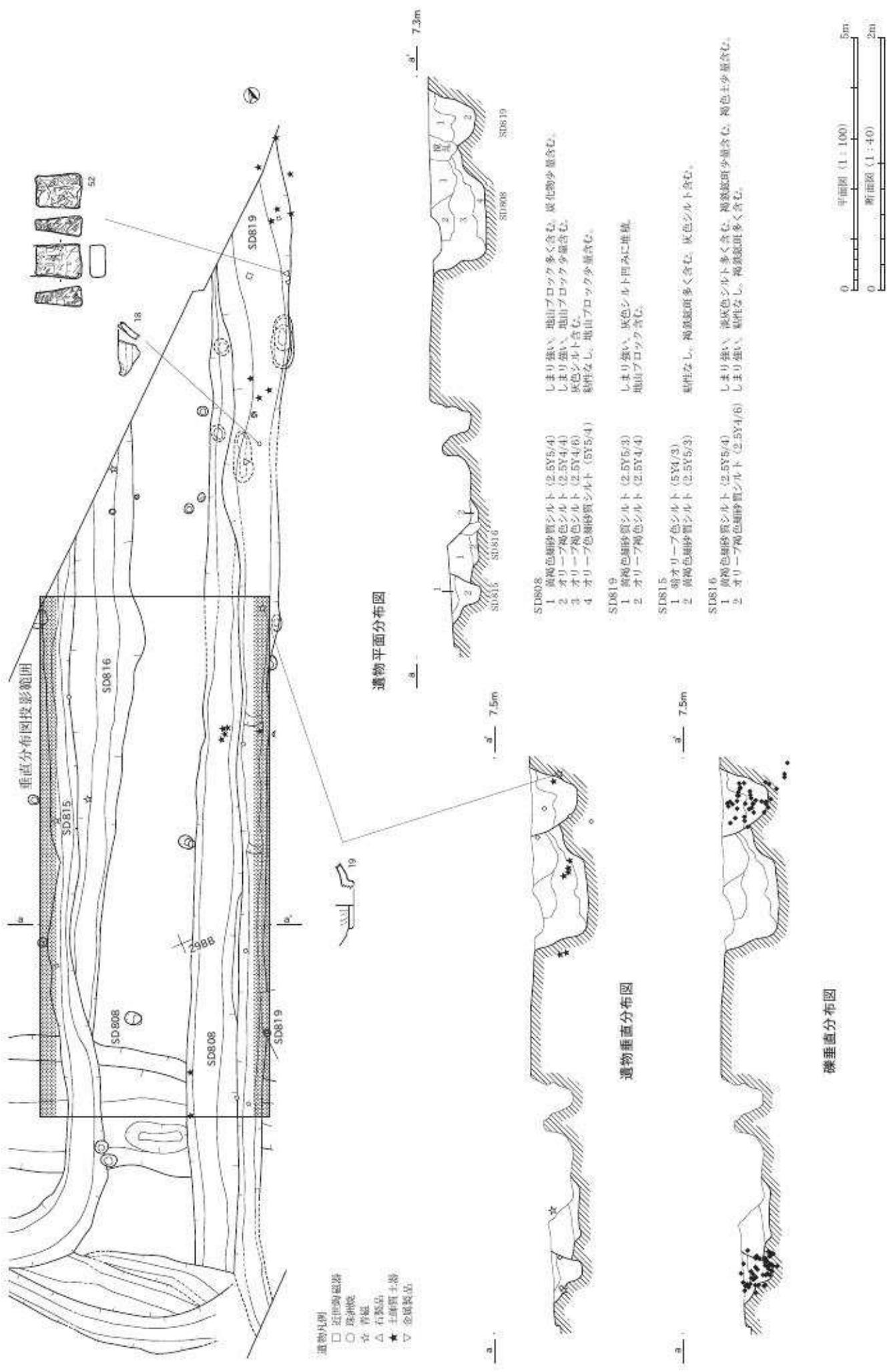




遺構個別図(10)道1・道2

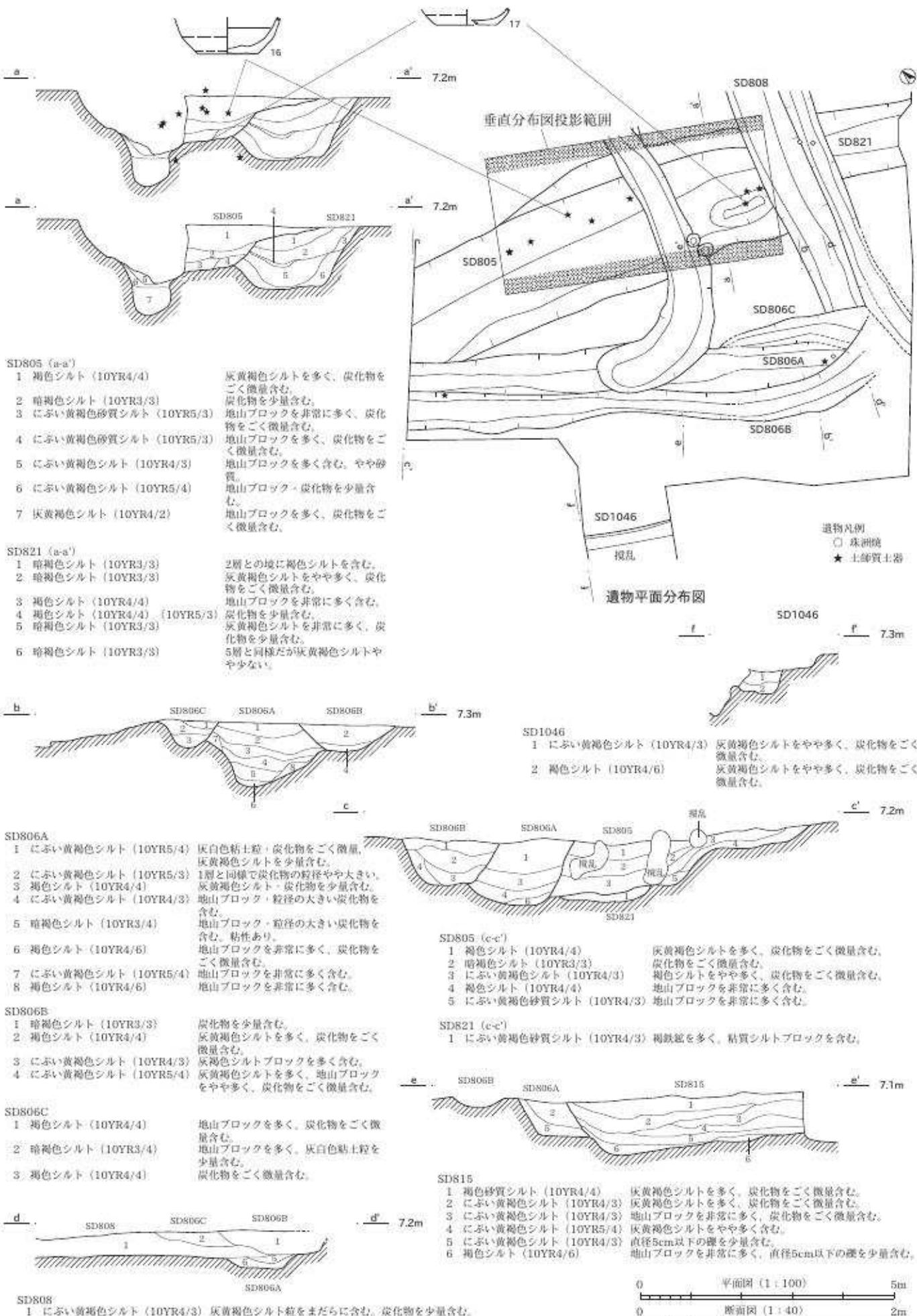
道1・道2



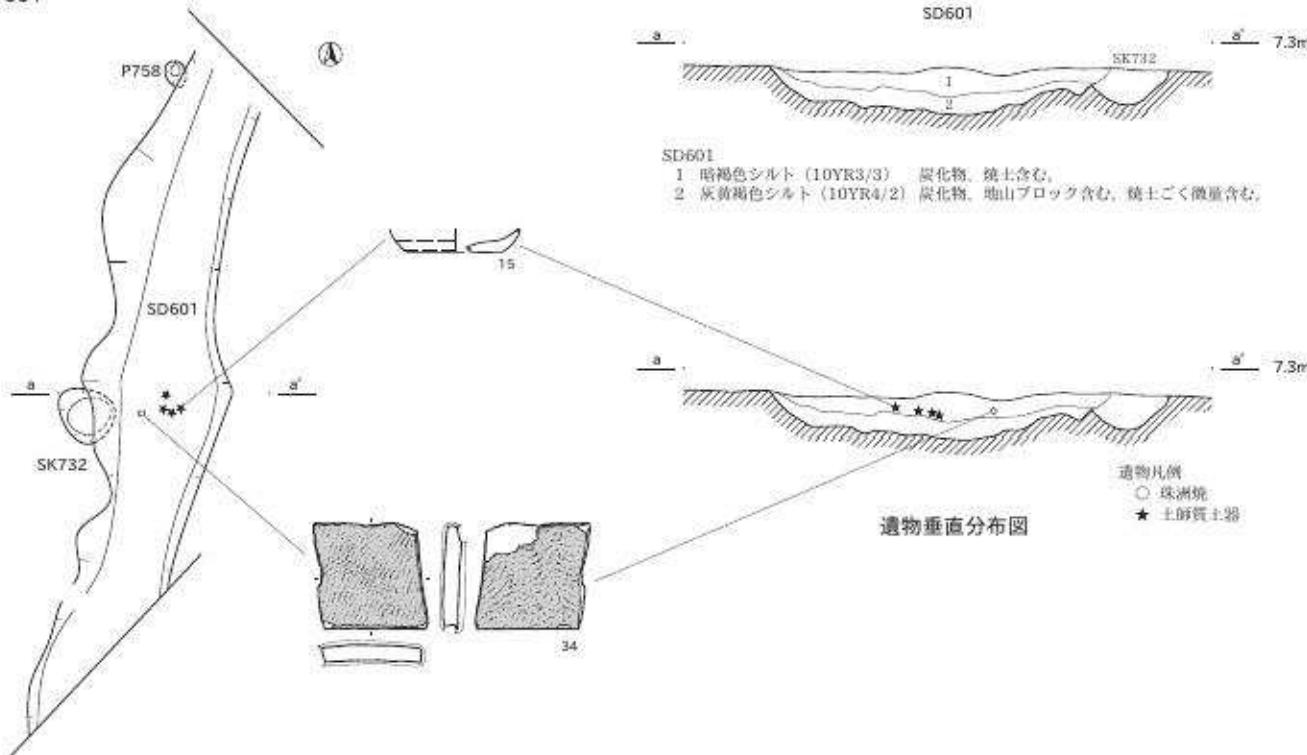


遺構個別図(12) 道3・SD805・821

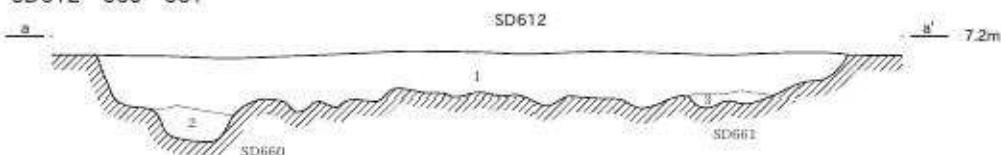
SD805・SD806・SD815・SD821



SD601



SD612・660・661



SD612・SD660・SD661
1 オリーブ褐色シルト (2.5Y4/3) 地山ブロック少量含む。
2 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロック多く含む。
3 灰オリーブ褐色シルト (2.5Y3/3) 灰褐色シルト含む。

SD606



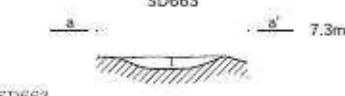
SD606
1 オリーブ褐色シルト (2.5Y4/3) 地山粒少量含む。
2 オリーブ褐色シルト (2.5Y4/4) 地山ブロック、炭化物少量含む。

SD637



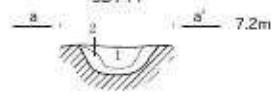
SD637
1 オリーブ褐色シルト (2.5Y4/4) 炭化物含む。

SD663



SD663
1 灰オリーブシルト (5Y5/2) 地山粒少量含む。

SD711

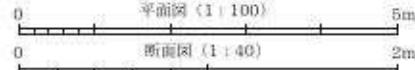


SD711
1 灰灰色シルト (10YR4/1) 地山粒、炭化物少量含む。
2 にいぶい黄褐色シルト (10YR5/3) 地山ブロック含む。

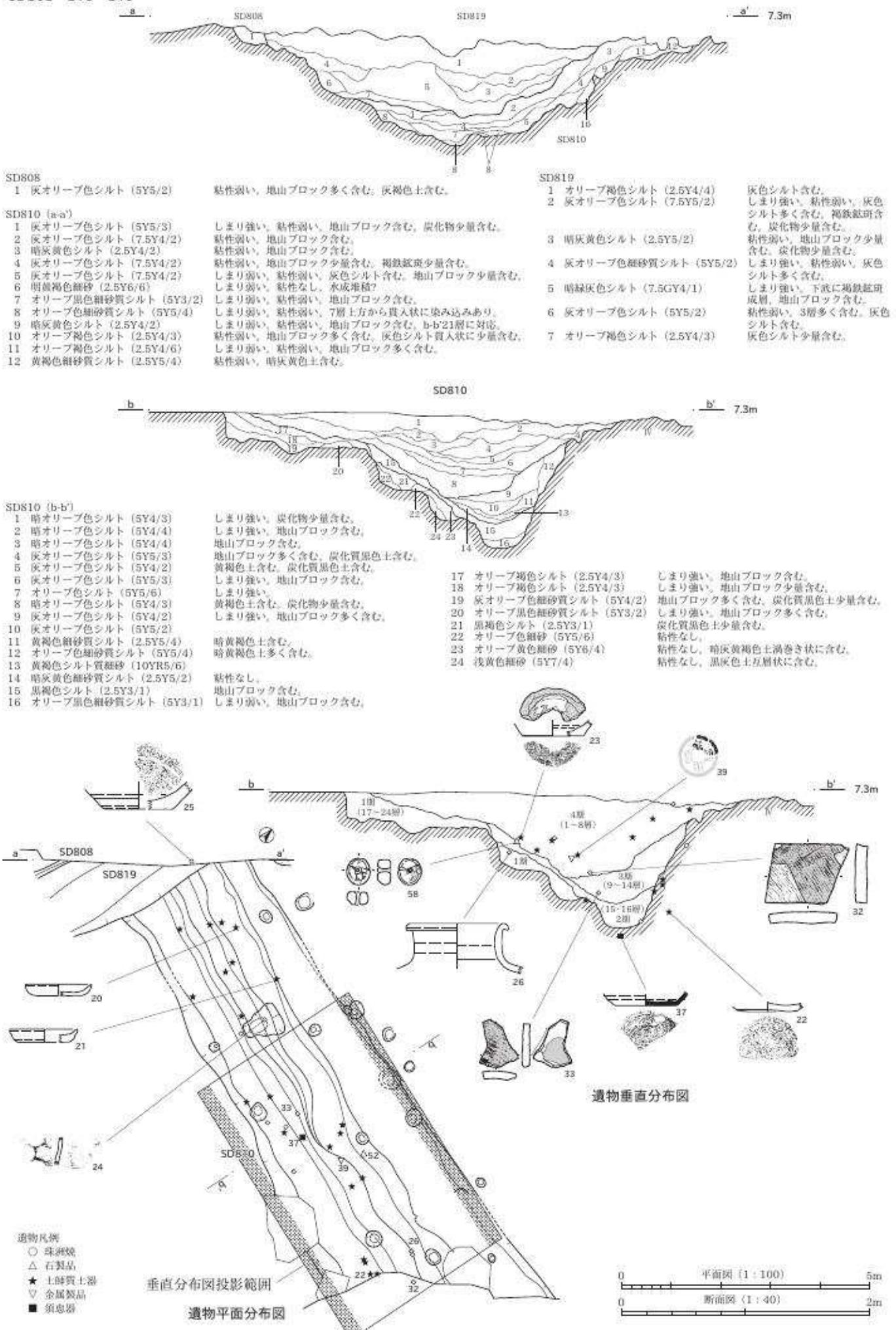
SD825



SD825
1 にいぶい黄褐色シルト (10YR4/3) 地山ブロック含む。

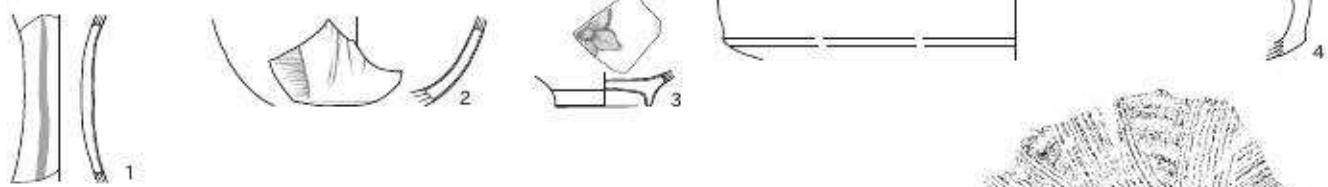


SD808・810・819



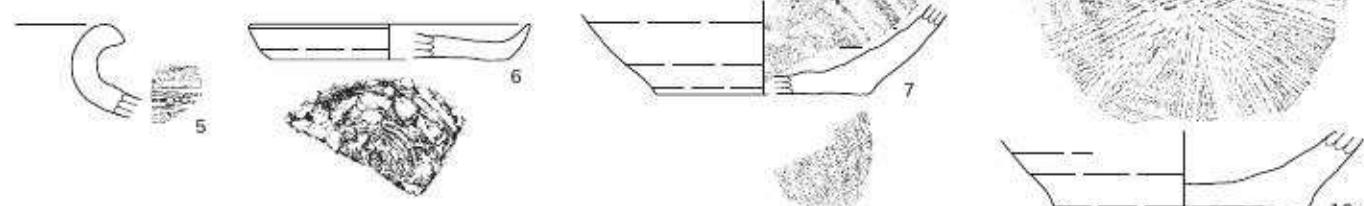
近世の土器

道1・SD801B (1) 道1・SD802B (2~4)

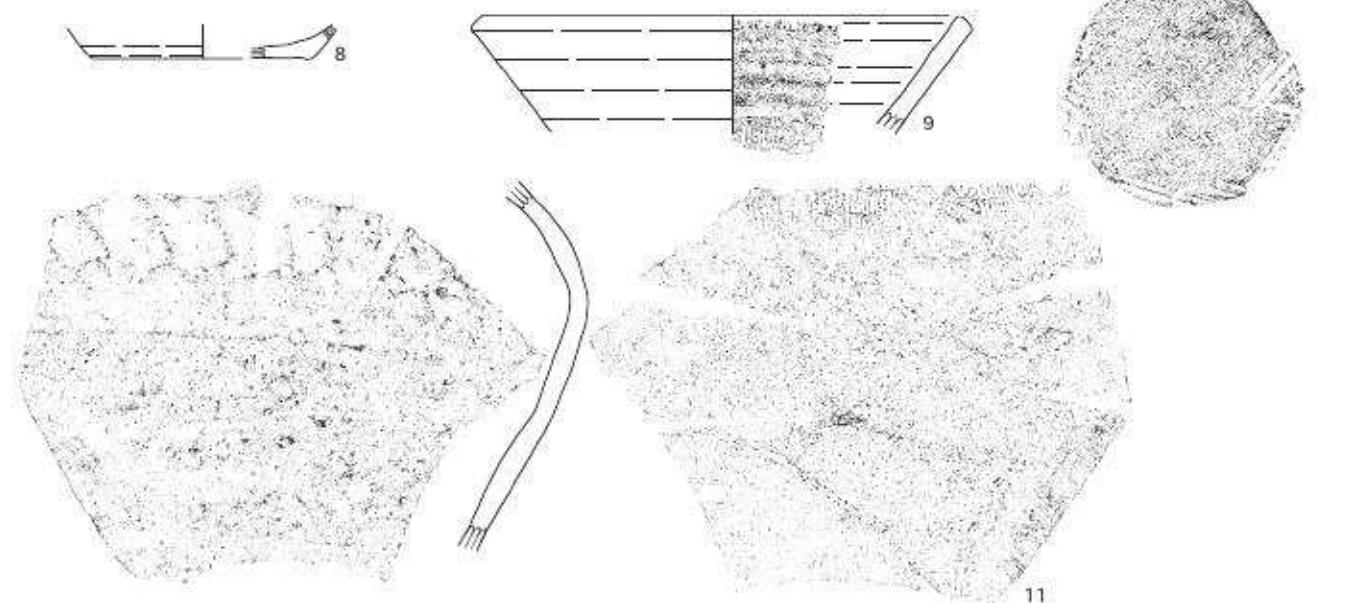


中世の土器

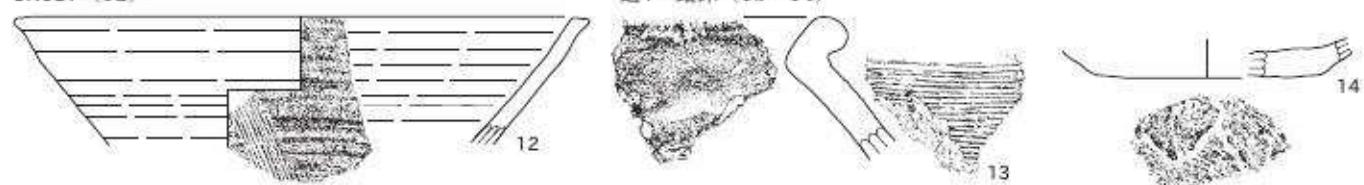
SE646 (5)



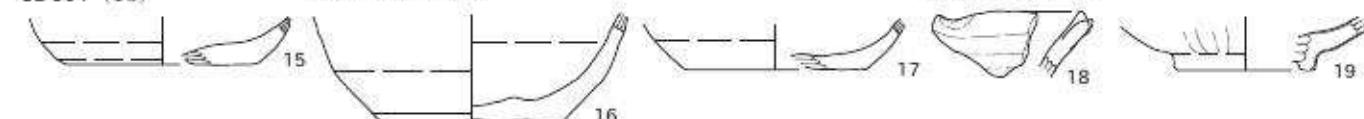
SK613 (8~11)



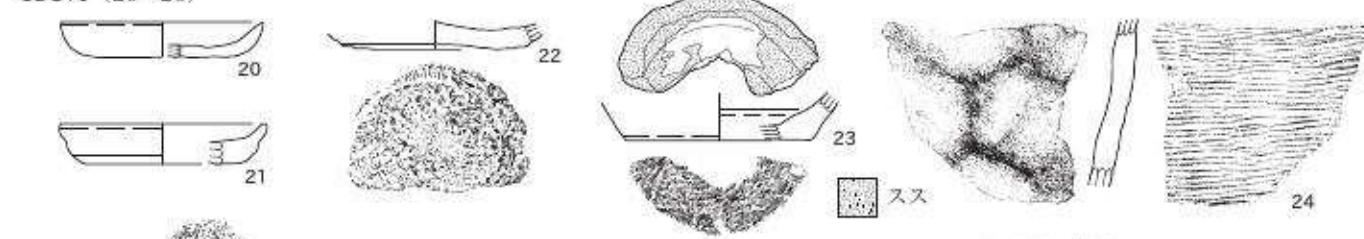
SK687 (12)



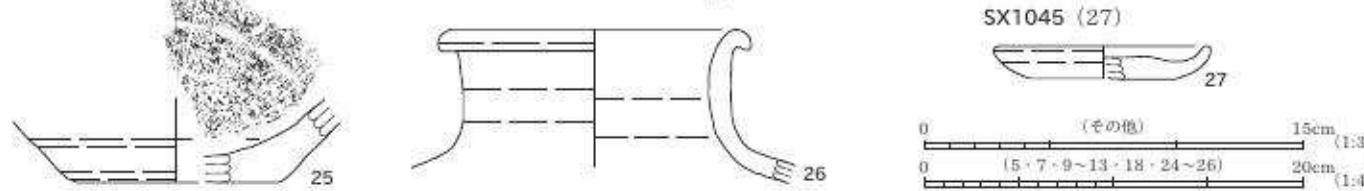
SD601 (15)

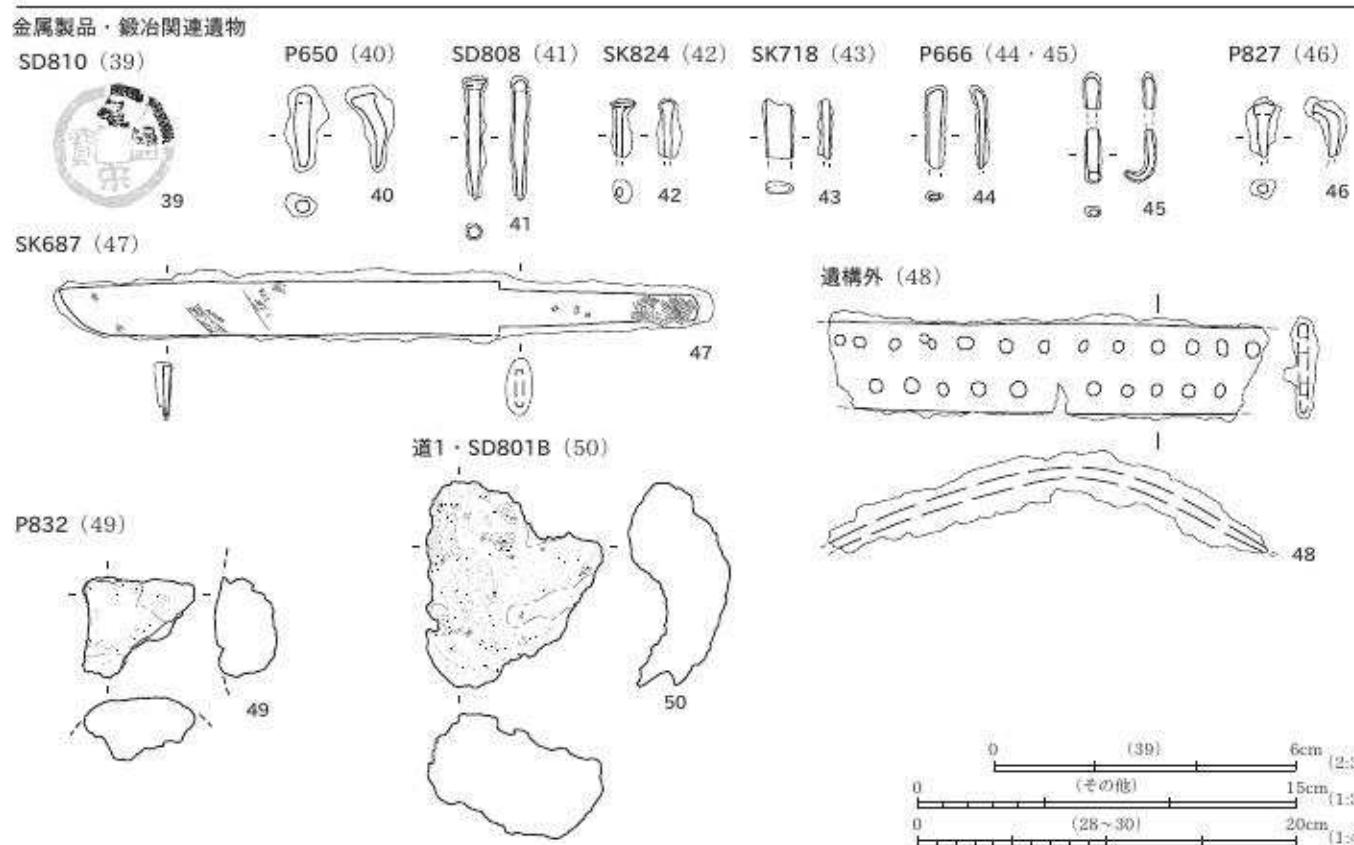
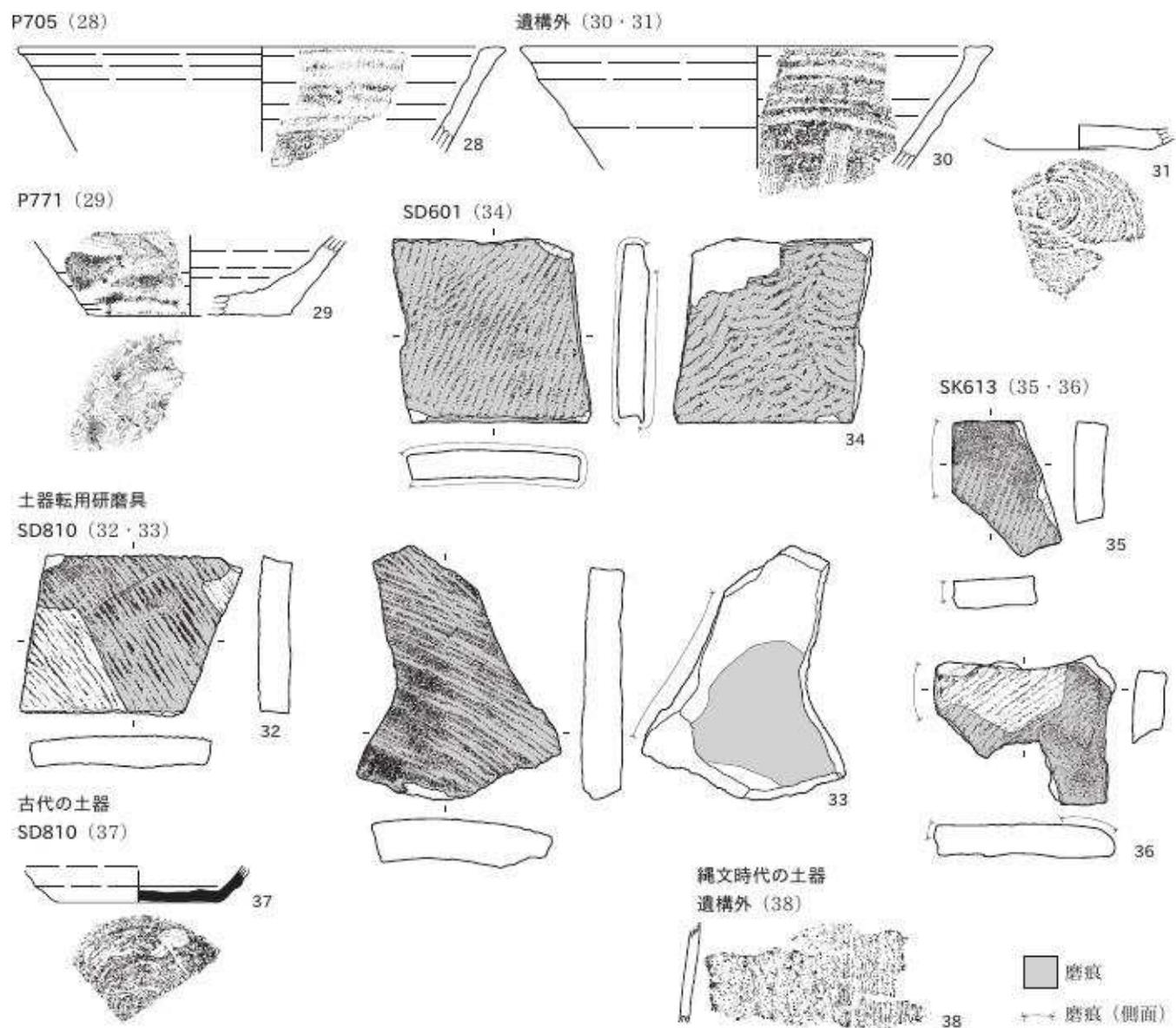


SD810 (20~26)

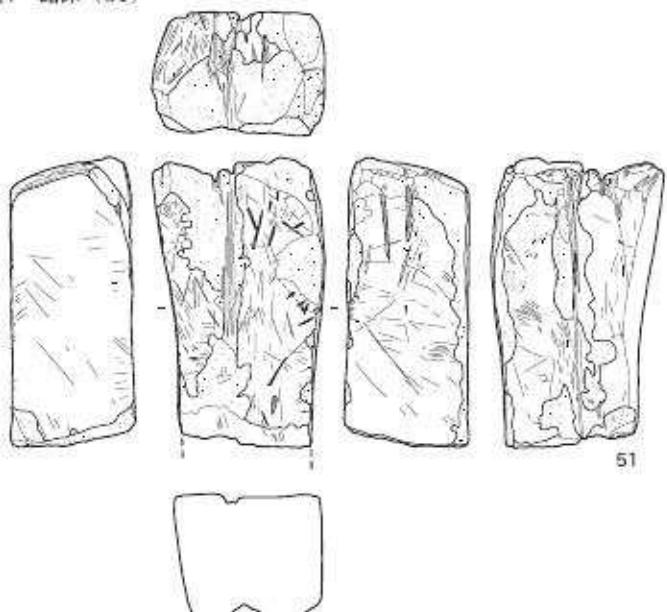


SX1045 (27)

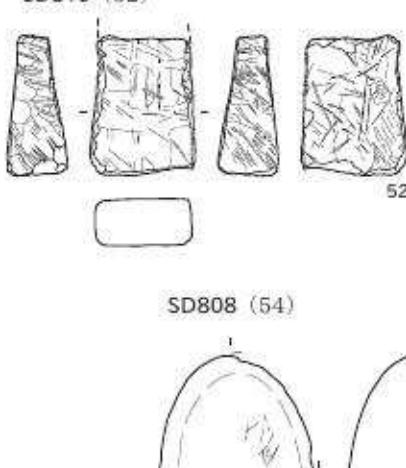




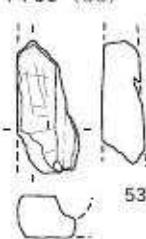
道1・路床 (51)



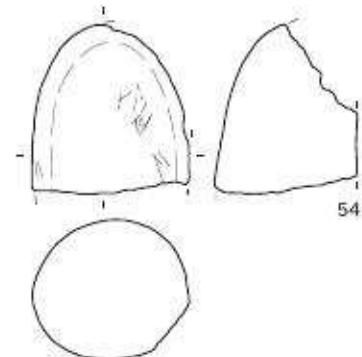
SD819 (52)



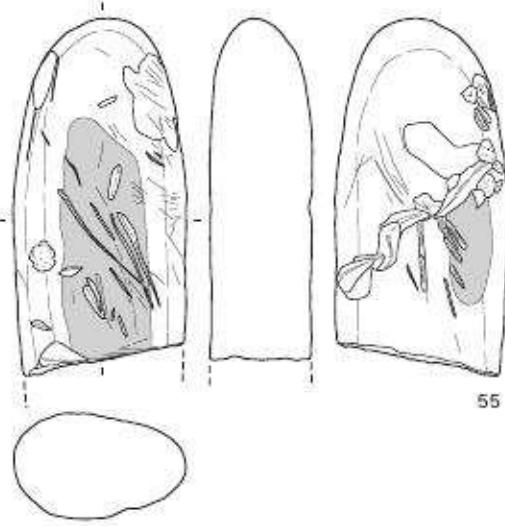
P709 (53)



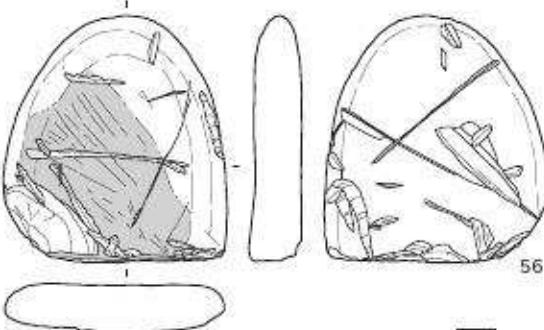
SD808 (54)



SD821 (55)

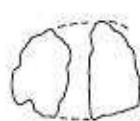
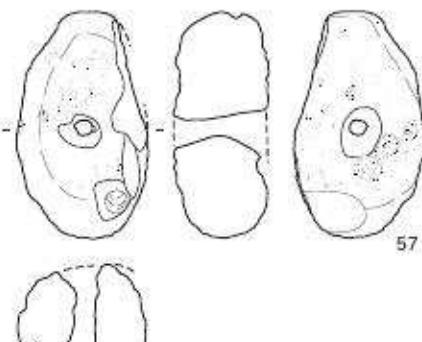


SD802C (56)

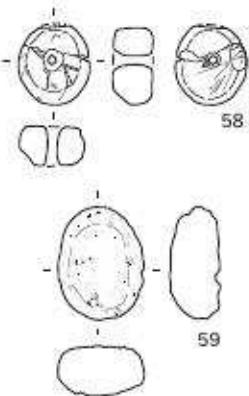


■ 磨痕

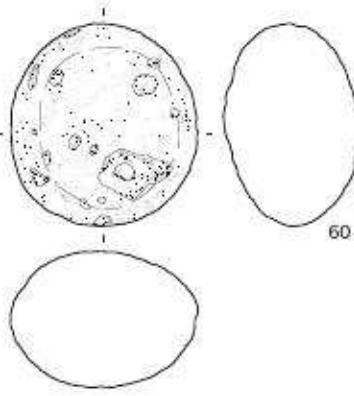
SK609 (57)



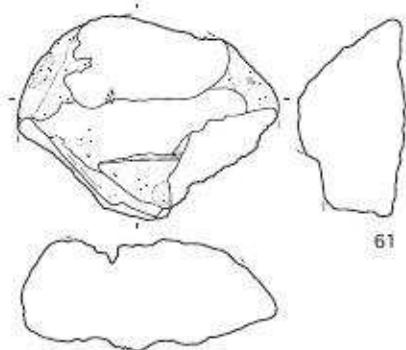
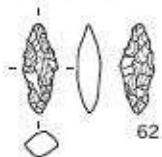
SD810 (58)



遺構外 (59~61)



SD815 (62)





調査区遠景（西から）



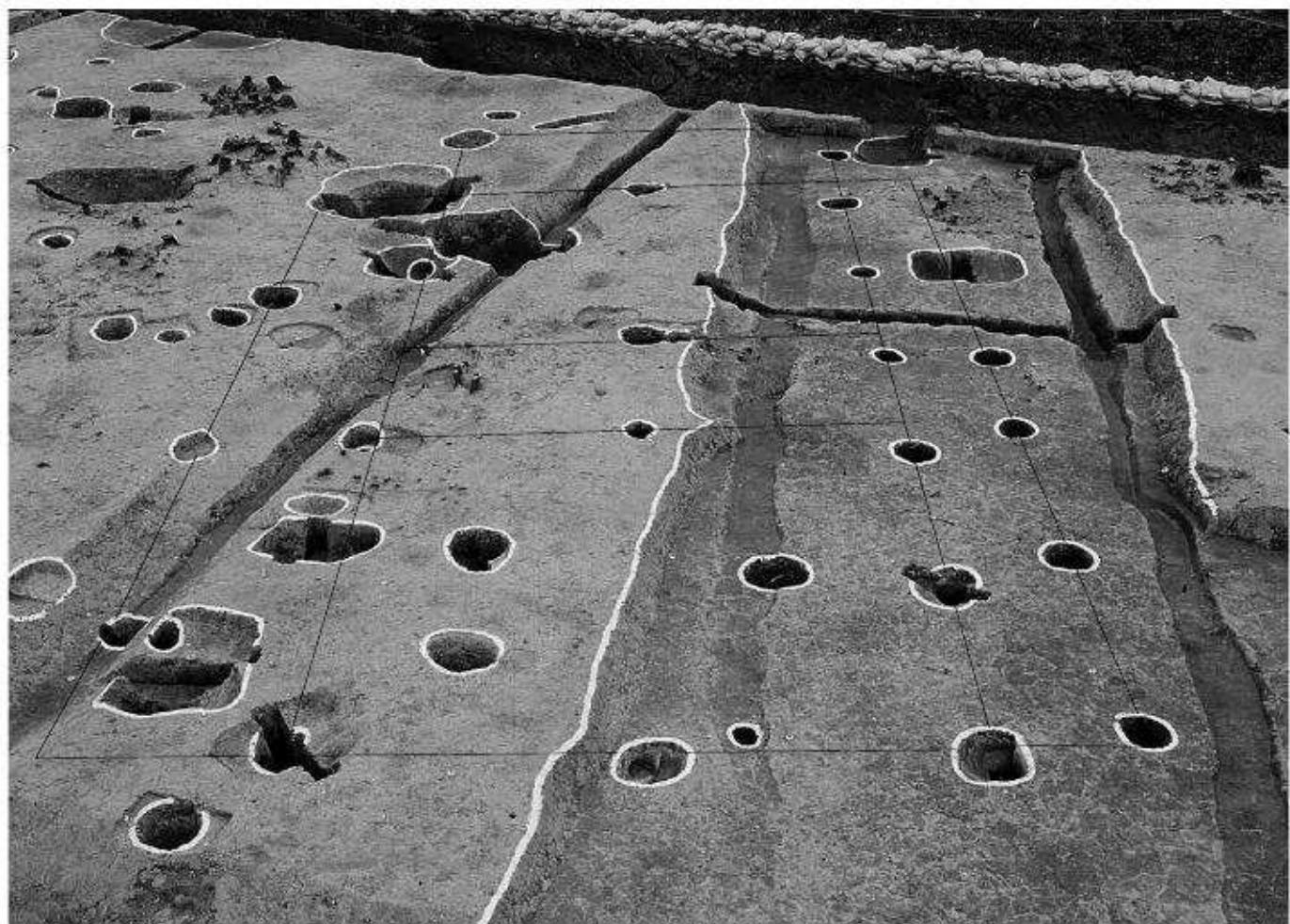
5 区 完掘（南西から）



道 1 完掘（南西から）



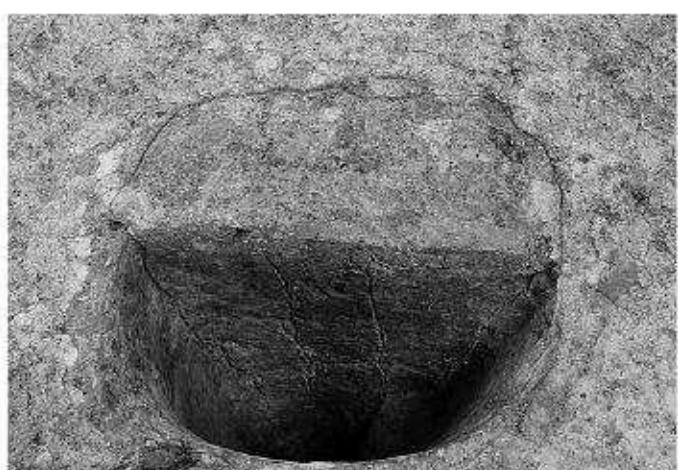
道 4 完掘（南から）



SB774 完掘（西から）



SB774-P658 セクション（北から）



SB774-P681 セクション（北から）



SB774-P682 セクション（北から）



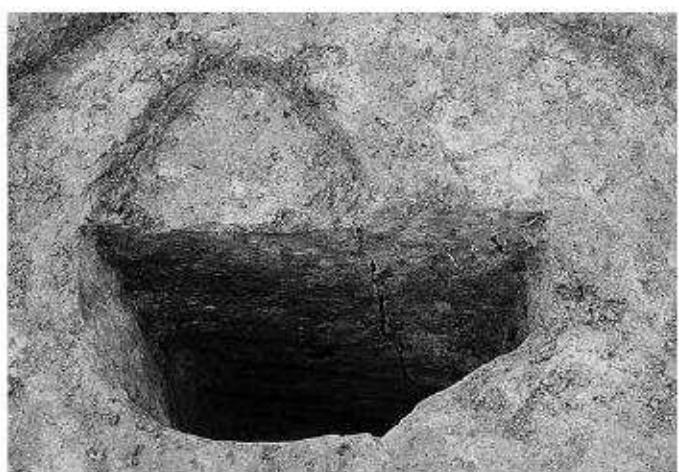
SB775-P797 セクション（西から）



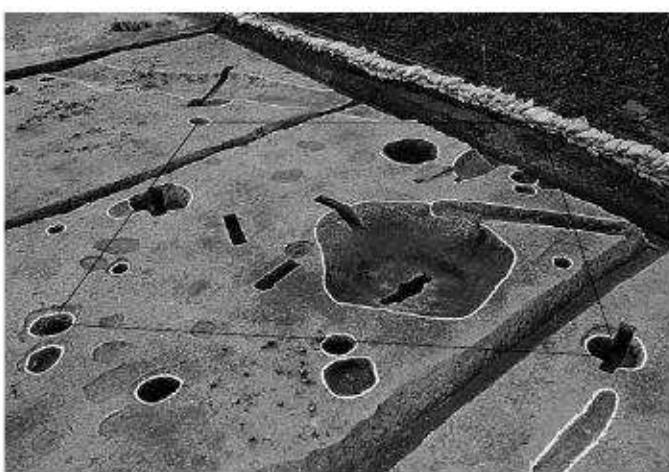
SB776 完掘(東から)



SB776-P639 セクション(東から)



SB776-P691 セクション(北から)



SB777 完掘(西から)



SB777-P764 セクション(東から)



SB1051 検出状況(東から)



SB1051-P828 セクション(南東から)



SB1051-P880 セクション(南から)



SE843 セクション（北東から）



SE843 完掘（北東から）



SE1030 セクション（西から）



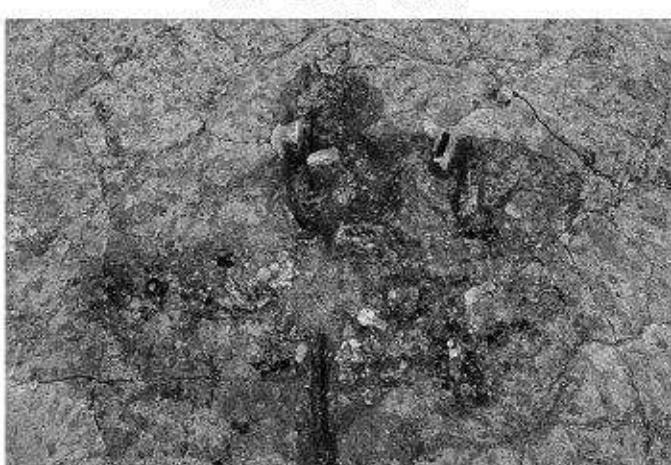
SE1030 完掘（西から）



SK719 セクション（西から）



SK804 セクション（西から）



SK804 骨片・炭化物出土状況（西から）



SC841 セクション（北から）



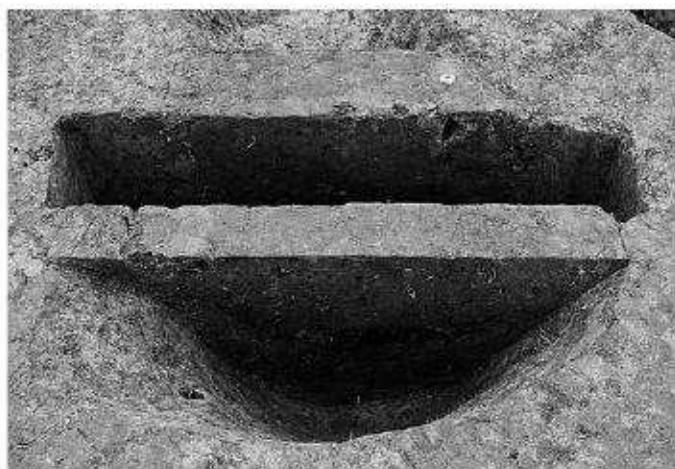
SK623 セクション (東から)



SK623 完掘 (東から)



SK624 セクション (西から)



SK609 セクション (南東から)



SK611 セクション (西から)



SK611 セクション (噴砂) (西から)



SK615 セクション (西から)



SK618 セクション (南から)



SK613 セクション（北から）



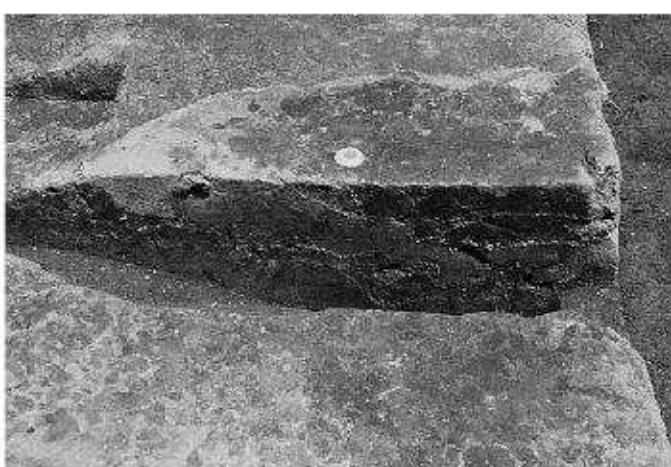
SK613 遺物出土状況（北から）



SK613 完掘（北から）



SK619 セクション（南から）



SK617 セクション（南から）



SK620 セクション（西から）



SK687 セクション（南から）



SK687 遺物出土状況（南から）



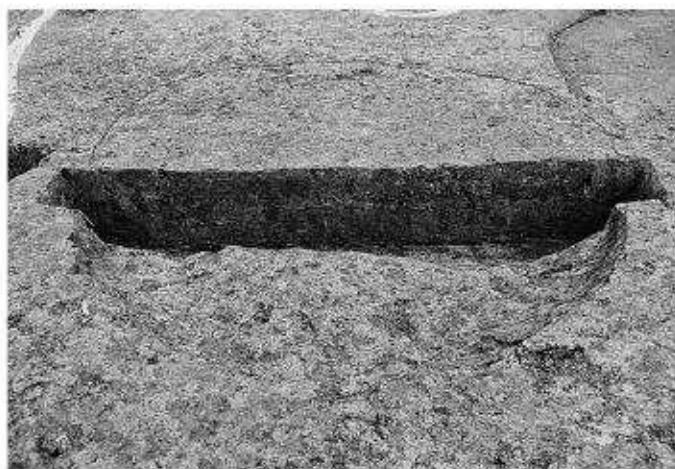
SK607 セクション（南から）



SK648 セクション（西から）



SK703 セクション（東から）



SK710 セクション（東から）



SK944 セクション（西から）



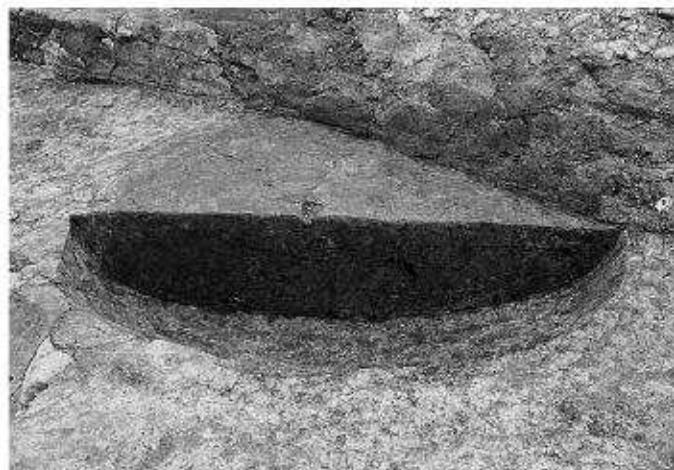
SK718 セクション（南から）



SK725 セクション（東から）



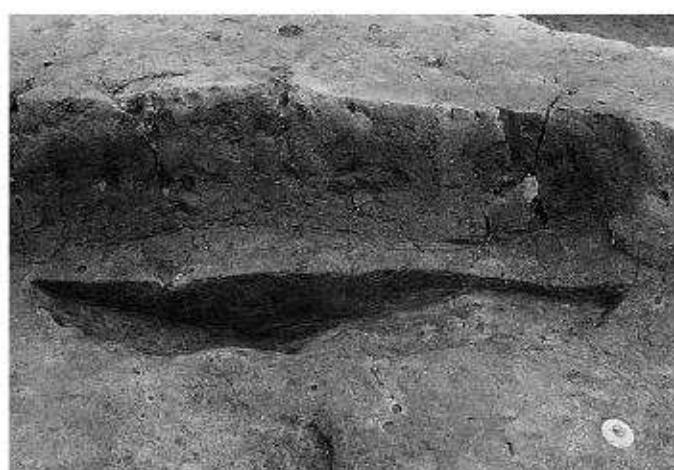
SK732 セクション（東から）



SK824 セクション（東から）



SK842 セクション（南から）



SK884 セクション（西から）



SD601 セクション（北から）



SD612 セクション（東から）



SD606 セクション（北から）



SD637 セクション（南から）



SD711 セクション（北から）



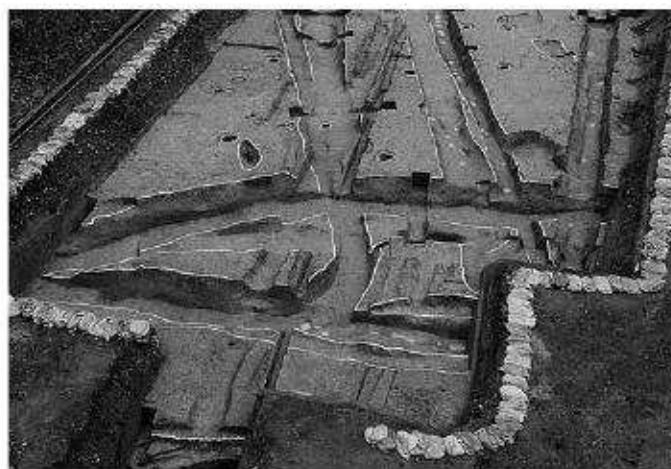
SD810 セクション 1 (西から)



SD810 セクション 2 (南東から)



SD810 完成 (西から)



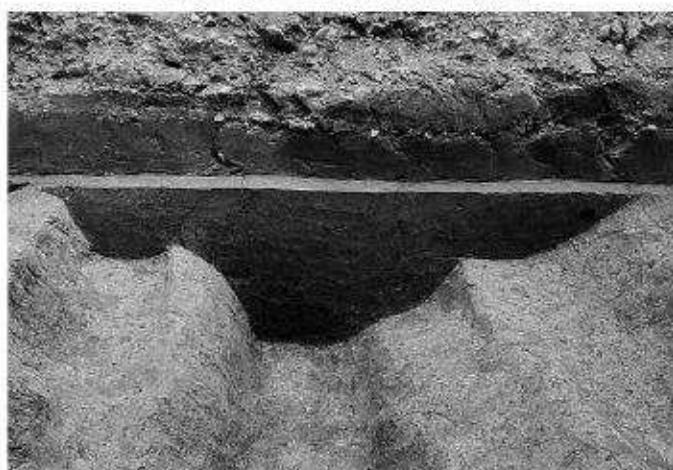
6 区 南西側溝群 (南西から)



SD821・SD805 セクション (南東から)



SD821・SD806・SD805 セクション (南東から)



SD806 セクション (北西から)



SD1046 セクション (南東から)



SD806・SD815 セクション（南東から）



SD806・SD808 セクション（北西から）



SD815・SD816 セクション（北東から）



SD819 完掘（北東から）



SD807 完掘（南西から）



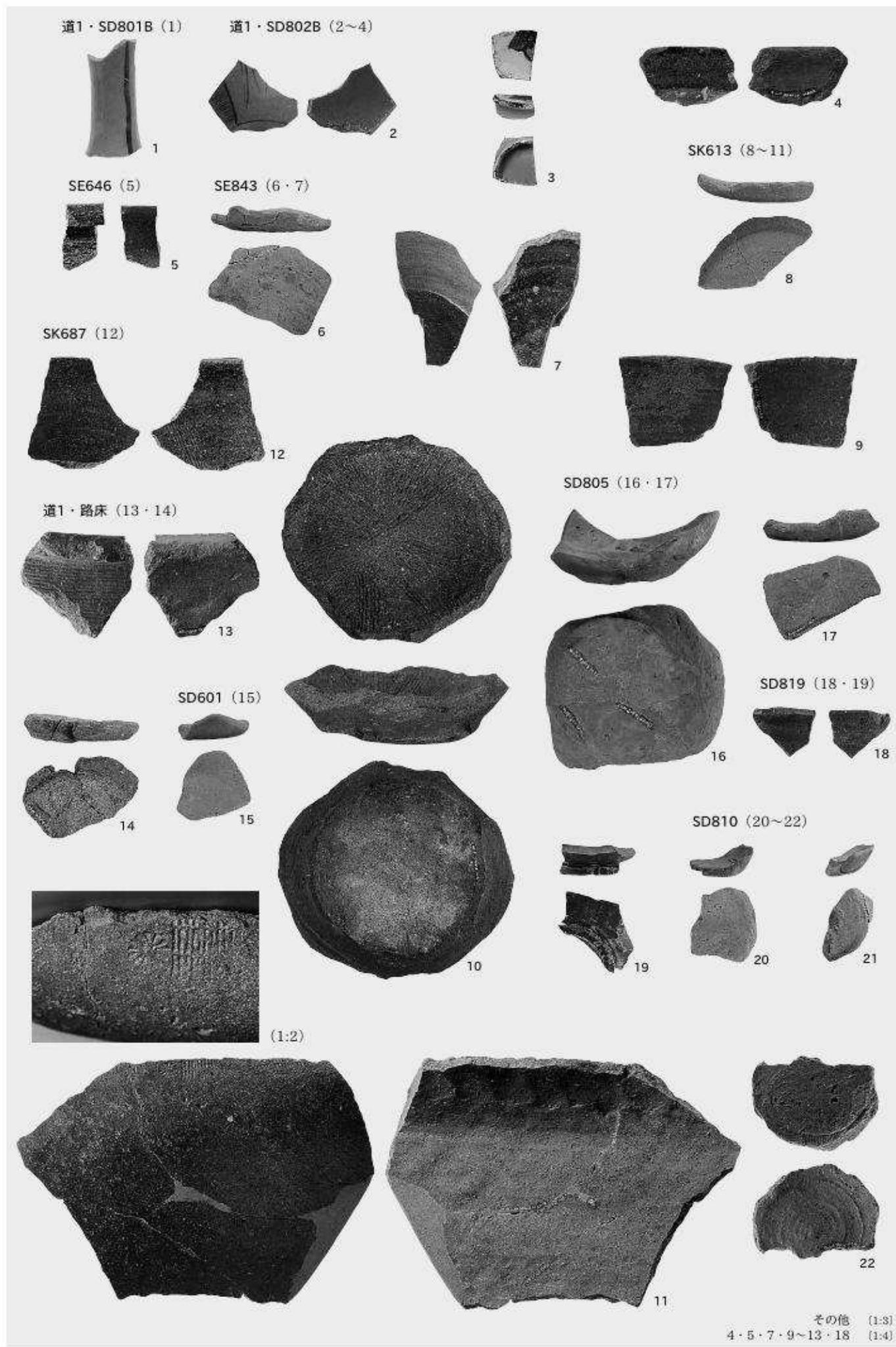
道 1 路床 セクション（南西から）

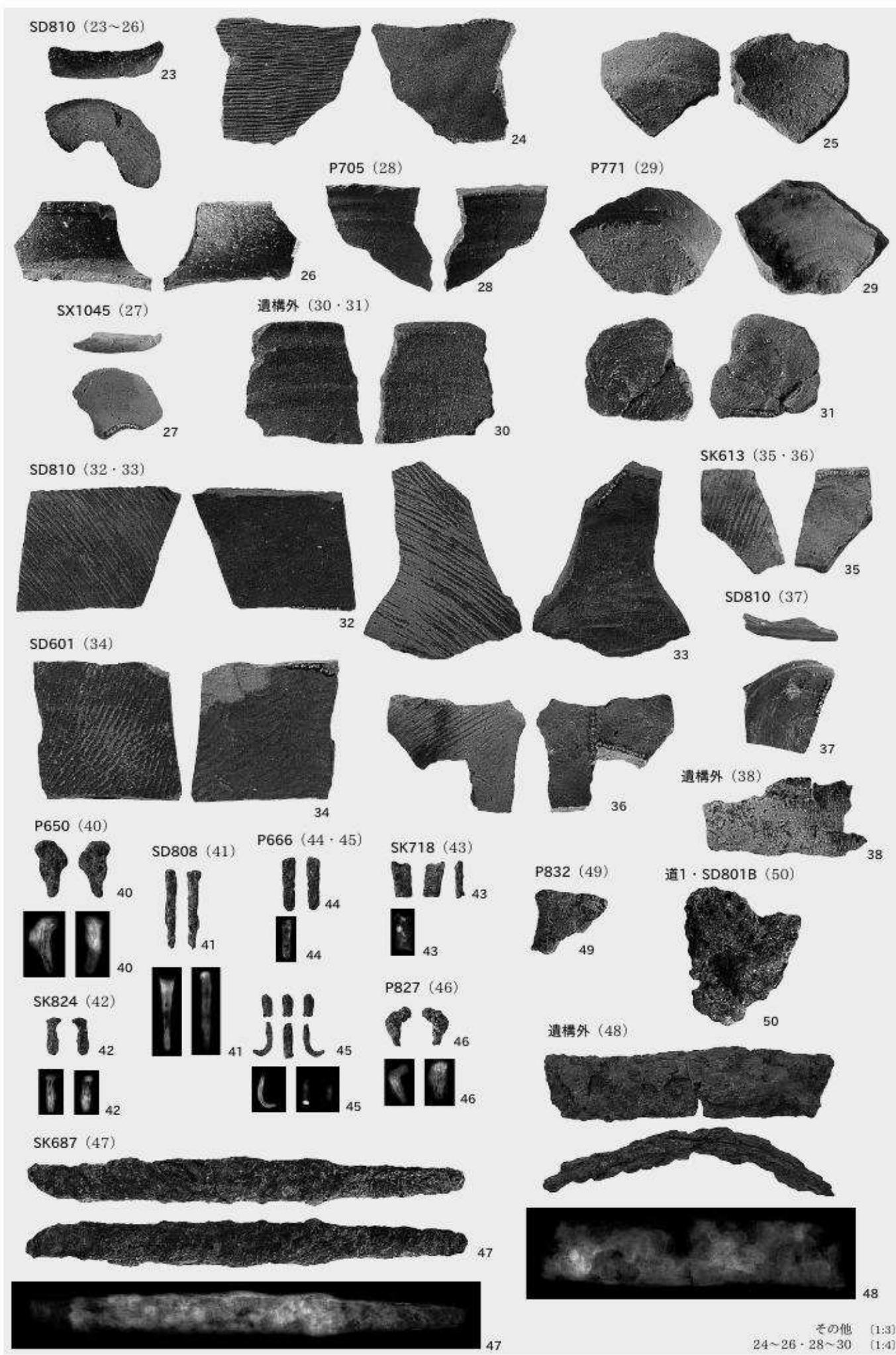


SD801B 繰出土状況（南西から）



SD802B・SD802C セクション（南西から）





道1・路床 (51)



SD819 (52)



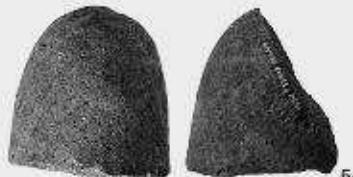
52

P709 (53)



53

SD808 (54)



54

SD821 (55)



55

道1・SD802C (56)



56

SK609 (57)



57

SD810 (58)



58

遺構外 (59~61)



59



60



61

SD815 (62)



62

その他 (1:3)
61 (1:4)
62 (2:3)

報告書抄録

ふりがな	やまぐちのなかいせきさん							
書名	山口野中遺跡Ⅲ							
副書名	一般国道49号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書							
巻次	XII							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第266集							
編著者名	小野本牧（埋文事業団）、城前喜英、渡邊大士（株式会社古田組）、千葉博俊、斎藤崇人、馬場健司、高橋 敦（パリノ・サーヴェイ株式会社）							
編集機関	公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250(25)3981							
発行年月日	2016(平成28)年3月31日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度 分 秒	東経 度 分 秒	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因	
やまぐちのなかいせき 山口野中遺跡	にいがたけん あがの し くわらざ 新潟県阿賀野市大学 つきかたない 月崎地内	152234 400	37° 49' 49"	139° 12' 29"	20150415～ 20150807	1,479	一般国道49号 阿賀野バイバ ス建設	
所取遺跡名	種別	時期	主な遺構		主な遺物			特記事項
山口野中遺跡		近世	道2条、土坑7基		陶磁器			
	集落跡	中世	掘立柱建物7棟、井戸3基、土坑28基、道2条、溝17条		土師器・青磁・珠洲焼・瓷器系陶器・土器転用研磨具・鍛冶関連遺物・金属製品・石製品			
		古代	なし		須恵器			
		縄文	なし		土器・石器			
要約	<p>近世の道路は、出土遺物や絵図の検討から、敷設時期は18世紀代と考えられる。規模・構造ともに全国的にも大規模な部類に入り、地域の重要な交通路と位置付けられる。</p> <p>中世の土地利用は、大小の掘立柱建物・井戸・大型土坑等で構成される居住域（I期）から火葬場（II期）へと変遷する。時期はI期が13世紀後半を中心とし、II期が14世紀後半以降と考えられる。I期の居住域は、境塙遺跡の「百津湯の拠点的な町場」と道路で結ばれており、両遺跡の密接な関係がうかがわれる。</p>							

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第266集

一般国道49号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書XII

山口野中遺跡Ⅲ

2016(平成28)年3月30日印刷

2016(平成28)年3月31日発行

編集・発行 新潟県教育委員会

〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1

電話 025(285)5511

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1

電話 0250(25)3981

FAX 0250(25)3986

印刷・製本 株式会社ハイングラフ

〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号

電話 025(233)0321

頁	位置	誤	正
抄録	編著者名	斎藤崇人	斎藤崇人
抄録	市町村コード	1 5 2 2 3 4	1 5 2 2 3